

---

BLACK CITY &quot;**特殊能力捜査官**&quot;;

夏川四季

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

BLACK CITY ” 特殊能力捜査官 ”

### 【Nコード】

N8176N

### 【作者名】

夏川四季

### 【あらすじ】

6年前のある事件をきっかけで、世界の歯車は大きくずれはじめた。

世の中の表舞台で活躍するようになった超能力。

そんな世界の発展の陰で能力者の事件も後を絶たない。

それを取り締まるべく警察に5年前、対能力者課が立ち上がる。

その名も、SAAF

正式名称：特殊能力犯罪捜査課

通称：強襲課

そんな命知らずの捜査官を勤めるのは、高校生の少年少女たち。

悪を捕らえ、正義を貫く。

痛快超能力ファンタジー。

stage3からは、ライトノベル風な書き方で行くことと思っています

## 武器・マシンファイア

### 武器

#### SAAF仕様エアガン

柳刃やなぎば 龍司りゅうじが使用する黒色のエアガン。

能力に耐えられるように作られた完全オーダーメイドの一品。

チタン合金製の為、見た目、重量は本物の拳銃にそっくりである。

ベレッタM92Fをベースに作られていて、グリップ部分にはSAAFと彫り込まれている。

装弾数15発。特殊BB弾を使用し、有効射程距離30mを誇る。

銃の精度に関しても、普通の拳銃と遜色なく、その威力は、普通のエアガンから9mmパラベラム弾を使用する拳銃並まで、龍司の能力次第で無限大に調節できる。

#### ワルサーPPK

水沢みなざわ 紅葉もみぢが愛用する拳銃。ドイツのカール・ワルサー社が開発した小型セミオートマチック拳銃である。

PPKは、ワルサーPP(Polizei Pistole)警察用拳銃を私服警官向けに小型化したもので、名称のKは「短い」を意味する(クルツ)の頭文字である。

装弾数7発。32ACP弾を使用。

全長155mm、重量635gのこの拳銃はカール・ワルサー社が誇る小型拳銃である。

#### 32ACP弾

一般的な小口径の拳銃弾なので一発ごとの威力は低い、安価で命中度が高い弾丸である。

USP

蒲原 齋かんばら いつきが愛用する拳銃。正式名称：ユニバーサル・セルフローディング・ピストル

ドイツの銃器具メーカーH&amp;K（ヘッケラ&コッホ社）が開発した自動拳銃。

蒲原が使用しているUSP technicalと通常モデルとの主な違いは、サイレンサー装着を前提とした装備がなされていることである。サイレンサー装着可能なネジ切り済み延長バレル、ハイ・ターゲットイングサイトである。

装弾数15発。9mmパラベラム弾を使用し、有効射程距離50mを誇る。

9mmパラベラム弾

比較的反動が弱い一方で、非常にフラットな弾道を示す特徴がある。この実包の優れた点は、小さく、多弾装化が容易であることとである。

ミネベア9mm自動拳銃

スイスのSIG社及び当時傘下だったドイツのザウエル&amp;P;ゾーン社が開発したSIG SAUER P220を、新中央工業（現：ミネベア）がライセンス生産している。スライドには「9mm拳銃」の文字、シリアルナンバー、各自衛隊ごとのマークが刻印



> i 1 2 4 5 6 | 0 0 1 9  
<

【マシンの説明については作者の独断と偏見で書かれています。】

プロローグ 『アブノーマル』 改訂版

> i 1 2 4 5 5 | 0 0 1 9 <

「ひい、助けてくれ！」

男は、壁にもたれ込みながら叫んだ。

「金ならいくらでもやる、だから命だけは！」

ガチャリ

男の2メートルほど前にそいつの姿はあった。

「死にな」

重々しい銃声が響き、男はピクリとも動かなくなった。

大量の血が地面をまるで生きているかのように赤く染める。

午後のどかな公園

制服姿の高校生二人が互いに顔を背けてベンチの端に座っている。



「なにが嬉しくて、真つ昼間からヤロー2人とベンチに座ってるのやら」

右端に座る赤毛の青年はほおずえをついてため息をついた。

黒い制服姿の彼はなんだか暇そうに座っている。

人懐っこそうな顔に二重のブラウンの瞳。

癖毛なのか、髪の毛は少しツンツンとしている。

「別に、ついて来いなんて頼んでないぞ。てゆうか、帰れ」

左端に座る黒髪の青年は、そう言ってコーラを飲む。

彼も赤毛の少年と全く同じ制服を着ており機嫌悪そうにコーラを飲む。

こちらの少年はキリッとした黒い瞳で、赤毛の少年とは反対の性格の持ち主に思われる。

俺の名は、柳刃やなぎば 龍司りゅうじ。

周りからみれば、何処にでもいそうな高校2年生だった。

「柳刃が、紅葉とデートするという情報が入ったからには見逃すわけにもいけねえからな」

ブツ!!

赤毛の少年の予想外の言葉に俺はコーラを吹いた。

「ギャー!! 目がー」

「悪い蒲原」

心のもっていない謝罪をする。

「いや〜。なかなかの刺激だったぜ」

コイツは、蒲原かんばら 斎俺いっきの同級生だ。

見てもらって分かるようにただのバカだ。

いつもどこかでバカやってる奴なのだが、まあ、俺の悪友であり、  
親しい友人だ。

「それにしても、平和だな……」

スズメが、公園の敷地内をチヨコチヨコと動いている。

「ゴラァ! コイツがどうなってもいいのか!」

いきなり公園にフルフェイスのヘルメットをかぶった男が入ってきた。

右手の出刃包丁を近くで遊んでいた小さい女の子に突きつけて警官と対峙している。

「ロリコンか？ 蒲原、お前と気が合いそうな奴がいるぞ」

「はあ！ 勝手にロリコンにするな。色男のお前がいけ」

「ふざけんなよ。色男ならベンチで男と一緒に座つとらん。後、先に行っておくが男が好きなわけでもないからな」

「じゃ、どうするんだよ」

「ジャンケンでどうだ？」

「OK」

蒲原がグーで俺がチョキ。言い出しっぺの俺が、一発の勝負で負けた。

「じゃあねえな。ボウズ、ちょっとこれ借りずぞ」

公園を横切る小川で遊んでいた少年から、あるものを借りる。

「オイ、ロリコン！」

「あゝ！ 何だよ。おまえは黙ってる！」

「やっぱ、ロリコンだったか。まあ、いつか……」

俺は、少年から借りたどこにでもある水鉄砲を構え引き金を引いた。飛び出した水は、常識では考えられないような速度で直線的な軌道で男めがけて突進する。

水の銃弾は男の腹部に直撃し、男をそのまま2メートルほどぶっ飛ばした。

「俺は、能力者なんだよ。媒体を通す能力者……相手が悪かったな」と言っても、コイツには聞こえてないだろう。

警官がすぐに男に手錠をかける。母親は女の子を抱いて泣いていた。

「高圧縮した水をぶつけたのか。まあ、あんだだけ威力がありゃ気絶するわな」

「ボウズ、ありがとな。」

とりあえず、水鉄砲を返しておく。

「お兄ちゃん、スゲ〜!!!」

少年は目を輝かせて言った。

「ご協力ありがとうございました」

警官は一礼した後、男を連行していき、女の子の母親からは、何度もありがとうございます。

と感謝された。

母親と女の子が公園から出て行くのと入れ違いで入ってくる少女が見えた。

「ゴメン！待ったでしょ」

短い赤い髪を揺らして少女が走り寄ってきた。

彼女は、美少女と言われるに相応しい容姿の持ち主だ。

鮮やかな赤の瞳に、肩ぐらいまでの長さのこれまた鮮やかな赤髪の毛。

明るくて行動派といった言葉がそのままびったりと当てはまってし

まう。

「遅かったな、紅葉。何かあったのか？」

彼女は、水沢みなざわ紅葉もみじ。

彼女も俺と蒲原と同じ高校に通う高校2年生だ。

名が体を表すように、紅葉のように華麗で、だが決して自ら飾ろうとしない素直で元気な少女だ。

「ちょっと、暴力事件があつてね」

そう言つて紅葉は、苦笑いを浮かべる。

「相変わらずたくましく育つたもんだな」

蒲原が、余計なことを言つたので、俺が止めなければ再び戻ってきた平和を地獄にするところだった。

はっきり言つて、こいつらのケンカはハンパないからな。

この前なんか、某体育館が消えるところだったからな。

といつても、半壊したんだから、しばらくは使い物にはならないだらうけど…。

「なんで、こいつがいるのよ」

紅葉が、不機嫌そうな顔をして蒲原を睨む。

「実は、どこからか情報が漏れてたみたいで」

「お前ら、デートじゃなかったのか！」

お前は、俺たちがデートすると思ってたのか。

残念だったな。

普通の高校生ならデートかもしれないが、紅葉が言ったように俺たちは、普通の人間でもないし、普通の高校生もやってない。

そもそも、お前はアイツの情報に乗せられすぎなんだよ。

「とりあえず、これ頼まれたものね」

紅葉は左手に持っていた紙袋から布にくるんだ物を取り出す。

サンキュー。

覚えてくれてたんだな。これがないと俺はキツイからな。

「そいつを渡すということは、一悶着あるんか」

「嫌なら、後ろで隠れててもいいわよ」

「はっ、俺が怖じ気づく訳ないだろ！」

挑発に乗りやすいから扱いやすい。

でも、蒲原がいたとなればかなり楽に仕事が進みそうだ。

そこところは、蒲原に感謝だな。

「今回のミッションは、…」

紅葉は、メモ帳とA4サイズの見取り図を取り出して説明を始める。

俺たちは、これから向かう場所での段取りする。

近隣の住民からの通報である廃工場に出入りする怪しい人影がある  
そうだ。

これぐらいなら一般警察の管轄なのだが、どうやら今回の件には俺  
たちと同じ能力者が関わっている可能性が高いたると一般警察に  
は手が余るわけだ。



そこで、俺たちの出番だ。能力者には、能力者をということで5年ほど前に警視庁に置かれたのが特殊能力犯罪捜査課である。

高校生が捜査課にいることは、さほど驚くことではない。

と言っても誰でもなれる訳でもない。

能力者あるいはベテラン警官であること。

次に、能力を使った何らかの戦闘スタイルを持っていること。

これが第一条件になる。俺は、この捜査課入ってからもう3年になる。

それなりに事件は経験してきてるつもりだ。

ちなみに蒲原は4年、紅葉は3年だ。

チームを組んで動くようになってからはいつも俺と蒲原と紅葉の3人だ。

蒲原は裏口から、俺と紅葉は正面から突入みたいだな。

見取り図を見るからにはさほど難しい形でもって無さそうだ。

問題は数だ。

小さい工場だからこその中はどうなってるか分からない。

星野さんが言うには、5、6人程らしい。

ちなみに、星野さんは、俺たちの上司の警察官だ。

3年前まではニューヨーク市警につとめていたエリート刑事で非常に頼りがいがある人だ。

「龍、聞いてた？」

「分かってる。コレならいけるだろう」

「よし、話はまとまったみたいだな。早速出発するとするか」

星野さんがクルマのキーを持って来た。

星野さんは、身長が180程の高身長。優しそうな笑顔が特徴。

俺たちの、兄さんの存在の人物なんだよな。

俺たちは、星野さんの運転する国産スポーツカーに乗り込み目的地に向かう。

住宅街を抜け手すぐの海辺にその建物はあった。外装は錆びてしまっていて看板も傾いている。

よっばど前から廃工場になっていたようだ。

蒲原は、静かに裏口に向かう。

俺と紅葉はそつと入り口のシャッターを上げる。

すると、簡単にシャッターは開いてしまう。

「鍵はしてないみたいだな」

「そうね。……これは、真新しいタバコね」

真新しいタバコか、最近人が入った確かな痕跡だな。

紅葉は愛銃、ワルサーPPKをホルスター抜き、そつと進んでいく。

小型のこの拳銃は、私服警官などがよく持っている。

小さくて帯銃してもばれにくいのが特徴の紅葉の、お気に入り拳銃だ。

俺たち能力者として、むやみに能力を使うとすぐに体力を奪われてしまふのでこういった、捜査の場合は拳銃を持って行くのは当たり前前である。

もちろん能力者の犯人も拳銃などの武器に頼ることが多い。

俺は、制服の内ポケットに特別仕様のエアガンが入っているか確か

める。

こいつは、普通の拳銃なみに重たい。グリップにはSAAFと彫られていて、そんじょそこらのエアガンで無い。

俺が本気を出して撃つても壊れないように造られている特注品。

しかし、他人が撃つと何ともないエアガンである。

まあ、俺の能力に耐えられるように作ってるだけだからな。

建物内には、ドラム缶や古い車などけっこう物が残っている。

そんなものをよけ、地下へ続く階段を降りていく。

階段のスペースが一人分しかない。

階段を下りきると、細長いコンクリートの通路が奥に延びている。

拳銃のセーフティーを解除しゆっくり静かに進む。

通路の突き当たりに、古ぼけたドアがあり隙間からは光が漏れている。

このドアの向こうには必ず犯人がいるはずだ。

腕時計の針は、5時19分50秒を指している。

作戦決行まで後、10秒。

紅葉は、ドアの右側に構える。

後5秒。俺は、取っ手に手をかける。

3、2、1、0。

ドアを思いっきり開け。中に飛び込む。

「手を挙げる！」

蒲原が向かいのドアから入ってくるのが見える。

部屋の中には、作業している男3人だけだ。

突然の俺たちの登場驚いた三人のうちの1人が、テーブルにおいてあった拳銃を取り上げようとする。

刹那。

蒲原の愛銃、漆黒のUSPが火を噴いた。

USP、ドイツの銃器メーカーであるヘッケラー&コッホ社が開発した自動拳銃。蒲原が持っているのは、USPモデルの中でも性能が高いUSP テクニカル45モデル。

装弾数15発のこの拳銃はH&Kが誇る名銃だ。

1発目で男が手に持った拳銃を落とし、2発目でテーブルにおいてあったもう1つの拳銃をはじく。

流石、蒲原やるとなったらしっかりと仕事してくれる人物だ。

3人とも結局すぐ手を挙げ、俺と蒲原で男たちに手錠をかける。

「ここで何してたの？」

テーブルの上に置いてある薬品を手に取りながら紅葉が男たちに尋ねる。

「じゅ、銃弾を作ってたんだよ」

「へえー。銃弾ね」

蒲原は、男たちの後ろに積んであるケースの山から一発の銃弾を取り出す。

「見たことない弾だな。何の弾だ？」

その弾丸には、2本の赤いラインが引かれている。

見た感じは、9ミリパラベラム弾のようだが…。

「さあな。俺たちは、作らされてただけだから知らないな」

どうやら、男は嘘をついてなさそうだ。

署で調べるしかなさうだな。

「星野さんに連絡入れるとくか」

バタンツ

「死ね！」

突如ロッカーから男が拳銃を手に飛び出してきた。

俺は、動じず振り向きぎわに胸ポケットからエアガンを抜き出す。

瞬時にサイトを男の手に合わせ、引き金を引く。

飛び出した特注BB弾は物見ごとに男たちの手に直撃。

まあ、威力はかなり絞ったが、かなりの痛さを感じたはずだ。

激痛に驚いて、男は銃を手放してしまい拳銃は床に落下。

慌てて、拳銃を取ろうとする男に向かってもう一度引き金を引く。

男が銃を拾い上げるために伸ばした手をかすめるように弾丸が襲う。弾が着弾したコンクリートは、本物の銃弾が当たったようにえぐれた。

本気で能力を使ったら、このエアガンでだって普通の拳銃と同じ威力を持っている。

「諦める、アンタに勝ち目はない」

俺は、男の頭に銃を突きつけ言い放った。

表に出ると、パトカーが2台来ていて取り押さえた男たちを連行していった。

「3人ともお疲れ様」

表では、笑顔で星野さんが俺たちを迎えてくれた。



まあ、今回の事件は簡単だったな。

だが、俺はこれから特殊能力犯罪捜査課始まって以来初めての手こずる凶悪犯罪に出くわすとは思ってもいなかった。

初撃につづく

Stage 1 初撃 『セーラー服とハンドガン』 改訂版

> i 3 2 9 3 8 — 1 7 5 3 <

「いやあ。今日は楽しかったな。」

星野さんが運転する日産の黒いR32GT-R（警察仕様）は夕暮れの大通りをゆったりと走っている。

俺は、助手席から夕暮れを眺めていた。

後部座席には紅葉と蒲原が座っている。

「まあ、オレにかかればこんな事件のうちに入らないね。」

などと蒲原が、ふんぞり返って自慢する。

ガチャリ

調子にのっている蒲原の側頭部に紅葉のワルサーが当てられる。

「あんたにかかればこんなのも事件じゃないでしょ。」

「いや、お前が拳銃を持つてる時点で事件は始まっている……わけ。」

ピピッ ピピッ！

無機質な電子音が車内に響く。

『大宮通りを走行中の西南交通バスでジャック事件発生。犯人は車内の乗員を人質をして逃走中。なお、犯人は拳銃を所持している模様。現場に近くにいる捜査員は、至急向かってください。』

「すぐ近くだね。」

さっきまで、不適な笑みを浮かべていた紅葉の顔が険しくなった。

「ハイこちら、S A 一号車。只今から現場に向かいます。」

俺は、無線機に答える。

「よし、飛ばしていくぞ！」

星野は、サイドブレーキを引き、交差点でコマのようにクルリと回るスピンターンをする。

星野は、ギアを一つ落としてアクセルを踏みタコメータの針をレッドゾーンに放り込んでいく。

後ろ向きの強いGに体がシートに押し付けられる。

エアコンの横についている青いボタンを押すと、ボンネットの一部が反転し、赤色灯とスピーカーが姿を現れ赤い光とともにサイレンが叫びだした。

国道をとばすこと10分、バスは、すぐに発見できた。

赤色灯とスピーカーは、しまわれたGT-Rは、黒い弾丸とかしていた。

「カーテンが閉まってるな。」

車内の様子が全く分からない。

さっき無線で新しい情報が入ったのだが、犯人は厄介な能力者の持ち主のようだ。

炎の能力者。

ジャック事件では最悪の組み合わせだ。

能力者自体が強力な爆弾みたいな状態だからな。

そんなものが、市内を走っているのだからこちらとてつかつに手出しは出来ない。

「紅葉、中はどうなってる？」

ここは、紅葉の能力に頼るのが正しい。

紅葉の能力は直視。

薄い壁程度ならそれを透かして向こうが見えるという数少ない能力だ。

それに、男に直視の能力を持っている奴はいない。

やはり、やましい心があるからなのだろうか。

「犯人が、右手に拳銃を持って通路を歩いてる。」

これは、長期戦になりそうだ。

バスは、移動しているわけだから突入は難しい。

それに、バスはついさっき給油をすましたそうだ。

日の入りまで、そう時間はない。

人質の精神力、体力を考えると出来るだけ長期戦は避けたい。

その時だった、俺の携帯がなる。

ディスプレイを見ると我が姉、柳刃七菜の文字が表示されている。

捜査課の課長を勤めている俺の姉だ。

姉さんならいい打開案があるかもしれない。

「もしもし。」

「龍護ね。そちらの様子はどう。」

「最悪だな、どうすることも出来ない。」

「事態は、深刻ね。…こうなったら突入しかないか。」

俺は、それを聞いて心底驚いた。

「突入って言ったってバスは走行してるんだぞ！」

走行中のバスに突入なんて聞いたことがない。

相手は拳銃を所持してる。少しでもバレたら、人質を殺しかねない。あまりにもハイリスクだ。

「最後まで聞いて、一瞬でいい犯人の手から拳銃を離させて。それがアンタに任す任務よ。タイミングは任せるわ。後は、突入隊員インカムでやり取りして。」

しばらく考え、俺が出した結論は。

「……分かった。その仕事は、任せろ。」

俺は、そう言って携帯を切ってポケットに突っ込んだ。

「紅葉、俺に協力してくれるか？蒲原、M24取ってくれ。」

「OK。ほれよ。」

「私のできることなら手伝うよ。」

きりっとした顔で紅葉は答えた。

辺りは夜の闇に包み込まれつつある。

前方と後方のパトカーの赤色灯が眩しい。

上空では、テレビ局らしき青いヘリが飛んでいる。

バスを追い抜いた俺たちは、近くの駐車場に止まっている選挙カー  
近づく。

「スイマセン、SAAFの者です。この車両を一時お借りしていい  
ですか。」

SAAFと書かれた警察手帳を見せ、選挙カーに乗り込み上の階に  
あがる。

蒲原から受け取ったケースからM24狙撃ライフルを取り出す。

素早く組み立てる。

「紅葉、お前の直視の能力俺に貸してくれ。チャンス一度きりだ。」  
インカムをし、銃弾をマガジンにセットする。

紅葉は俺の肩に左手を置き、目をつむっているがしっかりとバスを  
とらえている。

俺には、見えている。

紅葉の透視能力でこの暗視スコープを通してカーテンの向こう側に



座っている犯人が。

「犯人は、一番後ろの席に座ってる。人質も後部座席に集まってる。」

俺は、インカムの向こうの人間に話す。

「了解した。こちらの準備は出来ている。いつでもいいぞ。」

無線の相手は平然と答える。声からして、どうやら女性のようだ。

思った以上に、ヘリの音がうるさい。

「それじゃいくぞ。3、2、1、0。」

俺は、ライフルの引き金に手をかけた。

パアーン。

乾いた発砲音が辺りに響きわたる。

まっすぐ銃口から飛び出した弾丸は、バスの窓を突き抜けカーテンを破り、男の持っていた拳銃を破壊した。

パーン。

銃声を合図に彼女は、ワイヤーを使いバスの窓を蹴り破った。

空中で体をひねり、ホルスターから愛銃のCZ75を抜き去り犯人に発砲する。

彼女が使用しているのは、2009年に復活を遂げたCZ75 S  
P-01 ファントムphantomだ。

ポリマーフレームバージョンのファントムは従来のCZよりも約3  
3%も軽い。

装弾数15発、9mmパラベラム弾を使用する世界の名銃なのだ。

ガキンッ

男の顔を覆っていたマスクをかすめすぐ後ろに着弾する。

「死にたくなったら、動かないのが正しい判断だぞ。」

銃が壊れてからほんの1、2秒の出来事だった。

俺はスコープから目をなしバス周辺を見回す。そして俺は自分の目を疑った。

テレビ局のヘリから一本のワイヤーがぶら下がっている。

まさか、あれで突入したのか。

移動するヘリからあんな芸等ができる奴なんて、いったい何者だ。

俺は、選挙カーの上から飛び降り、バスに走り寄った。

俺はここで再び驚いた。

バスから降りてきたのは俺とセーラー服に身を包んだ少女だったのだから。

銀髪碧眼の少女。

おそらくおれと同年代であろう彼女を見て、立ち止まらない人はいないだろうと思えるほどの美少女だった。

腰までありそうな銀の髪は夜の光でキラキラ輝いていて、ヘリの風で揺らめいている。

その透き通った青い目には強い意志が見える。

そんな銀髪碧眼の美少女は俺を見て笑顔で答えた。

「君の射撃のおかげで誰一人負傷者がでなかった。ありがとう。」

俺は、驚きのあまりぽかんとしてしまった。

「そう言えば、まだ名前をなのってなかったな。私の名は、桜咲桔梗。よろしく。」

「あ、ああ。よろしく。」

どつちやら、俺はとんでもないヤツに会っちゃったみたいだ。

初撃 終了

s t a g e 1 初撃 『セーラー服とハンドガン』 改訂版(後書き)

お楽しみいただけただけでしょうか。

次回から、後書きには本編のこぼれ話などをやっけていきたいと思っています。

それでは、

L e t ' s m e e t a g a i n n e x t t i m e .

stage 1 二撃目 『オレの休日、彼女の休日』

「本日付けから、特殊能力犯罪捜査課に配属された、桜咲桔梗です。よろしくお願いします。」

銀髪碧眼の少女はにこやかに挨拶をした。

他の課に比べてウチの課は圧倒的に、人数が少ない。人手が増えたことは、正直嬉しい。

「それじゃあ龍司には、桔梗ちゃんとはしばらくはコンビを組んでもらうからよろしくね。」

「龍司、よろしく。」

「ああ、よろしく。」

「課長。それじゃあ、俺は誰と組むんですか！」

蒲原が、勢い良く自分の席から立ち上がった。

「蒲原君には紅葉ちゃんと組むに決まってるじゃない。」

「紅葉とですか！」

「なによ。あたしとじゃ嫌なの？」

紅葉のワルサーが今にも火を噴きそうだったので、蒲原は静かに着席した。

紅葉と蒲原が組むのか。

少々不安だが、それなりに2人とも息が合っているときもあるしな。

考え込むのは杞憂だろう。

「それより、後2週間で帝都会議も開かれるわ。それに、備えてコンビとは、うまく調整しとくのよ。はい、今日はこれにて解散！」

七菜はさっさと話をまとめ上げてしまう。

やっと、自宅に帰れそうだ。

「桔梗ちゃん。ちょっと話があるから、付き合ってくれ。龍護は、先に帰ってていいから。」

「ああ、さっさと帰って寝る。」

俺は、そう姉に言い残し帰宅した。

疲れがどっと出てきたのでジャワを浴びた後、ベッドに潜り込んだ。今日は、疲れた。

だが明日は非番だし学校もないからゆっくり出来る。

そう思いながら、俺は眠りの海に沈んでいった。

翌朝。

小鳥のさえずりが窓の外から聞こえてくる。

ベットから起き上がり階段をゆっくりと降りる。

テーブルには、ハムエッグとトーストの入った皿が2つ。朝食を作るなんて姉さんにしては珍しい。手前の席に座って新聞を広げる。

『第五回帝国会議二週間後に迫る。帝都の守りは完璧なのか？』

でかかとそのタイトルが記事の一面を飾っていた。

「世の中に、完璧なんてありやしないって。」

今やこの日本は、真っ二つに割れている。

地形的じゃなくて。地図の国名的にだ。

5年前の地図から日本は、真っ二つに西日本、東日本という国名に分かれてしまった。

西日本政府は、旧北九州を西京に名前を変え今や西日本の首都だ。



一方、東日本は、新京政府が旧東京に帝都新京をおいた。

俺たちが住んでいるのは帝都新京の外れの住宅街だ。

そんなこんだで、日本が二つに割れて五年目の会議が開かれることになっている。

普通の警官に混じって俺たちも帝都を巡回する予定だ。

「まったく、日本もめんどくさいことになったよな。」

「仕方ないだろう。能力者の話で政府が真つ二つ割れて閉まったんだから。」

「まあ、確かにぞ、」

俺の言葉は、そこまでしか続かなかった。

「ん？龍司、コーヒーはブラックか？」

俺は、見てしまった、聞いてしまった。

台所に立っているその人物を。

「なんで「コ」に！」

彼女は、ヒョイヒョイっと机の上に置かれている紙を指差す。

俺は、恐る恐るその紙を手にする。

『桔梗ちゃんが、今日からうちに来ることになったからよろしくね』

視界が一瞬真っ暗になりかけた。

そう、台所に立っているその人は、私服にエプロン姿の桜咲桔梗その人だった。

オイオイ。

姉さんなに考えてんだよ。

「いくら、姉さんがいても、同年代の男女が一つ屋根の下ってのはさすがにマズいって。」

「私は別に気にしないぞ。」

桔梗さん、もうちょっと女らしくしたらどうですか。

「俺は、気にするって。」

「で、ブラックでいいのか？」

「ああ、最高に苦いブラックにしてくれ、早くこんな夢から目を覚ましたい。」

数分後、自分の発言に後悔したくなるくらい苦いコーヒーを飲んだが、悪い夢は、覚めてくれなかった。

「さて、これからどうしたものか。」

俺は、ソファアに座って今後のことについて脳内作戦会議を開いていた。

桜咲桔梗、昨日からSAAFに配属になり、今は俺とタツグを組んでいる。

なるべく、自分のパートナーの経歴ぐらいは知っておきたい。

ポケットに、突っ込んでいた携帯を取り出してある人物にメールを打った。

一時間もすれば返事が返ってくるだろう。

それまで、彼女自信の口から話を聞くとするか。

そう思い、食卓でお茶を飲んでいる桔梗の元にいった。

「ちょっと話いいか？」

「ああ、いいぞ。」

「…あのさ。簡単な経歴ぐらいは教えてくれないか。俺のも教えるからさ。」

「龍司は、話すことはない。昨日の七菜さんに聞いた。」

姉さんが、変なことってなかったらいいが。

「それじゃ、SAAFに来るまではドコにいたんだ？」

「U18強行部隊だ。」

「アンダーエイティー…。」

俺は、桔梗の発言を聞いて背筋にゾクツとしたものが走った。

アメリカのに本部が設置されているのだが、捜査官の約90%が18歳以下の能力者で構成される秘密捜査機関。

その中でも、U18強行部隊は、凶悪犯、テロリストに強行逮捕に踏み込み犯人を確保、あるいはその場で射殺するという恐ろしい部隊だ。

「ひとまず、右手に持つてるミネベアを離してくれないか。」

無意識のうちに俺はミネベア9mm自動拳銃を堅く握りしめていた。

コイツは、日本の陸海空自衛隊に支給されているのと同じモデルで俺が持っているのは、桜の紋章にWと書かれてある陸上自衛隊のものだ。このミネベアは、オヤジが唯一俺に残した形見だ。

刑事だったオヤジは、ある事件で被弾しその2日後に死んだんだ。

「…悪い。やなことを思い出してな。」

机の上に置いたミネベアを見て、桔梗の顔が一瞬曇ったように見えた。

「それは……。いや何でもない。すまない、嫌なことを思い出させて。」

「いや、桔梗のせいじゃないよ。」

俺はそう言って。

オヤジの形見のミネベアに視線を落とした。

スライドとグリップが銀色に光っており、銃身は真黒の拳銃。

オヤジが修理した時にそうしてもらったらしく、世界に一つだけの拳銃だなんて自慢していたことを今でも思い出す。

おやじを殺した人物は、今でもノコノコと生き延びているに違いない。

そう思うだけでも、怒りがこみ上げてくる。

まだ、犯人のめどは立っていない、だから犯人を追いつめるその時まではこの怒りは秘めておこう。

大きく、息をして気持ち落ち着かせる。

「湿気た話をするのもなんだ、どっかに行かないか。良かったら帝都を案内するぜ。」

「ぜひ、お願いしたい。実を言うと、ココに来てまだ日が浅いんだ。」

「OK。任しといてくれ。メジャースポットから超穴場スポットまで紹介してやるよ。」

そうして、俺たちは朝から帝都に出掛けていった。

「それで、ここが帝都ツリーだ。」俺は、目の前にそびえ立つ500メートル級のタワーを指さす。

「大きいな。本物は、やっぱり威圧感が違うな。」

そびえ立つ帝都タワーを見て桔梗は少し驚いた。

「ああ、この帝都ツリーは世界最大級のタワーだからな。さて、そろそろ昼飯食いに行くか。」

腕時計の針は12時を回ろうとしていた。

「ここらへんでおいしい店はどこなんだ？」

「そうだな。すっかりした店もいいな、渚食堂とかもいいしな。」

「食堂か。興味がわくな。そこに行かないか？」

「そうか、じゃあ渚食堂に行くか。」

下町方面に歩いていくこと5分、安い美味いで有名な渚食堂が存在する。

「ここが、渚食堂か。」

少しサビた感じの看板には緑色のペンキで渚食堂と書かれてある。

入り口の引き戸を開けると食堂のおばちゃんが俺をみてにっこりと笑って席に案内してくれた。

「龍ちゃん。横の娘は彼女かい。」

「ち、違うよ、オバチャン！仕事仲間だから。」

「おやおや、ますます怪しいねえ。で、メニューは何する？」



このおばちゃん、絶対俺のことをからかうことを楽しみにしてんな。

「そうだな。いつもの裏メニュー、2つ。」

「いつものつて響き、かつこいいな。」

いや、カッコいいから言ってるんじゃないだよ。メニューの名前がな…

「スーパーDX破天荒チャーハン2つだね。」

…なんだよ。

声にして頼みたくないでしょ。

だから、いつものっ言ってるんだよ。

美味いんだけど、メニュー名がすごいんだよな。

「カッコいい。」

「マジで!?!」

桔梗にそんな趣味があったとは。

「絶対飼い猫とかにリンカーンって呼んでそうだな。」

「いや、ワシントンだ!?!」

「初代ですか！」

「はい。スーパーDX破天荒チャーハンだよ。」

おばちゃんは、チャーハンが盛られた二つの皿を俺たちの前に置く。

名前の割には見た目はしっかりしているチャーハンだ。

味付けは秘伝のタレを使っているらしい。

「いただきます。」

パラパラに炒めてある米をスプーンですくって食べる。

「うん。おいしいな。」

どうやら、気に入ってもらえたようだ。

さて、俺も食べるか。彼女が気に入ったのを見届けてから俺もチャーハンを食べ始めた。

いつ食べても、ココのチャーハンは上手いよな。名前はあれだけど。

そうして、昼食を一通り楽しんだ後、午後からなにをするべきか悩んでいた。

が、ある一本の電話から少しずつアレの正体に分かることになるとは…

第二弾 終了

stage 1 二撃目 『オレの休日、彼女の休日』（後書き）

後日談！ そのいち

「オレとコーヒー」

「で、龍司はブラックか？」

「ああ、最高に苦いブラックにしてくれ、早くこんな夢から目を覚ましたい。」

五分後。

「出来たぞ。」

「ありがとう。」

ゴクッ

「だー！にげー！ー！」

「そうだろうな。お湯とインスタントコーヒーの比率が5：5だから。」

「どんだけ、濃いんだよ！」

「これくらい普通だぞ。」

ゴクッ　ゴクッ　ゴクッ

「ウム、おいしかった。」

「絶対無理してるだろ。」

「ああ、限界だ。」

バタッ！

「だあ〜！そんなにまじめにバカしなくてもいいから！」

ちなみに、三分後に目が覚めたそうです。

Stage 1 三撃目 『消えた弾丸』

渚食堂を出るのとはぼ同時に俺のケータイが鳴った。

「んっ。誰だ？」

ポケットからケータイを引きずり出す。

「蒲原から電話みたいだな。」

パカッと携帯を開き通話ボタンを押す。

「もしもし、蒲原か。どうした？…ああ。了解すぐに向かう。」

ボタンを押し携帯を再びポケットに押し込む。

「何かあったのか？」

「ああ、指名手配中の犯人が見つかったらしい。」

「良かったな。確保しにいくのか？」

「残念ながら、奴はもう真実を語れないようになったみたい  
ようだけどな。」

「死んでたのか。」

「とりあえず、現場に向かおう。すぐ近くだから。」

俺は、通りかかったタクシーを止め、現場に向かった。

現場近くには、4、5台ほどパトカーが止まっていた。

「ご苦労様です。SAAFの柳刃です。」

警察手帳を見せ、テープをくぐる。

「早かったな。こつちだ。」

蒲原が、路地裏から出てきて手招きする。

俺と桔梗は、蒲原について路地裏に入っていく。

2つほど角を曲がると、事件源の現場があった。

遺体はすでに運び出されてシートがかぶせられている。

遺体をみる前に、男が亡くなっていた場所を見ることにした。

「どうやら、ここで殺されたみたいだな。」

男がもたれ掛かっていた形に白いラインがかかっている。

「奪われたものは、あるのか？」

桔梗が蒲原に問う。

「男の持っていた財布には金がぎっしりと詰まっていたからな、おそらく物取り目的じゃないだろう。」

「となると、恨みか？」

俺は、遺体に近づきシートをめくる。

男の額には、くっきりと弾痕が残っている。

「直接的死因は、見ての通り脳天を打ち抜かれたのが死因だ。」

「一発で脳天を打ち抜くということは、やっぱり素人の犯行じゃないか。」

「ちなみに、コイツはなんの指名手配犯なんだ？」

「武器、麻薬の密輸、オマケに半年前の西沢山荘事件の黒幕だ。」

「消されたんだろっな…。」

桔梗は、しばらく目をつむって何かを考えていたが、おもむろに立ち上がるとさっきの現場に歩いていった。

「龍司、少しいいか？」



「ん?...いいけど。」

俺も、立ち上がり桔梗の横に立つ。

「男は、ここで殺された。」

桔梗は、現場を見据える。

「ああ、頭を打ちぬかれてな。」

俺は、当たり前の答えを返す。

「じゃあ、何で弾丸の跡が残ってないんだ。」

そう言われて、目の前の現場をもう一度みる。

現場は、狭い路地裏で袋小路になっている。

男は、壁にもたれ掛かるようにして死んでいた。

それを物語るように後ろの壁には、血が飛び散っており、地面は流れ出た血で染まっている。

だが、その壁には男の頭を貫いたはずの弾がめり込んでもいなければ、当たった痕跡すら残っていない。

確かに、変だ。

頭を打ち抜かれたのなら弾が残っているはずだ。

なのに、現場には弾の当たった跡すらない。

「そう、男を殺したはずの弾丸が見つからないんだ。」

蒲原が俺たちの後ろに来る。

「一体、どういうことなんだ？」

「この事件、相当深い何か隠れてるぞ。」

桔梗は、そつ言い顎に手を当てた。

消えた弾丸。…弾丸？

そつ言えば、昨日強行捜査した工場で妙な銃弾があったな。

まさか、あの銃弾と何か関係が？

「蒲原、昨日の事件で押収した弾の話なんだが。」

「そつくると、思ったよ。」

蒲原は、ポケットから取り出した箱から赤いラインが2本入った銃弾を手を取った。

「こんなこともあるのかと、昨日のうちにパクっておいたぜ。」

「お前、自分で撃つてみたかっただけだろうが。」

「やっぱバレた？」

…たく、そんなんだから始末書ばっか書かされるんだよ。

「馴れてるから平気だ。」

「いや、馴れられても困る。誰が、この前の体育館半壊事件の謝罪に回ったと思ってるんだ。」

「マジでスイマセン。」

「まあ、取りあえずこの弾について調べないとな。」

「それなら、手っ取り早い方法がある。ちょっと待っててくれ。」

桔梗は、そう言ってどこかに電話をかけた。

「もしもし、桔梗だ。ああ、A2を使用させてくれないか。分かった、協力感謝するぞ。」

パチンと携帯を閉じこちらを振り向く。

「使用出来るみたいだから行くぞ。」

「ど、どこだよ？」

「何処って、自衛隊の野外射撃所だ。実際に発砲するのが手っ取り

早いだろ。」

桔梗さん、それって手っ取り早くありません？

て言うか、何で自衛隊の野外射撃所なんて使えるの!?

どんなツテを持ってるんだよ!

何だか、ますます桔梗の謎が深まる気がする…。

20分もしないうちに自衛隊の迷彩柄のジープが一台やってきた。

その間に、紅葉も合流してきて、SAAFの面子は自衛隊の野外訓練場に向かった。

後部座席の窓から見える景色は、建物やビルから一転し、見えるのは木々ばかりである。

「なあ、紅葉は何してたんだ?」

俺は、外の景色を見るのに飽きたので、助手席に座っている紅葉に話しかける。

「わ、わたし?ちょっと用事があった。帝都ツリーに行ってた。」

帝都ツリーに行ってたのか、偶然の一致だな。

「奇遇だな。私達も午前中に帝都ツリーに行ってたぞ。」

さっきまで、俺と同じように隣の席で外を見ていた桔梗が口を開い

た。

「へえ。私達ってことは、後誰とってたの？」

紅葉が振り返る。

「龍司に帝都案内をしてもらってたんだ。」

「柳刃が帝都案内か。なかなか、抜かりがないな。」

ちよ、蒲原。余計なこと言っんじゃねえ！

それじゃ俺が、桔梗をねらってるみたいない言い方じゃねえか！

「いや、家と一緒に」

「だー!!」

桔梗までも余計なことを言いそうになる。

…っていうか言っちゃった。

「家と一緒に。ど、どどいうこと？」

ヤバいぞ。

紅葉がよからぬ妄想はじめかねん。

しかも後ろには蒲原がいるしな後々面倒なことになるのはゴメンだ。

「じ、実は、昨日姉さんが飲み過ぎちゃって桔梗が送ってきてくれたんだよ。だから、そのお礼にな！」

俺は、素早く紅葉と蒲原の死角で桔梗にアイコンタクトをとる。

『頼むから、俺の話に今は合わせてくれ。』

『分かった。』

「昨日は課長が飲み過ぎてな。龍司の家まで送ったんだ。」

「そ、そうなんだ。」

いかん！まだ疑ってる。

話をずらさなくては。

「そつだ、蒲原は何してたんだ？」

「俺か？俺は、午前中は銃を整備に出しに行ってたけど。」

ああ、宮川のじいさんの所か。

そろそろ俺のミネベアも整備に出さないとな。

「もうすぐ着きますよ。」

運転していた若い自衛隊員の男性が言う。

ふう。何とかやり過ごせたな。

野外訓練場に到着した俺たちは、早速あの銃弾の試し撃ちをすることにした。

「この弾を、一発込めての。」

ガチャリ。

蒲原が、一発だけ弾をマガジンに装填する。

「誰が撃つんだ？」

蒲原は、ウキウキしたように聞いてくる。

「うーん、蒲原に任せる。」

「私も。」

「私もだ。」

「よし、この蒲原斎。華麗に撃ってやるぜ。」

蒲原は、拳銃を持って射撃体制をとる。

聞いた話が正しければ、世にも信じがたいことが目の前で起ころは

ずだ。

「蒲原、片手で撃つな。両手で撃て。」

一応、蒲原に警告する。

「はいよ。それじゃあこの弾のすごさを見せてもらうぜ。」拳銃の安全装置を解除して、10メートル先におかれた、人形の頭にサイトをあわせる。

そして、そのまま引き金を引いた。

ドンッ！

9mmパラベラム弾とは思えない重々しい発砲音ともに飛び出す弾丸。

「なっ!?!」

「えっ!?!」

俺の横で驚く桔梗と紅葉。

二人が驚くのも無理はなかった。



飛び出してきたのは、金属の弾丸ではなく。

赤い光の弾丸だった。

真っ直ぐ飛び出した光の弾丸は尾を引きながら人形の頭に直撃した。

「やっぱりな…。」

「やっぱりって、知ってたのか！」

「いや、アイツから聞いた話だから初めはただのウワサだと思ってたんだが、まさか実在するとはな。」

「り、龍。この弾は一体なんなの？」

「取りあえず、人形を見に行ってみよう。話はその後だ。」

頭を打ち抜かれた人形のそばに向かう。

現場と同様にするために、人形の後ろに板で壁を作っていたのだが、傷一つない。

「弾痕がない！」

再び驚くの紅葉。

「コイツが、消える弾丸の正体だったのか。」

「し、正体と言われても私には何も分からないんだが。」

「この弾はレーザー弾だよ。」

「レーザー弾!?!」

蒲原と紅葉が八モる。

息合ってるな。

「レーザー弾…。！それなら、アメリカにいた頃に聞いたことがあるぞ。何でも、対象物だけにダメージ与える非現実的弾丸。」

「そう、コイツは光の尾を発して飛ぶ姿から別名Shooting star(流れ星)って呼ばれる弾丸だ。」

「マジかよ!」

「俺たち、相当ヤバイ山に足つつこんじまったみたいだな。」

「龍、どうする?まずは課長に連絡入れる?」

「いや、報告は俺が後でしておく。まずは、あの引きこもりから話を聞くのが先決だ。」

「引きこもり？」

桔梗は、首を傾げる。

「SAAF屈指の情報通。まあ、ちょっと性格あれだけどね。」

苦笑いの紅葉。

「アイツのせいで、龍司の嘘デート話に何度付き合わされたことか。」

めっちゃくちゃ悔しがる蒲原。

蒲原、おまえ何度騙されたら分かるんだよ。少しは学習しろよ。

「相変わらず、蒲原はバカねえ。」

「…くつ。言い返せん。覚えとろよ紅葉！」

「ハイハイ。私が現役のうちに頼むわよ。」

蒲原完全に遊ばれてるな。

「龍司。あの2人いつもあんなかんじなのか？」

「仲がいいだろ。」

笑って答える俺に睨み合う2人が突っ込む。

「「違う!」「」

いや、息合ってるじゃないか。

「あれだな。ケンカするほど仲が」

「「よくない!」「」

絶好調だな、お前ら。

「さて、お遊びもそこまでだ。さて、行くぞ。」

「そうだな。」

「ちょっとまって!」「ちょっと待ちなさいよ!」

最後まで、息の合う2人を見て俺と桔梗は笑いながらジープに乗り込んだ。

何だか、桔梗なら俺の背中を任せられる、そう思えた瞬間だった。

第三撃 終了

Stage 1 三撃目 『消えた弾丸』（後書き）

後日談！ そのに

もしも、蒲原がレーザー弾を片手で撃っていたら。

ガチャリ

蒲原は、引き金を引いた。

ドンッ！ ゴフッ！

「なっ！？」

「えっ！？」

桔梗と紅葉の2人が驚く。

2人が驚くのも無理はなかった。

威力を殺しきれなかった拳銃が蒲原の唇を強打したのだから。

「ぎゃー、口がぐー！！」

「やっぱりな。」

「やっぱりなって、おまえ知ってて黙っていたのか！」

「コイツは、片手撃ちすると拳銃が唇に当たるといっせにも恐ろし

い弾丸。その名も、ディープキス。」

「なんて、恐ろしい銃弾なんだ。」

「絶対、今考えた銃弾名だろ！！」

「そんな訳ないだろ蒲原。俺はしっかりと見たぜ。お前の熱いキスを。」

「このばっかヤロー！！」

弾丸よりも、発砲したときの反動で唇を拳銃で強打した蒲原の方にみんなの視線がいつて弾を誰一人みていなかった真実。

第四撃につづく。

Stage 1 四撃目『引きこもりの捜査官』

帝都郊外のとあるマンション。

ピンポーン

「火神、俺だ。今時間空いているか？」

「空いてるよ。勝手に玄関から入ってきてよ。」

「そいじゃ入るぜ。」

そう言っつてクリーム色の扉を押す。

重そうに開いたドアの向こうに彼は立っていた。

俺と同じ黒髪。前髪は少し長くて目にかかるぐらいだ。

こいつの名は、かがみゆついち火神祐一 SAAFの情報担当をしている。

いつも、爽やかな顔をしているくせに、なかなか家から出てこない引きこもり状態の奴だ。

「今日は、大人数だね。」

「この前の話を聞きたくてな。」

少年に案内され、部屋の奥に入っつていった。

「で、この前の話ってなんだい？幻のカウンタックの話。いや、それとも北が作ったミサイルの話かな？」

「龍って、たまにいないかと思ったら火神君と話してたんだ。」

紅葉がジト目でこちらを見る。

「じ、情報収集だよ。」

確かに、情報収集はしているのだがどちらかというと、情報収集がついでで、いつもこいつの話に聞き入っちゃうんだよな。

「ところで、柳刃君。そこの銀髪の女の子は、新人かい？」

「紹介してなかったな、彼女は桜咲桔梗。今は俺とコンビを組んでる。」

「桜咲桔梗だ。よろしくな。」

「僕は、SAAF情報処理系の火神祐一。よろしくね桜咲さん。」

「でだ。流れ星の話だよ。話したる火神。」

「ああ、あれか。でも何で今更？」

「実はな、その弾の本物が見つかったんだ。だから、詳しい話を聞



「ごうと思つてな。」

「そうなんだ、コッチも怪しい情報を仕入れてたんだ。」

「怪しい情報ってなんだ？」

そう言う、桔梗の目色が少し変わった気がした。

「最近、ネットでこんなページを見つけたんだよ。」

祐一は、立ち上がるとディスクの上に置いてあるパソコンを立ち上げる。

鮮やかな山と草原の背景がパソコンの画面に映し出される。

インターネットにつなぎ、あるサイトに入る。

真っ黒な背景に、血のような赤で『血の帝都まであと13日』と書かれている。

「なんだよ、このサイト。」

紅葉が、パソコンを覗き込む。

「あ15日ってちょうど帝国会議の日じゃない!？」

「そうなんだ。そして、このページ。」

祐一は、『武器弾薬庫』の文字を力チ力チッとダブルクリックする。  
ページが移動する。

白地の背景に青い文字でこう書かれている。

T・N 清掃終了

A・D

E・I

K・S

「清掃終了。どういうことだ？」

「あくまでも、僕の推理だけど、このT・Nって西田拓郎（に）しだ  
たくるう（）のことじゃないのかな。」

祐一は、シリアスな感じを出して話す。

「西田拓郎って、今日遺体で見つかったアイツか！」

「おそらく。殺されて清掃終了ってことならば分からないでもない。  
あくまでも、推測。」

「だが、それが本当なら後3人、誰かが殺されるということか。」

桔梗がそう呟いたときだった。

ブブブ　ブブブ　ブブブ

マナーモードにしていたケータイが鳴り出した。

「はい。柳刃です。星野さんですか。はい、…えっ！連続殺人事件で無罪を言い渡された男が殺された！？」

俺は、ケータイの音量を上げ、会話がみんなに聞こえるようにする。

『ああ、頭を打ち抜かれた形でね。え？犯人の名前？被害者の名前は、たさい　あきのりだよ太宰晶則。』

携帯から聞こえる星野さんの声は確かにそうだった。

「太宰晶則…A・Dじゃねえか。」

蒲原は、パソコンの文字をみながら驚く。

「星野さん、現場は任せました。後で話を聞かせてください。」

そう言って、携帯の通話を切る。

「火神君の推理通りね。」

「これからどうする、火神？」

「…そうだね。とりあえず二人の共通点を調べてみるよ。」

「コイツらは…犯罪者だ。」

桔梗が、重要な共通点に気づいていた。

「犯罪者か。そっちに關しても調べてみるよ。」

「俺たちは、今のところ出番はなさそうだ。だが、血の帝都が意味するのは何だ？」

「あと13日後には何かがおこるんだ。俺たちの調整を最優先にしないとな。」

「そうね。今日は、ここで解散にしておこうよ。」

紅葉の意見に全員賛成し帰路につくことにした。

「柳刃君。メールの件だけど、今すぐは答えられないから帝都会議が終わった次の日曜日に。」

「OK。じゃなあ火神。」

ボタンとドアが締まり、部屋の中に静寂が漂う。

「…U18。あの事件の日もU18強襲部隊が出動していたんだ…。」

西の空は、もう赤くなり始めている。

「また明日な。」

「じゃあね。」

「おう、またな。」

蒲原と紅葉を乗せた帝都交通のバスはゆっくりと発進して、大通りの車の流れに乗って遠ざかっていく。

「それじゃ、俺らも帰るか。」

「ああ、そうだな。」

友一のマンションから俺の家は徒歩20分ほどだ。

「今日も色々あって疲れた。」

「これからは、もっと忙しくなると思うぞ。」

「だよな。気なることもいくつがあるし、変なことが起こらんとい  
いが。」

夕日で、小道は赤く染まっている。

「…はあ。めんどくさいんだよ。」

右半身を少しひねりながら俺はそう言い放つ。

ブンッ

釘が刺さったバットがすぐ横を通過する。

思ってもいかなかった空振りに男はよろめく。

「ふざけんなああ！」

いきなり襲ってきた男が振り回す釘バットは、俺の目の前を通過する。

だが俺には当たらない。

っていうか、当たるわけないだろ。

そんなに大きいモーションじゃ、軌道が丸見えだから。

「ちょっと、彼女お。そこのバカほつといて、俺たちといい所行こ  
うよ。」

茂みから出てきた、いかにもチャラそうな男は桔梗にまるで親しい  
関係のような態度  
で触ろうとした。

パシッ！

近づくと手を払いのける。

「…ないな。」

「え、なんて？」

「なってるないな。お前たち。」

「あ！黙って聞いてりゃ。なめたこと言うんじゃねえよ！」

どうやらあっちも、絡まれてるみたいだな。まっ桔梗だから大丈夫だろ。

「よそ見してんじゃ、ねえ！！！」

「おいおい。だから大振りすぎるって。」

一歩足を引くだけで、バットの軌道がそれることができる。

と言っても、相手との距離感、武器の攻撃範囲を正しく計算してないとできないんだけどな。

「あきたから、そろそろ寝てくれるか？」

「こんつのおお！」

ドス！

男のみぞおちに一発。

「いとくけど俺はあんまり力入れてないからな。お前がそんな勢いで突っ込んでくるのが悪いんだ。いわゆる自業自得って奴だな。」

ドサツと男はその場で伸びてしまった。

「さて、桔梗。そっちはどう…うお！」

男に痛そうな関節技を決めている桔梗の姿が。

めちゃくちゃイタそうだな…。

「さあどうする？自分の罪深さを知って反省するか？」

「イテテテ、します！！反省します！だから、ゆる…。」

容赦なく男の首に手刀を振り下ろし、男を気絶させる。

エグッ！！やってることあげつないよアンタ！

「マナーを知らんバカ者もまだいるもんだな。」

立ち上がった桔梗は、男を放置して歩き始める。

下手したらあの男、一生女性恐怖症で苦しむことになるかもな。

「まったく。けしからん奴だ。」

どうやら、桔梗さん angry のようですな。

触らぬ神に祟りなしだ。

女性恐怖症になりたくないからな…



そう思い、俺も男たちを無視して帰路についた。

四撃目 終了

帝都会議会議まで後10日

「龍司。早くしないとおいていくぞ。」

「今日も、学校か…。」

眠たい目を擦りながら、靴を持って玄関に行く。

玄関には、すでに靴を履いている桔梗が立っている。

何だか、桔梗が家にいるのが当たり前になってきたな。

「目が眠ってるぞ。」

「朝は、いつもこうなんだ。」

靴を履き、家を出る。

普段SAAFで働いている俺たちだが、学校に通っていないわけではない。  
はない。

俺が通っているのは都立 篠原すのはら特殊警護高校だ。

今の世の中、能力者は色々な仕事場で働いている。

そのため、それに応じる形で能力者のための高校のバリエーションも増えた。と言っても、能力だって適材適所。

能力の種類によっては就職先が限られてくる。

俺も、そのうちの一人なのだが。

そう言えば、桔梗の能力ってなんだろう。

なかなか、本人は話してくれないしな。

むやみやたらに能力は教えていいもんでもないし仕方がないが、コンビを組んでいる相棒としては知っておきたいよな。

住宅街を抜け国道を渡り線路脇の道を歩いていく。

学校までは、後少しだ。

にしても、桔梗の転校は大事件だったよな。

確かに、桔梗の容姿を見てアイツらが騒がないという方がそれこそ大事件かもしれないが。

桔梗を一目見ようと休み時間は廊下は人でいっぱい、大変だった。

そんな中でも、顔色一つ変えない桔梗にも驚いた。

一体どんな神経してるんだ？

「なあ。桔梗はあれだけの人数に押し掛けられて何とも思わないの

か？」

「いや、あれはさすがに照れるな。危うく照れすぎて気絶しかけたぞ。」

「人間って照れすぎたら気絶する生き物じゃないだろ！」

「うむ、特異体質なんだろう。」

俺の想像を絶するような特異体質なんだろうなあ。

ガチャリ

「へっ？」

俺の右目の2、3センチ前にあるCZ75ファントムの銃口。

「スイマセン！」

「んっ、どうした？」

「左手に持っているCZをおろしてください。まだ死にたくないの  
で。」

「あ、ああ。スマン、スマン左手が無意識のうちに動いていた。」

な、なんて恐ろしい左手なんだ！！

「お。柳刃！今日もアイドル登校、」

ドンドンッ

「どわっ！！俺を殺す気か！」

「おっ、スマンなオレも右手が勝手に動いちゃった。後、ちなみにさっきの威嚇射撃だから。」

俺は、エアガンのサイドにつけられたレバーを下げる。

「スマン。今から手が滑る。」

「滑ることを予測して言うな！！！」

カチ

パンパンパンパンパンパンパンパン……

フルオート13連発。

威力は、当たると痛いくらい。

「止める〜！エアガンは人に向けて撃つたらいけないって取説に書いてるだろうが！」

はっ！！

そうだったな。

「ふう、やっと止めてくれたか。」

ゴソゴソ

「だあ〜！！本物の拳銃<sup>ミネベア</sup>出してくんじゃあねえ！」

「だって、コレの取説には人に向けて撃つて下さいって。」

「断じて書いてくださいつて書いてないから！って言うか当たった  
ら死んじゃうから。」

フム…

ガチャン ダンツ！

ドサツ。

その場に座り込む蒲原。

「言い忘れてたけど、初弾は空砲だから。」

「ふう、死んだかと思ったあ。」

「バカみたいにからかうからだよ。でも相棒をやられて黙ってるよ  
うな私じゃ無いからね。」

「ああ、分かったよ。」俺は、後ろ手に手を振りながら学校に入っ  
ていった。

何でだろうな、朝は機嫌がよくない。

1 時限目の世界史の授業は全く頭に入ってこない。

ハア、昼休みどうするかな…。

寝ぼけた頭で昼休みをシミュレーションしておく。

作戦が決まったところで戦に備えて俺は机に突っ伏した。

携帯のバイブ目が覚める。

時刻は12時27分。

4時限目の終了を知らせるチャイムが鳴るまで、  
残り2分40秒。

寸分の狂いもない電波時計を睨む俺。

後30秒。

手持ちのエアガンの位置を確認。

後10秒。

オレは、ベルトに仕込まれているワイヤーの留め金を挿しておく。

5、4、3、2、1。

今だ！

オレはフライング気味に席を立ち上がる。

窓に走り寄り、窓枠の角にワイヤーの留め金を引っ掛ける。

俺たち2年生の教室は2階。

俺は、しっかりとワイヤーを固定したのを確かめ窓から飛び降りる。

ワイヤー巧みのばしながら衝撃を最小限に抑え着地したのと同時にワイヤーを軽くなるまさせ一気に引っ張ると留め金はずれ、ベルトの中にしまい込まれる。

「柳刃!!」

大勢の男たちの声が俺がさっきまでいた2階の教室から聞こえてくる。

「クソ!窓から飛び降りやがった!」

身を乗り出してグラウンドにたっている俺をみる男子生徒達。

「そんなに乗り出すと。」

内ポケットから素早くエアガンを抜き出し、発砲する。

「転落するぞ!」

パンパンパンツ!あらかじめ、モードを3点バーストに設定しておいたため1回引き金を引いただけで3発連続で弾が飛び出す。

飛び出した特殊BB弾は男たちのデコ吸い込まれるようにヒットす



る。

「「「イテッ！」「」」

仲良く同時に悲鳴を上げる。

いつも、追われている立場だ。反撃したって変わらないだろ。

「クソッ！！してやられた。」

「落ち着け、今日はあの方がお見えだ。俺達は大人しくしておこう。」

四角の細長いメガネをかけた少年は、メガネを人差し指で位置をなおしながら、教室を去っていった。

俺は、体育倉庫の裏に隠れてグラウンドの様子をうかがう。

グラウンドには、人影は見えない。

「ふう、今日はエラく追っ手の数が少ないな。」

一息ついた瞬間だった。

トントン

俺の肩を誰かがたたく。シマツた！

エアガンを抜きながら、振り返る。

が、呆気なくエアガンを掴まれ発砲する事ができず無防備に振り返った。

「大変そうだね、龍君。」

少女は、微笑みながら俺をみる。

「か、会長！」

しかし、コレは決してうれしい出会いではなかった。

この人は、篠原警護高校生徒会長 大宮寺<sup>だいくうじ</sup> 有紗<sup>ありや</sup>先輩。

容姿端麗、才色兼備の完璧人なのだ。

長い黒髪はその顔からは、大和撫子と言言葉がぴったりと当てはまる。

「どうしたの？」

大宮寺先輩は、そう言って微笑む。

だが、微笑んでいるのにまるで蛇に睨まれた蛙のように体がピクリとも動かない。

まさか、篠原警護高校のラスボスに遭遇してしまうとは、なんたる

失策！

「か、会長こそ、こんなところでなにしてるんですか？」

恐ろしいが、それを聞け！と言わんばかりの空気。

「何してるって、会いに来たんだよ。龍君に。」

俺の脳内にゲームオーバーの文字が思い浮かんだ。

「で、何用得俺に会いに？」

「えっ、龍君に会うのに理由なんているの…？」「こっつ、真顔でいわれるとドキッとす。

「ハハハ。顔赤くしちゃって、可愛い。」

おちよくられていたことが判明。

ドキッとしちゃったじゃないか！

俺のドキッを返しやがれ〜。

っつと言つ訳にもいけないので、心を落ち着かせてもう一度用件を聞く。

「会長、なんで俺を訪ねられたのですか？」

「ん〜。つれないなあ。実は、帝都会議の噂を小耳に挟んでね。それを伝えておこうかと。」

帝都会議の噂？

確かに、気になるな。

「帝都会議の日。ビックサプライズが帝都市民全員に訪れるでしょう。って昨日インターネットの掲示板で見かけたのよ。」

「帝都市民全員に訪れるビックサプライズ、どういうことだ？」

顎に手を当て、しばらく考える。

「これ、掲示板の最後に書かれていた文字。」

そう言って有紗は、四つ折りにされたメモ用紙を折れに手渡した。

メモ用紙を広げるとそこに並ぶ変な数字。

7月16日PM5:00

4444、11、44444、66”、small888、111、  
11、000。

under ground 1 space 4

「何ですかこれ？」

「私じゃ、分からないから龍君を探してたんだよ。」

「…7月15日って、今日じゃないですか！しかも、5時まで後4時間ってマズいんじゃないんですか？」

「そうだね。」

ガクッ

ハア、何でもここまで冷静にニコニコしてられるんだ？

「じゃ、後は任せた！」

そう言い残してその場を立ち去ろうとする有紗。

「ちょ、待ってくださいよ会長！何で俺に押しつけて1人帰ってるんですか！！」

「うまくいったら…あの男どもを何とかしてあげてもいいわよ。」

ニヤリと笑う有紗。

こええええええ！

この人、マジこえよ！！

何か、目で人を殺せそうだ…何という眼力。

「…で、引き受けてくれる？」

コクコク！

オレは、すぐさま首を縦に振る。

「じゃ、お願いね。名探偵さん！」

と言うことで、昼休み中ずっとメモ帳と睨めっこしていたが、一向に解決の光が見えてこない。

「うーん…。under groundは、おそらく地下1階のことを指しているんだろうが、この数字がなあ…。」

「どうしたんだ？そんなに唸って。」

桔梗が、机をのぞき込んでくり。

「いや、この問題がな……。」「

「なんだ、この問題？龍司、最近は近所の子供にでもおちよくられているのか？」「

「俺どんだけ悲しいコなんだよ！」「

「冗談だ……。」「

クソ〜！

桔梗まで、俺をおちよくりやがって！

誰のせいで、ヤツらに追われてると思ってるんだ。

「後1時間。ヤバいな〜。こうなったら、火神にメールしてみるか……。」「

俺は、ポケットからケイタイを取り出してメールをしようと固まった。

「んっ、どうした？燃料切れか？まあ、あれだけ走り回れば疲れるだろうな。」「

「…違う。後少しで何かが分かりそうなんだ。」

「…。」

俺のジャマにならないように黙り込んでジッと俺を見つめる桔梗。

ケイタイを見て何かがいつきそうない気がするんだ。

ケイタイのボタンには、数字、仮名文字、アルファベットが並んでいる。

……！！

「そうか！メモの数字はケイタイのボタンを表していたんだ！」つまり、初めの4444を例に表すところだ。

4が表すのは、押すボタン。

4が4つ。この4つが表すのは、ボタンを押す数。

そして、訳される言葉はアルファベットなら大文字の『G』、仮名文字なら『て』だ。

各ボタンに、アルファベットは多くても4つ。

仮名文字は、ほとんどが5つ。はじめの文字が、大文字なら3つを越すのも分かるが、3つ目の4は5つもある。



つまり、この暗号は数字を仮名に変換すれば分かるはずだ。

「1つずつ訳していくと、『て』『い』『と』『ひ』『S M A I I  
よ』『じ』『い』『ん』」

『ひ』『』はおそらく『び』

『S M A I I よ』『は』『よ』『』

すべてをつなぎ合わせて出てくるのは、

『ていとびょういん』

「帝都病院地下1階か！」

暗号は解けた。

後は、そこに向かうだけだ！

時計をみると時間は4時40分を回ったばかりだ。俺は、教室を飛び出しながらケイタイの電話帳から大宮寺 有紗先輩の文字を見つけたし、ボタンを押す。

プルルル、プルルル

「もしもし。」

2コール目に電話がつながる。

「会長！暗号が解けました。場所は、帝都病院の地下1階です！」

「帝都病院ね！分かった、すぐに行くからグランドまでダッシュしなさい！」

ブチッ

会話にしてみれば、およそ10秒。

しかし、俺には十分すぎる時間だった。1階廊下の窓からグランドに向かって飛び出す。

それとほぼ同時に、爆音を轟かせて近付いてくるバイク。土煙を上げて俺の目の前で急停車する。

「早く乗りなさい！」

バイクを運転していたのは会長。

そして、会長は俺に向かってもう一つのヘルメットを投げた。

それをキャッチした俺は、ヘルメットをかぶりながらバイクにまたがった。

「しっかり捕まってなさいよ！」

アクセルスロットルを捻りながら有紗は叫ぶ。

下は土だというのに、ウィリーしながらスタートするバイク。

このバイクは、警護学校の専用車両だ。

白と黒のツートンカラー。

右サイドに回転灯、左サイドに拡声器がついている。

もちろん、エンジン、車体も細かく改造されており、並みのバイクなんて比にならない位の恐ろしいバイクに仕上がっている。

二人乗りでも、このフットワークの良さ。

ハンパない！

だが、このモンスターマシンを操るこの人もモンスターだ。

普通の人には、乗ることすら難しいようなバイク。

な、なんてすごい人なんだ！

公道に飛び出たバイクは、回転灯に赤い灯をともして突っ走る。

目的地の帝都病院は、もうすぐだ。

腕時計を見ると、時刻は4時50分。

大丈夫。

コレなら間に合う！

間に合ってくれ！

さっきからするこのいやな胸騒ぎが杞憂であってほしい。

「帝都病院地下1階っていったら、駐車場よね。」

「はい。おそらく地下1階の4番目の駐車スペースに何かがあるはずです！」

「了解。」

バイクは、地下に潜る入り口に飛び込んでいった。

バイクが止まるか止まらないかのスピードでバイクから飛び降りる。

四番駐車スペース4番はどこだ！

滑るこむように4番駐車スペースに止まっているクルマに駆け寄った。

止まっているクルマは白のワンボックス。

鍵は、かかっていない。

後ろのスライドドアを思いっきり開けた俺の目の前にあったのは恐ろしい物体だった。

残り3分を刻んでいる液晶。

「プ、プラスチック爆弾！」

その大きさか、病院の地下1階を吹き飛ばすには十分な大きさだった。

第五撃目 終了

Stage 1

五撃目 『迫る影』（後書き）

帝都病院地下一階で発見したプラスチック爆弾。

爆発まで後三分をきつたことを知らせる液晶。

爆発すれば、帝都病院が吹っ飛ぶ。

龍司は、帝都病院崩壊を阻止することができるのか!?

そして、敵の目的はいったい何なのか!

次回『ねじ曲げられた真実』

Stage 1 六撃目 『ねじ曲げられた真実』

赤、青、黄、緑、白、黒。

色とりどりのコードが目の前を通っている。

液晶のカウントダウンは、残り2分をきろうとしている。

機械的な音が刻々と少なくなっていく時間を知らせる。

普通の神経の人間ならこれだけで気絶してしまいうだろう。

そう普通の人間なら……。

「なるほど。これを切っちゃうとドンってわけね」

手前を通過する、緑色のコードをニッパーで切断する。

「ここは、電気が流れてるのか。そりれじゃ、ストッパーをかまして……」

「あの、会長？」

「んっ、どうしたの？」

「スイマセンが楽しそうに爆弾を解体するのはやめてください……」  
後ろから、爆弾の解体をみているのだが、まったくをもって緊張感がない。

ボーっとしていたら、会長が時計を解体している子どもに見えてしまう。

「なんで。楽しまないと、スリルは楽しむためにあるんだよ」

どこの中毒者ですか。

「よし。後は、この一本を切ったら解体終了」

液晶の残り時間は、まだ1分以上ある。

「……あっ」

突然なにに気づいたのか声を上げる有紗。

「ど、どうかしたんですか、会長？」

恐る恐る、聞いてみる。

「思ったんだけど、やっぱり爆弾って1秒前に止めるのがセオリーだよ」

ハイ？ 一体この人はなにを言い出すんだ？



「会長……。無駄なことしないでいいですからさっさと線、切ってください」

「え。だって1秒前に止めてこそ感動と緊迫感があるじゃない。そうしないと読者、離れていっちゃうよ」

会長、誰と話しているんですか。

読者だとか言っちゃってるよ。

「感動も緊迫感もいりません。だから、早く切ってください」

さっきから聞こえてくる単調な機械音でノイローゼになってしまっ  
そうだ。

「分かったわよ。切ればいいんですよ」

赤いコードにニッパーの刃先を持っていきパチンツと切断する。

すると、液晶の時間をカウントする早さが恐ろしく早くなる。

さっきまでの単調な機械音はよりいっそう早くなる。

「間違えちゃった」

「なにやってんですか〜!!」

ああ、めまいがしそうだ。

残り秒数は見る見るうちに減っていく。

もう、1桁台だ。

死んだな……

そう確信したときだった。

目にも留まらない早さでニッパーを動かし、有紗は白いコードを切る。

カウントは、ピタリと止まる。

もちろん、残り1秒で。

「うーん、今日はまあまあかな」

お願いですから、俺の心臓を止めようとしなしてください。

って言うか、マジで止まるかと思った。

「んっ?なにこれ?」

残り1秒で停止していた液晶パネルは、真っ暗になったかと思うと、ある文字が映し出された。

『勇敢な君に告げよう。これは、前菜に過ぎない。きっと、このストーリーのエンディングにふさわしい花火になるはずだ。では、帝国会議の日に』

「……花火だって？」

「ブラックケースになるわね」

腕組みをして有紗は目をつむる。

事件には、ケースと言われるランク付けが4つ、存在する。

ホワイトケースは、危険度があまりない事件を指す。ブルーケースは、傷害事件、殺人未遂。レッドケースは、殺人事件、重大建造物等の侵入、放火、もしくはその予告。ブラックケースは、大量殺人事件もしくは、その予告。テロ事件を指している。最も危険な事件。今の所、過去数件しか起きていないようなケースだ。

しかし、今回のプラスチック爆弾。

もし爆発していれば、おそらく、基礎が破壊された帝都病院は崩れ落ちていただろう。

「ブラックケースとなると、保安課も共同捜査に切り出すでしょうね」

「共同捜査って、じゃあ、警視庁が捜査権限を持つことになるんですか!？」

少し、興奮気味にはなす俺をなだめるように話す有紗。

「権限は警視庁に移るでしょうね。でも、コレは私達にどうにか出来るような事件じゃないわ。龍君もそれぐらいは分かるでしょう」

「……後のことはお任せします」

そう言うと、俺はそれ以上なにも言わずに駐車場を後にした。

一言もしゃべらず、その場を後にした龍司を見届けた有紗は目を細めて小さく呟いた。

「まだ、引きずってるのか……」

2日後

会長が言ったとおり、特殊公安課と特殊能力捜査課の共同捜査になった。

もちろん、警視庁が捜査権限の下で捜査が開始した。

「……今回のプラスチック爆弾の件と銃弾が見つからない連続殺人

事件は、おそらく同一人物だと思われるわ」

同一人物か……。

あんな爆弾、弾丸も作られるんだよな。

ちよつと、まずい相手だよなあ。

俺は、コーヒを飲みながら目の前の捜査資料に目を通す。

「課長。ちよつといいですか？」

普段から滅多に家を出ない火神が捜査課に来ている。

「どうしたの火神君？」

「はい、実はこの前に殺害された、西田と太宰の共通点を探してみたとところ、二つほど見つかりました。まず、一つは皆さんも知つての通り二人は犯罪者です。次に、この二人は……柳刃龍一 巡査部長に逮捕された経験があります。」

「!?!?」

勢いよく立ちあがった、龍司に捜査課の全員が視線が注目する。

柳刃龍一は、俺のそして姉さんの父。

俺がこの世で最も尊敬する人物。何でいまさら、父さんの話が……。

「父さんが……どう言つことだよ。」

俺は、ホルスターに収まっているミネベアをぎゅっと握りしめた。

「柳刃君のお父さん、龍一さんが、おそらくこの事件のキーポイントだと思っている。そして、E・Iが表す人物は恐らく、石沢英吉が次のターゲットでしょう。しかし、K・Sは該当する人物がいまませんでした。」

石沢英吉は、親父が死ぬ一年ほど前の事件で一度逮捕された人間だ。確か、三成商事に毒ガスを撒いた疑いで父さんに逮捕されたはずだ。しかし、明白な証拠が見つからなかったため、立件できず釈放となった。

俺は、形見のミネベアをぎゅっと握りしめた。

「僕の推測ですが、この事件のキーポイントは、柳刃龍一さんだと思っっています」

「分かったわ。私が調べておくわ。星野君？ 石沢英吉の監視、頼めるかしら？」

「石沢ですね。了解しました」

星野さんは、イスに掛けてあつた上着を手に取ると慌ただしく捜査課をあとにした。

「姉さ、いや課長！俺にできることは？」

俺は、身乗り出すように姉に聞いたが、戻ってきたのは思っていない答えだった。

「アンタは、待機よ。アンタが父さんを尊敬しているのは痛いほどわかっている。」

「だったら!」

「だからこそ待機よ。今のアンタを父さんが見たらこう言うに違いないわ。『冷静に物事を観察できるのが一流の警察官だ』っね。今のアンタが現場に行ったって足手まといよ」

一瞬、捜査課が静寂に包まれる。

俺は、苦々しく自分のイスに座り込んだ。

「課長。少々お時間よろしいですか?」

「良いわよ。先に取調室にいつて、蒲原君と紅葉ちゃんは、現場周辺の聞き込みよろしく。桔梗ちゃんは、資料室に行つて、過去の事件からこれに当てはまるモノを探してくれない?」

紙を受け取った桔梗も、一緒に出て行つた蒲原と紅葉もいなくなり、捜査課は、ガランとしている。

「」

姉さんも、取調室に入つていった。

「コーヒーでも飲むか……。」

書類が山積みになった、蒲原の机の前を通り、給湯室に向かった。

インスタントコーヒーの粉とお湯をポットに注ぐ。

ポットとコップを持って自分の席に戻ろうとしたが、俺はある人物の席の前で立ち止まる。

はきちつと整頓された、デスクの上には赤いノートパソコンが電源が付き放しで置かれている。

「火神のパソコンになら、何かいい情報があるかもしれないな」

キョロキョロと辺りを見回す。

依然として捜査課内は自分以外は誰もいない。

いけないと分かっていたのだが、俺は火神のパソコンのデータを眺め始めた。

この行為が悪夢の始まりだった。

「課長、龍一さんの最期の事件についてですが……」

「火神君。あの事件には関わらない方がいい。決して解き明かして



はいけない日本の闇よ。」

「闇ですか……」

「そう言えば、今回の事件。火神君はどう感じ取った？」

彼女は突然話題を変えると、イスに腰掛けた。

薄暗い部屋の中を照らすのはたった一つしかない机の上にあるスタンドライトだけだ。

「今回の事件。実行犯は一人多くて二人。かなりの少人数です。しかも、何か強い意志を感じ取ることが出来ました。」

火神は、奈菜の反対側のイスに腰掛ける。ギシッと軋ませながら火神を受け止める古いパイプイス。

「強い意志か、例えば……？」

「そうですね。例えば、狂った日本のリセット……とかですかね」

「プラスチック爆弾に shooting star（流れ星）か。一体何者なの？」

奈菜は、ブラインド越しに外を眺めながら呟いた。

その頃、星野は

「では、今から石沢の監視に入ります。中山さんは、もしもの時に備えて、周辺で待機していただけますか？」

星野は、覆面パトカーを運転しながらその他の捜査官と話す。

「ああ、分かった。私はここで降りるとするよ」

角張った顔つきでいかにも男らしい捜査官は、石沢の住むマンションの向かい側のビルの入り口で降りた。

「中山さん、気をつけて」

星野は、車を出す。

中山は、軽く手を挙げると近くのコンビニの中に入っていった。

「さて、犯人はどうやって石沢をやりにくるんだ？」

星野は、左右の通りを気にしながら覆面パトカーをマンションの前に止めた。

このマンションの周りには二十人ほどの捜査官が待機している。

犯人は、凶器の拳銃を持ってノコノコ来るだろうか？

いや、来るだろうな。

奴は自分のやることには絶対的な自信を持っている。

そうでなければ、二度も近距離から頭を拳銃でぶち抜いたり、帝都で一番デカい病院に爆弾なんて仕掛けるわけがない。

「必ず来る……」

一方、資料室にいる桔梗

「……コレでもないな。」

先ほどから山のようにある捜査資料に目を通してはいるが、一向にお目当てのものが見つからない。

「ウム……ンッ!？」

スカートのポケット内で騒ぎ出した携帯を手に取る。

「メールか」

ディスプレイには

着信一件：送信者 柳刃龍司

と表示されている。

少し、首をひねった桔梗だったがすぐにメールを開いた。

桔梗。

話したいことがあるから屋上にきてくれ。  
相棒だからこそ桔梗にしたい頼みなんだ。  
よろしく。

「ふっ……。結局、ガマンできんのか。仕方ない、屋上に行くか」

資料ばかり見ている、目が痛くなるので桔梗は、階段を使って屋上に上がった。屋上に唯一つながるドアを開けて、広い屋上にでる。周りには、あまり遮蔽物となる高いビルがないので、帝都がある程度見渡せる。

フェンスから、帝都タワーの方をみているひとりの少年。

「龍司。来たぞ」

桔梗がそう言うと彼は振り返った。

「すまないな。どうしても話しておきたいことがあってな」

龍司の言葉には真剣んみがよくこもっている。

「どうしたんだ？何か、いい証拠でも見つかったのか？」

「……いや、今から証明するところだ。」

ガチャリ

重々しい金属が当たる音がする。

桔梗に向かってぽっかりと穴をあけている銃口。

銀色のスライドが太陽光で鈍く輝く。

銃身には、発砲音を小さくするサイレンサーつけられている。

龍司の漆黒のミネベアは相棒の桔梗に向けられていた。

「……龍司。何の悪ノリだ？」

「悪ノリじゃねえ。俺の質問にしっかりと答えろよ、silver  
arrow（銀色の矢）」

「!？」

桔梗は驚きを隠せなかった。

それもそのはず、その名はU18部隊にいたところにつけられたものだ。

迷わず、標的を殲滅する姿から、そう呼ばれていたのだが。

この名を知っているのは、U18部隊の同僚ぐらいだからだ。

龍司は、拳銃を下げずに淡々と話を進める。

「桔梗。お前は、父さんの最後の事件知っているよな。いや、現場にいたんだから知らないとは言わせねえ」

「……ああ、知っている」

桔梗は、うつむきかげんに話す。

「あの事件で、父さんは一発の弾丸で心臓を撃たれて亡くなった。体内から見つかった弾丸はお前が当時使用していたソーコムピストルと一致している。……桔梗、コレは一体どういうことだ？」

龍司の声は震えていた。

心中では、怒りと、桔梗であってほしくないという小さな希望とが渦巻いていた。

しかし、桔梗の答えでさっきまでの心中の戦いは一方側に塗りつぶされてしまった。

「……私が、龍一さんを殺した」

静かに、しかしハッキリと桔梗はそう告げた。

「お前が、父さんを……」

もう、心中には怒りしか渦巻いていない。

「お前とはもう組めねえ」

龍司の指が引き金に掛かる。

桔梗は、何もせずうつむいている。

そう、死を受け入れたように。

龍司の人差し指は引き金を引いた。

バシュツという空気が漏れたような音と共に銃口が火を噴いた。

「くっ！！」

桔梗は片目をつむり、撃たれた腹部を押さえて、ひざをおった。

「すまないな……桔梗」

薄れていく意識の中、桔梗はその言葉を聞いた。

そのまま彼女は、力無くその場に倒れ込む。

もう、視界は真っ暗だった。

その光景を双眼鏡で見る男の姿がとあるビルの屋上にいた。

「ふっ……っ。」

双眼鏡で桔梗が倒れるのをみて男は、右側においてあったノートパソコンに手を伸ばしこう打ち込んだ。 K・S 清掃終了

最後に、パチンとエンターキーを押し、男はニヤリと笑いながらその場を離れた。

六撃目 終了



stage 1 六撃目 『ねじ曲げられた真実』 (後書き)

龍司は、桔梗に手をかけてしまった

そんな中、また新たな事件が帝都をにぎわせる。

暗闇のどん底に向かって転がり落ちるように加速する負のストーリー  
I。

無事に、帝都を守ることができるのか。

次回：七撃目 『闇に飲まれた帝都』

それでは、

Let's meet again next time .

Stage 1 七撃目 『闇に飲まれた帝都』

とあるビルの屋上で黒塗りの細長いケースを持った男の姿があった。屋上に備え付けられている貯水タンクの前に行くと、男はおもむろに黒いケースを開けた。

真っ赤な内張りがされているケースの中には各部品に分けられたライフルが横たわっている。

男は、手際よくそのライフルを組み立てる。

手慣れた手つきでライフルを組み立てると、屋上の端で静かにライフルの銃口を向かい側にたっているマンションに向けた。

スコープをのぞくとあるマンションの一室をみる事ができた。

「ふっ。」

かすかに笑うとリビングでくつろいでいる男の頭に標準をあわせた。

「死ね……。」「

星野は、石沢のマンション下で車の中から石沢の部屋を見上げていた。

その時だった。

パァーンという音が辺り一帯に響いた。

今は、明らかに銃声。

音の響き具合と銃声の音からして野外からの射撃だ。

「!?!」

向かいがのマンションに目を向ける。

かすかに見えた黒い銃身。

ちっ、やられた!

車を飛び出したタイミングで胸ポケットに入れていた携帯がなる。

走りながら、携帯を開き通話ボタンを押す。

「もしもし?」

「星野か。今銃声が聞こえたぞ！」

「中山さん？犯人は、向かい側のマンションの屋上です」

「屋上に向かっているところだ」

カツカツと言う階段を駆け上がる足音が受話器の向こうから聞こえてくる。

「俺もマンションに向かいます！」

「いや、こっちに来なくていい！お前は、石沢のマンションに行け  
！！」

「了解！」

マンション一階のロビーに駆け込み、右側にある階段急いで三階まで駆け上がる。

石沢の部屋は、309号室。

一番奥から二つ手前の部屋だ。

部屋の前までいくと、ドアを開けようとするが、鍵がかかっている。

「ちっ！」

軽く舌打ちすると、ドアに体当たりしてドアを破る。

転がり込むように部屋にはいると、そこには派手に頭を打たれた無残な遺体が寝転がっていた。

部屋中に血を飛び散らしている。

「遅かったか……」

星野は、遺体に駆け寄ることなくその場に立ち尽くした。

ベランダに続く大きな窓は、派手に割れている。

再び、胸ポケットの携帯になる。

「もしもし？」

「もしもし、中山だ。犯人に逃げられちゃった。屋上からロープ一本で降下するなんて、奴は相当できるぞ。」

警察もいる中、白昼堂々ライフルで石沢を殺しにくるとは。

ターゲット

相手は、かなりの自信家だ。

じゃなかったら、ただのバカだろう。

「警察がいながらもみすみす殺されてしまうなんて。一体何者なんだ？」

その頃、捜査課内でも事件が起きていた。

「課長、捜査課内にはいませんね」

「勝手な行動を！」

菜奈は、イラついていた。

火神との話が終わり、取調室を出て来たときに龍司の姿が無かったのだからだ。

あれほど、ねんを押していたのにアイツは！！

菜奈は、ディスクの上に備え付けられている電話機を荒々しくつかむ。

「こちら、S A A F課長の柳刃菜奈。至急、署内の出入り口に検問を張って下さい！重要参考人は柳刃龍司。署内で発見次第確保。少々手荒でも許します！」

「課長!？」

火神でさえ、菜奈の行動には驚いた。

目つきといい、雰囲気といい、いつもの菜奈ではない。

しかし、単に龍司に怒りを露わにしているようには見えない。

なんだか、焦りのようなものも見て取れる。火神は、とりあえず自分のデスクに戻り、電源をつけっぱなしだったパソコンに目を向ける。

「?」

ごくわずかだが、パソコンの位置がずれている。

それに、デスクの上には、数滴ほど水らしくものがある。

いやな予感がした火神は、パソコンの使用履歴を出す。

つい数分前に、パソコンの使用履歴が残っている。

どんなことをしていたのかをさらに調べる。

「な、何だつて!?!」

使用履歴には、こう記されている。

ケース35：銀行強盗事件

軽傷者：三名

死者：一名（死者 柳刃龍一 巡査部長）

「け、ケース35……」

「ケース35ですつて!?!火神君、どういうこと?」「龍司君は、  
どうやらこのファイルを見たようです。」

そう言つて、パソコンの画面を菜奈にむける。

画面には、ケース35の事件に関わつた当時の捜査員並びにU18  
部隊の隊員の名前が書かれている。

「まさか、アイツ!」

当時のU18部隊の隊員名には、桜咲桔梗の名前が書き込まれてい  
る。

「まさか、桔梗ちゃんを問いただしたりしてないでしょうね!」



ポケットに突っ込んでいた携帯を引きずり出すと、桔梗に電話をかける。

しかし、一向に電話がつながる気配はない。

「いやな予感がする……。火神君！至急GPSで桔梗ちゃんの携帯を！」

「了解しました。五分待つてください。」その頃、屋上では。

「これで俺は一応、殺人犯ってことか……」

屋上の真ん中には、血だまりの中倒れている桔梗の姿がある。

龍司は、先ほどまで自分たちを双眼鏡でみていた男がいたビルをじつと眺めた。

ちょうどその時だった。

桔梗のスカートポケットから携帯の着信音が聞こえてきた。

「まさか、姉さん？」

倒れ込んでいる桔梗に歩み寄り、ポケットから携帯を取り出す。

携帯のディスプレイには、柳刃課長と映し出されている。

「マズいな、早くここから離れねえとな。」

用意しておいたロープを屋上から垂らす。

といっても、警察署の建物は8階建て。

ロープは、それほど長くはない。しかし、龍司は、ロープを体に巻き付けて、高さに臆することなく4階まで降下する。

4階は、禁煙室になっており、ベランダに簡単に降りることができた。

幸い、禁煙室には誰もいない。

きつと姉さんのことだ、署内には既に緊急警備体制にはいつているだろう。

署内で、ほかの警官に見つかりでもしたら、直ぐに応援が駆けつけてくるに決まっている。

他の警官に気をつけながら、廊下を進む。

やれやれ、警官なのに堂々と廊下を歩けんとは、とりあえず目指すは2階の資料室だな。龍司が、四階のベランダに降りたった頃。

「課長！分かりました。桜咲さんは、この建物内にいます！」

「火神君、ちょっと見せて」

パソコンの画面には、確かにこの建物内に桔梗の携帯が反応している。

「……………！！！」

顎に手を当て、パソコンを睨んでいた菜奈は、捜査課を飛び出した。

「か、課長？」

慌てて、火神も菜奈の後を追う。

菜奈は、全速力で走った。

モヤモヤとしたいやな感じが胸から離れない。

龍司、アンタまさか！

廊下を突っきつて、階段をひたすら駆け上がる。

階段の突き当たり、屋上にでるドアを開けて、菜奈は驚愕した。

「課長、急にどうしたんですか？」

何とか追いついた、火神は菜奈を見る。

菜奈の顔は蒼白になってある一転の視点から目が動いていない。

火神は、ふとその視線を追って屋上をみた。んっ？

屋上に何かが転がっている。

！！！！！！

物じゃない！

人だ！！

桔梗が、屋上で倒れている。

菜奈と火神は急いで桔梗に駆け寄る。

仲間が生きていることを願って。

桔梗は、血溜まりの中に倒れている。

菜奈が、慌てて桔梗の様子を見る。

火神は、右手は、べっとりした真っ赤に染まっている。

「クソっ！救急車を！！」

ケイタイをとりだして119のボタンを押そうとする。

その手をパシッと菜奈がつかんだ。

「課長！？」

「……、救急車は必要ないわ」

菜奈は、そつと桔梗を抱き上げた。

「まさか……、もう手遅れ……」「ウソダヨナ……、リュウジクンガ？

サクラザキサノヲ殺した？？」

「逆よ。彼女は眠ってるだけ。」

「へっ？」

菜奈は、クスリと笑った。

「その手、血生臭くないの？」

「……」

さつき、血に触ったはずの手は、血生臭いと言う臭いには程遠い。

むしろ、人口的に作られた塗料の匂いに……。

「まさか、ペイント弾……」

「そう、ペイント弾に麻醉弾。アイツ、なかなか手の込んだことを

してくれたわね」

菜奈に抱えられている、桔梗からは静かな寝息が漏れている。

「何でこんな手の込んだことを」

「アイツなりに考えがあったんでしょ。答えはたぶん、例の掲示板に出ているはずよ。さっ、捜査課に帰りましょ。」

菜奈は、桔梗を抱きかかえ階段を下りていく。

火神も、菜奈のあとを追って屋上からたちさった。

そのころ資料室では

山積み積み上げられた資料の中で、龍司は頭を抱えていた。

「えっと、コッチがケース34、そんでこっちがケース36……。ケース35に関する資料がない……」

なぜだ？

警察所内の資料が紛失するなんて、どういうことだ……。

もしかして、犯人は『警察官』！？

だったら、なぜ桔梗を標的に……。

その時だった、後ろドアが開いた。

「龍司……」

恨みのこもったような声。

「よくも、私を撃つたな……」

ドアの前には、服を真っ赤に染めた（俺が染めたのだが）桔梗が仁王立ちしている。

誰か、事情を知らない人が桔梗をみたら驚くだろう。

明らかに、出血多量に見える。

我ながら、少々やりすぎたと思っている。

昔、調子に乗って作った特性ペイント弾は予想以上の働きをしてくれている。

だって、血だまりできてたもんな……。

あの時は、作った本人である自分でさえ驚いた。

そんな見た目、出血多量少女は満面の笑みでこちらを向いている。

「こえええ！」

この一言につきる。

「龍司、何かあったらどうだ？」

ズイズイツと少女は俺に歩み寄ってくる。

「す、スイマセン！」

「……………」目をつぶって歯を食いしばっているのだが、一向に攻撃されない。

恐る恐る、ソッと目を開いてみる。

そこには、ギュッと拳を握りしめたまま泣きそうな顔をした桔梗が唇を噛みしめている。

「……………」き、桔梗？」

「正直言ったらどうだ、私のことを人殺しだと……………」

……………。

数十秒の沈黙が流れる。

この沈黙は桔梗にとって、永遠の時のように感じていた。

静かな、部屋の中でゆっくりとそして、ハッキリと龍司は断言した。



「言うわけないだろう、俺はおまえの相棒だぞ。まあ、確かに直接的に聞いたときは理性が飛んじまいそうだったが、今ははっきりと言えるお前は人殺しなんかじゃない。俺はそう信じてる」龍司は、にっこりと笑って答えた。

まるで、子供のような純粋な笑顔で。

ポロツと、一粒の涙が頬を伝い床に落ちる。

後に続くように、次々と次々と涙が瞳からこぼれ落ちる。

「ちよ、泣くんじゃねえよ!!」

龍司は、あたふたしながら桔梗を慰めようとする。

その光景が余りに目滑稽で、でもあふれ出る涙は視界をぼやけさせた。

人差し指で涙を拭くと、桔梗はわずかに微笑みながら答えた。

「そうだな、最高の相棒だ」

「お、おう」

龍司は、照れたように顔を逸らす。

「きつと、龍司なら……」

「へっ？なんか言ったか？」

「いや、何でもない。さっ、捜査を始めないとな」桔梗は、クルリと回ると資料室を出て行った。

桔梗の背中が、どこか嬉しそうに見えた。

七撃目 完

Stage 1 八撃目 『落ちた警察官』改訂版

「うーん、ないなあ」

資料室中を探し回ったが、ケース35についての資料は何一つ見つからなかった。

「なあ、桔梗。本当に覚えていないのか？」

「うん、覚えてない。気づいたら、私の拳銃の前に龍一さんが倒れていたんだ。やはり私が……」

「もし、そうだとしたらなぜ警察はこの資料を残していないんだ。もっと深い何かが、この事件の裏に隠れているはずなんだ……。クソっ、それさえ分ければこの事件を何とかできるかもしれないに！」

龍司は、頭を抱えて自分の机に座った。

「ちょっと待った、龍司君はいつたいなにを知ってるんだい？」

火神は、少々声をあらげて、立ち上がった。

「そう言えば、言ってなかったな。血の帝都、あのサイトをみてみな。」

「あ、ああ。」

火神は、パソコンを立ち上げ龍司にいわれたサイトを開く。

「どうだ？全員清掃終了になってるだろ？」

確かにサイトの頭文字は全員清掃終了となっている。

「まさか、最後のK・Sって桜崎さん!？」

「そう言うことだ。そして、桔梗が死んだということになっている  
ということはおそらく犯人は現場をみていたと言うことだ」

「と言うこと？」

「俺が考えるには犯人は、警官である確率が高い」

捜査課内部が静まり返る。

「やっぱりか……」

菜奈は腕組みをしていすに座っている。

「姉さんは、何を知っているんだ？」

姉は、一枚の紙をえんじ色のファイルから取り出すと、龍司に差し出した。

「警察所内から紛失した参考資料のリストよ」

紙に書かれた、いくつもの参考資料リスト。

「これ全部が？」

「ええ……」

姉はため息混じりにいすに座り込む。

資料リストの大半が柳刃龍一の担当した事件ばかりだ。

「いったい誰なんですかね。なにが目的なんでしょうか？」

火神もため息をつきそんな顔をしている。

「捜査難航か……」

捜査課は、重々しい空気が漂う。

「……よし。もう一度、この事件を始めから洗いざらいに調べよう。きつとまだ何か気づいてないものがあるはずだな」

「そうね。黙ってみていても仕方ない。一時間後に、会議をするわ。いいわね」

「了解！」「」

一時間後、捜査課の人間が集まったところで会議を始めることになった。

「まず、今回の事件に関係のありそうな事件を探してみました。これを見てください」

火神は、ホワイトボードに書かれた文字を指差す。

ホワイトボードには、

・弾丸製造事件

（弾丸、流星について）

・容疑者連続殺人事件

「今の所、こんな感じですね」

火神の話が終わったところで、すかさず紅葉が手を挙げる。

「あのさ、流星についてイマイチ理解できないんだけど教えてくれる？」

「うん、詳しい情報は手に入っていないんだけど、この弾丸は能力者用に開発された弾丸なんだ。」

shooting star（流星）の特徴はまず、能力を使うことで対象物だけを破壊することができる弾丸になる。

そして、完成品になると発砲音がほぼなくなるという特徴を持っている。

「うえ……。危なっかしい弾丸やな」

いつもはいテンションな蒲原も苦虫をかんだような表情だ。

それもそうだろう、それ程の弾丸がもし本当に完成しているとすればさすがにやっかいだ。

「うーん、あくまでも噂なんだよね」

「僕も、噂であってほしいと思ってるよ。それじゃあ、容疑者連続殺人事件について、蒲原君、よろしく頼むよ」

「おう！それじゃまず、犯人の手口から」

一人目は、路地裏で頭部を打ち抜かれたことよって死亡

二人目は、車を運転中に頭部を打ち抜かれたことよって死亡

三人目は、自宅マンションにいたるところを向かい側のマンションから狙撃され死亡

「いずれの犯行も頭部を銃弾で一発。コレから分かることは犯人は、相当の銃の名手だと分かる」

「厄介すぎるね……」

星野さんは、資料に目を通しながら頭を抱えた。

「うーん、どれもつながっているようでつながってないな」

桔梗は、顎に手を当て考える。

「そうね。合いそうで合わないジグソーパズルのピースみたいね」

「ジグソーパズルか……」

俺はいすの背もたれにもたれかかった。

「なにが足りないんだろうな」

「犯人の目的すら分からんからな……」

「考えていてもらちがあかないわね。よし、聞き込みと現場をもつ一度、探しましょう」

姉は、机を叩くように立ち上がると捜査課の全員に伝える。

「そうだな。現場百回っというし、桔梗行くぞ！」

「了解！」

俺と桔梗は立ち上がって捜査課を出ようとしたときだった

「龍司！桔梗ちゃん！」

姉に呼び止められ、一度開けかけたドアを閉めた。

「拳銃携帯命令……犯人はまだあきらめたと決まってるわけじゃな



いからね」

「了解！」

二人で敬礼すると捜査課から走り去った。

「龍司……後は頼んだわよ」

奈菜は、静かに席に座りながらそう呟いた。

八撃目 完

stage 1 九撃目 『交差点からのメッセージ』（前書き）

さて、今回より新コーナーです。

今回から、前書きにその話に登場する武器、物、あるいは人物のメモを書いていきますね。

一応ネタバレにはなってないので、良かったら見て下さいね。

今回は

『ニューナンプM60』  
です。

この拳銃は、よく刑事ドラマに出てくるリボルバーの拳銃です。

装弾数5発。

シングルアクションでもダブルアクションでも撃てます。

日本のミネベアと呼ばれる会社で製作されています。

にM60の60は、1960年を指していて、その頃からあった拳銃何です。

ちなみに、よく警察の拳銃の一発目は空砲（音だけで弾は飛び出さない）と言われていますが実際はそうではないらしいです。

特別でない限り、全弾普通の弾丸らしいです。

作者は、ネットでこのことを知るまで「発目は絶対に空砲だと思っ  
ていました。

さて、前書きは「ねくらいにしてそれでは本編へどうぞ！

stage 1 九撃目 『交差点からのメッセージ』

俺は、ホルスターに形見のミネベアを納める。

コイツを使わなくてすむならいいんだが。

「桔梗？用意すんだか？」

「ああ、今終わった」

桔梗は、先ほどまでの服から着替えていた。

「去年まで使っていた制服なのだが大丈夫だろうか？」

青いラインが入ったセーラー服に黒のプリッツスカート。

前の制服とはU18の制服なのだろうか。

聞きたいところだが、今は一分一秒が惜しい。

桔梗と一緒に、初めの事件現場となった路地裏に向かった。

「ここだったよな」

いまだにkeep outと書かれた黄色いテープが貼られたままの現場に訪れていた。

「流れ星の事が分かった初めの事件だったな」

桔梗は、現場を見つめて腕を組む。

そう、ここから始まったのだ。

「流れ星か。犯人は何をしたいんだ？」

その後、俺たちは1時間ほど現場を探したが新たな手がかりが見つかることは無かった。

帝都会議まで後8日を切った日だった。

学校にいても、俺の心は落ち着いてなどいなかった。

今、帝都市民全員が人質にとられるかもしれない状況下で何もできない自分に腹が立ってしょうがなかった。

「龍司……。放課後時間あるか？」

近寄ってきた桔梗がふと口にした。

「あ、ああ。大丈夫だが。どうしたんだ？」

「少しついて来て欲しいところがあつてな。放課後に玄関で待つてる」

そついい残すと桔梗は、自分の机に戻り教科書に目を通していた。

結局授業に集中することもできず、無駄に時間だけが過ぎていき、やがて放課後になっていた。

俺は、荷物を持ち桔梗の言われたとおり玄関に向かった。

玄関には、まだ桔梗の姿は見えない。

俺は靴箱にもたれかかり、これからのことを考えた。

奴が予告してきた帝都会議の日の花火。

恐らく爆弾のことだろう。

今までの犯行でもってそう言うことがあったが、犯人や容疑者に殺しの目を向けたのは分からもない。

だが、善良な一般市民に目を向けたんだ。

市民を守るはずの警察官が、市民の安全を脅かすことになるとは……。

今のところ、犯人が警察官である可能性について知っているのは自分達SAAFの人間のみだ。

もし犯人にこの情報が漏れたらなにをしでかすかわからないので隠すことになったが、未だに犯人に近づく有力な手がかりが見つかっていない。

「り……りゅう……龍司。おい、龍司！聞こえているのか？」

気づくと桔梗の顔が目の前にあった。

「どわ！桔梗か・・・スマン、考え事をしてた」  
桔梗は少し苦笑すると、すぐにいつもの顔に戻った。

「さて、待たせて悪かったな。目的地に行こう」

桔梗について俺は歩く。

桔梗がどこに向かっているのかは俺は分からない。

校門をでて、10分ほどでその場所に着いた。

そこは、なんの変哲もない交差点。

その交差点の信号機の袂たもとに小さな花束が置かれていた。

6年前、ここで起きた凄惨な事件を俺は知らない。

「6年前。私の覚えている範囲であの日のことを話すよ」

桔梗はゆっくりと目をつむって話し出した。

あの日、連続強盗および殺人犯が人質の女性に拳銃を突きつけたままこの交差点まで逃げてきていた。

警察とU18強行部隊に囲まれた状態の犯人はいつ人質を殺してもおかしくない状況だった。

もうすでに、アメリカの本部からはU18強行部隊に発砲許可が出  
ていた。

もちろん犯人にばれないように散らばった少年少女の中に桔梗もい  
た。

そんな中で、日本のある警官だけが犯人を説得しようと粘っていた。

その警官が俺の父さん、柳刃龍一だった。

しかし、そんな父さんの努力もむなしく、強行射殺命令が出されU  
18の部隊が動き出した。

.....

死者一名、負傷者多数の事件。

「ここから先は、私の記憶には.....ない」

遠くの空を見つめて桔梗は、右手を握りしめた。

その後、父さんの遺体は俺の知らない間に埋葬され、俺の手元に残  
ったのは、形見のミネベアだけだ。

あの事件以来、この交差点にはいくつもの花がおかれていった。

交差点には監視カメラも設置され、父さんの代わりにこの街を見守  
っている

「いかな.....こんな所で後ろ向きになっては」

「ああ。俺たちにできるのは、犯人を捕まえることだ」



「なあ、龍司。あのマンションって」

桔梗が顔色が鋭くなった。

桔梗の指さす方向の先に立っている茶色のマンション。

「んっ？あれは、確か犯人があこのマンションから向かい側建物にいたの男を撃つたんだ……」

俺の頭に電撃のように走り抜けていくものがあつた。後ろを振り向き、それを探す。

この交差点には、監視カメラが俺たちより少し高い位地に設置されている。

監視カメラは普通高いところから見下ろすように設置されているはずだが、交差点の監視カメラだけは、父さんの背の高さに合わせて街を監視するではなくて、見守ると言った形になっているらしい。

「あつた、コイツだ！」

他より低めの設置されたこの監視カメラの画面にあこのマンションも映る向きを向いている。

「桔梗！行くぞ！」

「ああ！」

俺たちはそう言って走り出した。

走りながら俺は、火神に電話をかける。

呼び出し音が3回も鳴らないうちに本人が電話にでた。

「火神！今すぐ三丁目の交差点に設置された監視カメラの石沢永吉の射殺時間の映像を入手してくれ！」

「えっ？なんでだい？」

「理由は後ではなす。後できればコレは隠密に頼む。こっちの調べることが終わったらそっちに向かうから捜査課のみんなを集めといてくれ！」

俺は、そっぴい終わると電話を切った。

「龍司、目的地はあのマンションか？」

「ああ！もしカメラに映る位置だったら、可能性は確証に変わる」

俺たちは、階段を駆け上がり屋上にでる。

「たしか、資料によると……ココだな」

マンションの屋上の端に付いた縦長の傷跡。

犯人は、ここからロープを垂らして下に逃げたのだ。

残念ながら、ロープを下ろしたのはマンションの裏側のなにもない  
空き地。

こちら側には監視カメラもなく、犯人を捕らえることができなかつ  
た。

しかし、ビルの端にたった俺からあの監視カメラが小さく見えてい  
る。

「捕まえたぜ」

後ろから、人の気配を感じた俺と桔梗は、ガバツと振り向いた。

「おっと！俺は怪しいもんじゃねえよ」

そう言って両手をあげたのは中山さんだった。

「お前たちも現場を見に来たのか？」

中山は、苦笑しながら歩み寄ってくる。

「まあ、そんなところですね。でも、中山さんは違つんじゃないんで  
すか？」

彼の歩みが止まる、首を傾げてまた笑った。

「ハツハツハツ……警察官が現場に来て、他にすることなんて  
ないだろ」

笑う中山にキリツとした鋭い目つきで俺は吐き捨てる。

「中山さん、アナタはここで犯人を取り逃がしたんですね？」

「……ああ、そうだ。まさかロープで逃げるとは思ってたからな」

「ええ。本当にその通りならばね」

「んっ、柳刃君、何が言いたいんだ？」

「あの時、あなた以外にこの屋上に誰もいなかったんじゃないんですか？」

「な、なにをバカなことを……」

両手をポケットにつっこでいる中山はバカバカしいと言った顔をしている。

「俺の推理が正しかったら、ロープを使って降りる人影なんてなかったはず」

「へえ。どこにその根拠が？」

「監視カメラですよ。交差点の監視カメラは低く設置されているため周りの建物もよく映っているんですよ。」

「そうか……それは、見落としていたよ!!」

ポケットから拳銃を取り出した中山は、いきなり発砲した。

だが、俺と桔梗もここに来たときからそうなると思っていたので、中山の放った銃弾が体をとらえることは無かった。左右に2人共が分かれる形で飛び退く。

一番近くにあった貯水タンクの物陰に隠れホルスターから、エアガンを抜く。

相手は、銃になれている危ない奴だ。

しかし、2対1になっただらこちらにも勝機はある。

俺は牽制でエアガンの三点バーストを撃ち込んだ。

「ふっ！銃の腕前は、親父さん譲りだな」

中山が半笑いに答える。

続いて、桔梗のCZの銃声が2発響いたが、中山に当たったようには思えない。

「腐ってもアンダー18か。」

中山もこちらに向かって発砲してくる。ビシッビシッと近くで火花が散る。

あの野郎、この状況下で怯みもしない。

さつきちらつと見えたあいつの拳銃は、ニューナンプM60。刑事ドラマよく見るリボルバー式の拳銃だ。

リボルバーの長所は、不発弾や弾頭の形状、火薬量に左右される事

がない信頼性。しかし、短所として装弾数の少なさ、銃弾の再装填リロードに時間がかかると言う、複数の敵との銃撃戦に致命的な弱点を持っている。

なんて早いリロードだ!!

こちらに分があると思っていたが、マズいな。

「さっきまでの勢いはどこに行った?」

クッククツと、中山は笑う。ダメだ。下手に動けば撃たれる。

桔梗もそれが分かっているのか飛び出すようなことはしない。どうする? 絶体絶命じゃないか……

俺が、中山を伺うその刹那。

ビシッ!

俺の目の前を一迅の風が駆け抜けたかと思うと中山の足元のコンクリートがはじけた。

俺も中山も驚く。床のコンクリートにめり込んだ銃弾。

時間をおいてパーンと言う花火のような音が響く。

コレは!?

発砲音より弾丸が先に到達するということは、音速を超えた速さで敵を全滅する狙撃者スナイパー以外に誰もいない。

俺は、2キロほど先にいる小さな人影が見えた。

あんな所から撃ってきたのか!?

しかも、今の攻撃力からして……あ、アンチマテリアル対物用ライフルだと!

「2対1とおまけにスナイパーには、装備が心許なかったようだ。君たちを舐めていたようだ。ここは出直させもらうとするよ。帝都会議の時に会おう!」

そう言ったときだった、ボスンという変な音がしたかと思うと、あたりが真っ白になった。

しまった、煙幕か!

気づいたときには遅かった。

視界が1メートルと聞かない中で奴の大笑だけが響いていた。

stage 1 九撃目 『交差点からのメッセージ』（後書き）

楽しんでいただけましたか？

最近更新ペースが遅いので、安定した更新ペースで書けように頑張  
つていきたいと思います。

今回は、

『魔の午前11時50分』

です。

それでは、

Next time, let's meet .



stage 1 十撃目 『魔の午前11時50分』（前書き）

さて、今回は『能力階級書』についてです。

『能力階級書』とは、個人個人の名前、性別、生年月日、能力階級を書き記したカードのことです。

このカードは、国によって管理され重要な建物にはいるときなどに使用したり、身分証明書としても使用できます。

ちなみに能力階級値は5段階で表記され、下からD C B A  
Sと書きます。

実は、龍司の能力の正式名称がありまして、龍司の能力正式名は『限界破壊』という名前です。

龍司の能力階級値は、Bなので、カードには スキルB物体干渉型  
（指定した物に能力を使って操作する事を物体干渉型といいます）と表記されます。

紅葉の『直視』のような、世界干渉型（周りの状況を能力を使用して理解したり、能力が周りの状況事態に影響を及ぼす）のは、スキルB世界干渉型 と表記します

さあ、本編はいよいよラストに近づいてきました。

皆さん楽しみにしていてくださいね！

「チツ、逃がしたか……」

中山の姿は、すでに屋上からいなかった。

煙幕をうまく焚いて逃げたのだ。

しかし、向こうの建物から狙撃してきたのは誰だ？

狙っていたのは中山みたいだったが、味方と断定するにはまだ明確な証拠がない。

目測で、狙撃者のいた建物からこのマンションまで約2キロ。

発砲音とちらつと見えた形からしてバレットM82アンチマテリアルライフルで間違いないだろう。

1.5キロ先の、人間の胴体を真っ二つに裂くくらい朝飯前ほどの威力を誇り、その弾丸の初速は秒速853メートル。これは音速の約2.5倍。

生身の人間が相手をするには余りにもたちの悪い銃だろう。

「後は、中山を指名手配すれば何とかなるか？」

俺の隣にやってきた桔梗も、向こうのマンションを見ている。

「どうだろうな。それで捕まってくれるなら、苦勞に越したことはないんだがな」

再装填速度大きな致命傷をもつリボルバー式の拳銃で2人を相手するくらいの腕前だ。

簡単に捕まるようには思えない。

「とりあえず、捜査課に帰るか。姉さんに報告しないといけない件もあるしな」

「ああ、そうだな」

捜査課に帰って、犯人が中山刑事だったこと、狙撃してきた奴のこゝとを報告した。

そして、俺の推理通り、あの監視カメラには一人の人影しか映っていなかった。

「……中山さんが犯人だったのね」

菜奈は、いすにもたれるように座りながら手を組んだ。

「課長、中山さんに今回の事件の動機になるものって思い当たりま

すか？」

横で報告を聞いていた星野さんは信じられないというような顔をしている。

星野さんは、警察官になってから多くの事件を俺の父さんと中山刑事の下で解決してきたので、2人は言わば恩師のような先輩刑事に当たるのだ。

信じられないと思うのも当たり前だろう。

「蒲原どう思う？」

捜査課の端でコーヒを飲んでいる蒲原に問いかけてみる。

「ああ、俺もさっぱり動機が思いつかねえ」

「中山さん、いつも正義感に熱い人だったもんね。まさに、警官の鏡って感じだもんね」

紅葉も、事件のファイルを見ながら話す。

「やはり、柳刃龍一さんに関係があるんですかね」

火神が、出したこの結論が一番今は有力そうだ。

しかし、一体何があったら警官の鏡のような刑事がこの事件を犯し

てしまったのか、この事件には、表面では見えない深い何かがありそうだ。

そんな、捜査課が思考を巡らしていた時刻、帝都某所である会議が開かれていた。

「諸君……今帝都の秩序が乱れつつある。このままでは、5年前の悲劇を繰り返してしまう」  
長机の上座に座る人物は、静かに言う。

「かつての東京がそうだったように、我々が作り上げた帝都が滅ぶのを指をくわえてみているのでは5年前と状況は一向に変わらない。」

我々は、全力で帝都崩壊を防がなくてはならない」

数秒の沈黙があたりを包む。

「帝都を破壊しようとしているのは、中山大二郎。奴を見つけ次第……射殺せよ」

その一声とともに部屋中の人影たちが部屋を去っていく。

1人残った部屋で、男は呟いた。

「この帝都は、誰にもやらん……」

「はぁ、結局捕まえられなかったか……」

ため息をつく一人の捜査官の姿がビルの上にあった。

長い金髪を風になびかせながら、目の前にそそり立つ帝都タワーを見据える。

その背中に背負われたギターケースを見れば、通りすがりの学生にしか見えない。

「帝都会議……一体、何が起こるのかしら」

彼女は、クスツと笑うとギターケースを床においた。

彼女は、クスツと笑うとギターケースを床においた。

同時刻、パトロール中の龍司と桔梗は、日本橋に来ていた。

「ハア……」

大きな溜め息をついた所で今の状況が打開出来る訳ではない。しかし、人間は余計な二酸化炭素を排出するべく溜め息をつく。

「心配していてもなにも終わりはないぞ。今は、私たちにできる

ことを完璧にこなすまでだ」

「……そうだな」

俺たちは、会議の行われるビルの入り口まできていた。

ビルの反対側に建っているの帝都ツリーが窓に反射している

「能力階級書と身分証明書を提示していただけますか？」

入り口の機械が俺たちに話しかけてくる。

機械独特の一字一字話すしゃべり方には何となく違和感を感じる。

俺は、胸ポケットから能力階級書と呼ばれるカードと警察手帳を機械の前に提示する。

機械がウィーンと、モーター音のような音を立てて読み取る。ディスプレイにOK!と表示されたので前に進む。

そう言えば、前に思ってたけど桔梗の能力階級は何なんだ？

「なあ。桔梗の能力階級はいくつだ？」



「私か？私は、能力Aだ。<sup>スキル</sup>だが、それがどうかしたのか？」

能力A！！

おいおい！マジか！

能力Aって言ったたら、最大能力階級の1つ下じゃねえか！

確か、Aに匹敵するのは、姉さんの能力『空間遮断』と同じなんだろう。

一体どんな能力を持っているんだよ。

「な、なあ。どんな能力何だ？」

「すまない。この能力は私自身好きじゃないんだ……。だから教えられない。本当にすまない」

「そうか。まあ、話す気になったときでいいさ」

俺は、前を向き直る。

そうだ、今は目の前の問題を片付けないな。

犯人の正体は、分かった。

しかし、このままでは事件の全てを露わにするパズルは完成しない。合わないピース、無いピースが存在している以上、事件の完全解決

は実現しないからな。

動機が、イマイチ明確に分からないんだよな。

まあ、おそらくの推測はつく。すべての引き金は、六年前の事件。

しかし、あの事件に関して聞けそうな人間が近くにいない。

あるいは、中山を捕まえれば分かるかもしれない。

俺は、左手につけた銀色の腕時計を見る。

「もう、11時か。このビルの見回りが終わったら、昼にでもするか……桔梗、どこか行きたい店でもあるか？」

「んっ？ 渚食堂に行きたいところだが、時間がないからな、近くのファミレスでかまわないぞ」

さて、近くにファミレスあったか？

12時から1時30分までは、俺たちの休憩時間だからな。

一通り、ビルを見終わってビルを出たのが11時40分だった。

まさか、10分後にあんなことが待ち受けていようとは、思っても

いなかった。

近くのファミレスに行くべく、大通りを歩いていた俺たち。

時刻は11時50分になろうとしている。

帝国会議は2時からだかゆっくりできると思った矢先、俺たち全員に配布されたイヤホンマイク型の無線機にある声が流された。

勿論、流したのは警視庁の人間ではない。

それは、聞き覚えのある中山の声だった。

「さあ、刑執行猶予の時刻の時間だ。後2時間で、この忌まわしき帝都が吹き飛ぶ。君たちは、阻止することができるかな」

そう言い終わると一方的に無線が切られた。

「り、龍司……」

「ああ、とうとう、来ちゃったな」

この帝都崩壊宣言は、何としても阻止してみせる。

俺は、腕時計のアラーム機能を2時間後の1時50分にセットした。

「2時間でこの帝都未来が決まる。桔梗行くぞ！」

俺は、ある程度このことは予測していた。

今まで、こちらの情報網をかいくぐって逃げられていたが今度こそ奴の尻尾を捕まえれそうだ！

「ちよっ！龍司！どこに行くんだ！？」

「科学捜査研究課だ！」

「か、科学捜査研究課？」

イマイチ理解できていない桔梗を引っ張り警視庁科学捜査研究課に向かった。

昔に比べ、最近の事件は現場の証拠品からの犯人特定が難しくなってきた。

しかし、日々進化する科学を捜査に取り入れたのが科学捜査研究課、通称：科研だ。

科学的観点から、犯人の逃れない証拠品を見つけだす彼らの仕事は、近年注目を浴びている。

「豊崎！ちよっといいか？」

科研のドアを思いっきり開けながら、室内にいるはずの友人の名前

を呼んだ。

「おっ、龍司！久々やな」

髪がボサボサに荒れていて、少し汚れた白衣に身を包んだ少年が現れた。

彼の名は、

豊崎 光司俺の中学からの友人で、俺と同じ高校を通っているものの、職場が違つたためなかなか会うことがない。

篠原警護高校は、学生の約半分が、職場にいることが圧倒的に多いと言つ珍しい学校だ。

職場のレポートと、実習技能試験に合格さえすれば、進級できるシステムだ。

職場にいかず、学校授業を選択する学生と職場授業を選択する学生は半々といったところだ。

俺は、早く父さんのしていた仕事に就きたくて職場授業を選択した。

だから、ふつうの高校生に比べ授業は結構受けていない。

その代わりに、中学の時にかなり詰め込んだんだが……。

「豊崎。いきなりですまないんだが、この音がどこから発信されたのか調べてくれないか」

「ふつ、任しとき！30分あれば上等や！」

俺が渡した、USBメモリーを受け取った豊崎は、パソコンを立ち上げ、ヘッドホンをして渡された情報を調べ上げる。

USBの中に入っているのは、先ほど中山が送ってきた無線の中身が入っている。

「なあ。龍司、この音源はいつ聴いた？」

「11時50分ジャストだ」

「なるほどな……」

なにやらいろいろな情報を、パソコンに打ち込む。

「よし。。これでいけるはずやー！」

そう言った豊崎は、キーボードのエンターキーを、右手の人差し指でどどめを刺すように押し込む。

軽快なキーボードの音がしたかと思うと、パソコンが打ち込まれた情報から、該当するものを探し出す。

答えがでるまで10と掛からなかった。

該当一件

前之浜第三新港

「新港か！」

「よし、桔梗行くぞ！今度こそ捕まえてやるからな！」

俺と桔梗は、事件に終わりを告げるべく、科研を飛び出した。

〈完〉

stage 1 十撃目 『魔の午前11時50分』 (後書き)

さて、『魔の11時50分』どうだったでしょうか。

今回は、stage 1のラストなと思います。

文字数も増やして、良い話になるようがんばりますので応援よろしくお願いします!!

それでは、

Next time, let's meet.



stage 1 十一撃目 『大切な人』 (前書き)

stage 1のラストを飾るのは、帝都崩壊かもしくは、そのもくろみを龍司がぶち破るのか……。

急加速する緊迫のラストをお楽しみに!!

stage 1 十一撃目 『大切な人』

俺は、この能力をあまり好きじゃなかった。

幼かった時、俺はこの能力を感じてこう思った。

「かつこ悪い能力」

と、強い武器の威力が弱くなって、弱い武器の威力が強くなる。

この能力を恨んだことは多々とある。

今はそれほど気にしていないが、その時は、歯がゆくて仕方がなかった。

我慢できなくなった俺は、父さんにこの能力がどう役に立つのか聞くと父さんは、落ち着いた声で俺にこう答えてくれたんだ。

「龍司。限界破壊の能力は、お前が大切な人を守ることが出来る能力なんだ。誇りに思えよ」

この言葉は、今でも夢に見ることがあるくらい俺の中で生きている父さんの大切な言葉だ。

そんな父さんは、三カ月後に俺たち家族を残してこの世を去った。

母さんは、海外の紛争や飢餓で苦しんでいる国で現役で今も働いているし、姉さんも高2のころから

S A A Fで働いている。

父さんの残してくれた言葉を信じて、俺も中3の時、父さんの見てきた世界を知るために飛び込んで行った。

がむしゃらに今まで突っ走ってきたけど、未だに父さんの残してくれた言葉の意味は分かってない。

確かに、この能力のおかげで犯人を殺してしまうことはなかった。

だけど、これが父さんの言いたかったことなのだろうか？

すぐれた判断力、推理力、行動力そして人一倍の正義感。

父さんはいつでも慕われていて、俺は、そんな父さんを尊敬して生きてきた。

そんな父さんが言った言葉だからこそ、俺は今まで頑張ってきた、そしてこれからも頑張っていく。

・・・

「どうしたんだ？」

「んっ、どうしたって何が？」

隣の席に座っていた桔梗が俺の顔を覗き込んできたので、俺は回想の世界から現実世界に戻ってきた。

桔梗の鋭い刃のように研ぎ澄まされた青い瞳は心配そうに俺を見ている。

「ジツと外を見たまま、人形みたいに固まったままだったから」

桔梗が次の言葉を言う前に俺は、少し遠くを見るように答えた。

「大丈夫。少し昔を思い出していただけだ」

俺たちを乗せた車は、あと5分程で前之浜新港に到着するだろう。

新港で、何が待ち受けているかは分らない。もしくは、何も待ち受けていないかもしれない。

どちらにせよ、5分もすれば答えが出る。

俺は、エアガンとミネベアの位置をしっかりと確認し来たる戦いに万全で挑む。

この戦いで帝都市民全員の生死が係わっている。

必ず、この街を守ってみせる。

新港で1台の車が俺たちを待っていた。黒塗りのセダンは、景色の中で異色を放っていた。

俺は送迎してくれた捜査官をすぐに新港から帰るように告げると黒塗りのせだんに向かって歩き出す。

「よくここまで来れたな。」

だが、迎えが少くないか？」

中山は車から降りて、たった2人でこの場に乗り込んできた警察官を見て笑った。

「多すぎても堅苦しいだけだからな。そんな事より、アンタがこの帝都で何をするつもりなのか教えてもらおうか」

中山との距離は、10メートルとない。

一気に間合いを詰めれる距離ではあるが、俺は立ち止ってその場で中山と対峙する。

すぐ後ろには、桔梗がいつでも戦闘態勢に入れるように立っている。

「俺が何もしなかったらこの帝都が滅ぶ。だから俺がこの帝都を救う」

中山は、まるで独り言でも言っているようにそう答えた。

「おいおい。それはこっちのセリフだろ。アンタが何もしなかった帝都が滅ぶ？ふざけられても困る」

少々怪しい動きをしている中山。

もしかして、<sup>ドラック</sup>薬か？

あれは、幻聴やら幻覚やらの厄介な作用も出るからな。

それなら、中山は俺たちが悪者に見えているのか？

「龍司……」

「ああ、分ってる。これは、早めに片づけた方が良さそうだな」

俺は、1歩、2歩と右に歩く。

それに合わせて桔梗は左に向かって歩く。

薬でもやっているのなら、軽はずみで中山は、暴走するかもしれない。

戦う場所が港で助かった。

もしここが人気の多いところなら死人が出かねないからな。

そこところは助かった。

だが、俺たちが戦うにしては少し立地が悪い。

見ての通り港には、敵の弾を避けられるような障害物が近くにない。

少し奥の倉庫まで行けば障害物ばかりなのでそんなことを心配することは無いのだが。

じりじりと移動する俺たちを見て中山は意外と冷静だった。俺と桔梗が中山をはさんで一直線の位置にきた時、中山が行動を起こした。

目にも止まらない速度で2丁の拳銃を抜き去る。

銃弾は、俺を掠めるように抜けていく。

心の中でどつきながらも俺は、セダンの陰に隠れ、敵の格好の的になるのを避ける。

「まだまだ、反応が甘いぞ」

両手に持ったニューナンプをこちらに構えながら中山は不適に笑う。

「そうかよー！」

俺は、立ち上がって応戦する。

エアガンの三点バーストを撃ち込みつつ、今の状況を打開するべく頭をフル回転させる。

やはり、周りに障害物がないのは痛い。

前の戦い同様、戦況は良くない。

「前はまんまとやられたからな。今度はこっちの番だ」

桔梗は、ピンを抜いた煙玉を車体の下から向こう側に投げ込んだ。

軽快な音と共に白い煙があたりを包む。

「よし、今だ！」

俺の合図で、セダンの影から倉庫に向かってダッシュする。

距離にしておよそ50メートル。

最後はヘッドスライディングをするように物陰に飛び込む。

それ程、時間はギリギリだった。

物陰に飛び込んだ後俺は腕時計の時間を瞬時に確認する。

残り時間は、後10分を切ろうとしている。

「さて、どうやって戦う？」

「アイツに、一瞬でもいいから隙を作るしかないな」

荒ぶる呼吸を落ち着かせながら、俺は作戦を立てる。

ヤツがどれほど強くても、不意をつかれるようなことがあれば、必ずそのタイミングでは無防備になるはずだ。

なら、その瞬間をねらうしかない。

「桔梗、俺が囷になる」

「.....」

少し怪訝そうな顔をするが今は手段を選んではいられない状況なので桔梗は、小さく縦に顔を振った。

作戦は決まっている。上手くやってみせるぞ。



「頼んだぞ、ミネベア」

ホルスターから抜き去った。ミネベアを見つめて俺は願った。もう一度、桔梗とアイコンタクトをとった俺は、その場から移動する。

「そろそろ鬼ごっこは終わりにしないか？」

中山は、少々焦った口調で倉庫に向かって話しかける。

「そうだな。いつまでやっても終わらないからな」

俺は、中山から一番近い物陰（ドラム缶）の裏から中山に答える。

「なあ、そろそろ教えてくれよ。どうやって帝都が崩壊するんだ？」

出来るだけ中山の気が俺に向くのと、時間稼ぎをかねて俺はのんきに質問なんかを投げかけてみた。

「どうやってか……。それを知ってどうする柳刃龍司」

「決まってるだろ。それを止めるんだよ」

ちらちらと中山の位置を気にしながら装弾数を確認する。

「……無理だ。奴が動き出したら誰にも止められねえ。奴は破壊の限りを尽くすからな」

「へっ！えらい臆病だな。やってみないと分からないじゃないか」

向こうから聞こえてくる声には明らかに焦りが聞き取れる。

何に追いつめられてるのか知らないが、早めに片づけなくては。

俺は、マガジンをミネベアに押し入れると、セーフティーロックを解除した。

グリップをしっかりと握り、スライドカバーを引っ張る。

ガキンツという音を立て弾がセットされる。

大きく息をして、俺は思いっきり立ち上がった。

「中山！！」

ドラム缶越しから出てきた少年を発砲しようとした中山の腕が一瞬停止する。

それは、銀色のスライドカバーの漆黒色のミネベアを構えた彼の姿があまりにも龍司の父、柳刃龍一に似ていたからだった。

そんな一瞬の隙を桔梗は逃さなかった。

愛銃CZ75で中山の右手に握られているニューナンプを撃ち落と

す。

そのタイミングに合わせて俺は左手のニューナンプを撃ち落とす。いきなり銃を奪われた中山になすすべはなかった。

馬のりされるように龍司にマウントポジションをとられた後、目の前に漆黒のミネベアの銃口が中山に向けられていた。

「あきらめろ、中山。アンタの負けだ……」

「ふつ。やはり親父さん譲りの判断能力の良さだな」

「そりゃどうも」

中山をうつ伏すにさせると持っていた手錠を両手にかける。

「かける側からかけられる側になっちまったか……」

俺は、倉庫の物陰から出てくる桔梗を確認した後、俺は再び中山に質問する。

「でっ、帝都を破壊し尽くす物はどこに置いているんだ？」

時計のタイムリミットは、残り8分になろうとしている。

「ふつ。お前のすぐそばにあるさ……結局間に合わなかったか  
中山は、笑った。狂ったように龍司を笑い飛ばした。

「おい、いい加減にしろよ。あまりふざけると鉛玉喰わせるぞ」

「どつとでも言うといいさ。だが、事実は変わらない。」

中山がそういい終わると同時に、こちらに歩いてきていた桔梗がその場で膝を折り地面に倒れ込んだ。

「テ、テメエ！なにしゃがった！！」

「俺は何もしていない……」

「桔梗！大丈夫か！！」

中山を放っておいて桔梗の元に駆け寄ろうとした。

「龍司！き、来てはダメだ！」

桔梗の強烈な声に俺はその場に立ち止まった。

「ど、どつということだ？」

「……ヴァルキリー計画」

一人つぶやく中山を恨めしそつに桔梗は睨みつける。

「くつ、ヴァルキリー計画……そうか、思い出した。私の能力は戦乙女ワルキューレなのか」

内なる何かを必死に押さえながら桔梗が呟く。

「龍司……できるだけ逃げてくれ、もうすぐ私にも抑えつから

れなくなる」

俺は戸惑った。今日の前で何が起ころうとしているのかも分からず仲間をおいて逃げるなんて理解できなかった。

「いいから早く!!」

叫びにも似た声その声に押される形で俺は中山を連れ、倉庫の中に向かって走った。

一体何が起こってるんだ!!

倉庫のカギを閉め、小さな窓からそつと外を覗く。

倉庫の外で何かと戦う桔梗。しかし、それは長く続かなかった。

やがて立ち上がった桔梗の瞳には、以前のような生氣は宿っていなかった。

澄んでいたはずの瞳が、今は深海のように濁っている。

「き、桔梗?」

「ついに目覚めてしまったか」

「中山、戦乙女ってなんなんだ!？」

「彼女の能力は、人間が人工的に与えた能力。戦場でいかに強い兵士を作るかで行き詰まった奴らは、能力者に目を付けた。その産物

「がああ、戦乙女だ」

「つまり、作られたってことか？」

「ああ、奴らは動くものすべてを破壊し尽くす狂戦士。もう帝都の未来はない……奴を殺さない限りな」

「殺すだって……」

「俺に、仲間を殺せだ」と。

しかし、もし彼女が街中に向かったら無差別に屍の山を作ることになるだろう。

「何とかならねえのか!？」

「そつだ!呼びかけたら目を覚ますかもしれない」

「止めておけ!それは、ただ死ぬだけだ。ヤツは6年ぶりの封印から解放されたんだ!桔梗の人格は介入することすらできない状況になっっている」

「な、なんだと……」

俺に追い打ちをかけるようにいやな知らせを告げる無線が入る

『龍司、たった今U18から桔梗ちゃんの射殺命令がでたわ!一休がなにが起こっているの!!』

その質問はむしろ俺がしたいくらいだ!

クソ!!警察官は使い捨てか!

「U18まで動き出したか・・・流石、仕事が早いな。柳刃龍司、お前に教えてやるう。このシナリオがどうして生まれたのか」

父さんが亡くなった事件に起こった真実。

（6年前）

「中山・・・この事件どう動くと思う？」

柳刃龍一は、同僚の刑事中山大二郎にそんな質問を投げかけた。

「状況は良くないな。人質の体力、精神力を考えても長引かしたくない」

龍一は、パトカーに備え付けられている無線のスイッチを切る。

「U18部隊もいるからな。今日こそはあの娘こに会っておかないとな」

「あの娘？」

「中山、ヴァルキリー計画って知ってるか？」

緊迫した銀行をパトカーから、見つめながら、龍一は静かにつぶやく。

「あの強化兵士を作り出すっていうオカルト話か？」

「ああ、俺も初めは噂だと思っていた。だがな、ヴァルキリー計画は実在していたんだ。そして俺は、ヤツらの尻尾をもうすぐで掴めそうな所まで来ている」

「ホントか!？」

「俺の能力『精神操作』でヴァルキリー計画を一時的に停止させることはできる。だがこの計画は、きっと俺の息子と娘を巻き込んでしまつかもしれない・・・んっ、ちょっとタバコ吸ってくるわ」  
そう言っつて龍一は車外に出て行った。

龍一は、昔から友人にウソをつくのが下手だったからすぐに分かった。

その時、車の前を通ったのが桜咲桔梗だった。  
龍一が出て行っつて10分程たったときだった。

銀行内から一発の銃声が高々に響き渡った。

俺は、顔色を変えて銀行に突入したさ、だがそのときには龍一は虫の息でもう死に間際だった。

「ハハハ、しくっちまった」

「いいから喋るな!」



「後少しだったんだがな、だが、彼女の能力を封印することができた。タイムリミットは6年後の7月29日1時50分……だ」  
やつはそう言い残して死んだんだ。

「6年間いろいろな方向に手を尽くしたさ。それでも、救う方法は見つからなかった。タイムアップだ。単騎特効型戦闘兵器を誰も止めることは出来ない」

「戦闘兵器だと……」

この時、俺は一つの作戦を思いついた。

U18部隊やら警視庁がこの港に集まるのにさほど時間はかからなかった。

辺り一帯に響く、サイレンの音。

拡張器から聞こえる現場も分かってないような上司の退却命令。

俺は、ミネベアを抜き去ると倉庫の入り口に歩いていく。

「どつするつもりだ？」

「やれることをするだけさ」

入り口のカギを開けてそつと外をのぞく。

こちらに拳銃を向けて立っている桔梗の姿が見える。

「さて、やるか！」

ミネベアのセーフティロックをはずして、牽制のため威嚇発砲をする。

桔梗の1メートル横に銃弾が着弾しているのに、桔梗は冷静にそれを見つめたのち、こちらに向かって歩いてきた。

俺は、少し威力を落として桔梗の体をねらう。

しかし、俺のミネベアから撃ち出された銃弾は、桔梗のCZから撃ち出された銃弾に相殺されるように撃ち落とされる。

マジか……銃弾の軌道まで見えてんのか。

その後、終わりの見えない攻防が10分に渡ってくり広げれど。しかし、徐々に俺が押され始めている。

「そろそろあきらめたらどうだ。お前が出て行ったところで一瞬で撃ち殺されるだけだぞ」

奥で座り込んでいる中山が笑う。

「そうかもな」

素早く次のマガジンに入れ替えて発砲する。俺がいくら撃ち込んで

も、銃弾を全て撃ち落とされる。

それだけでなく、頬を肩を横腹を銃弾が掠めていくので、俺の体や服は、掠めた弾丸で切れたり、裂けていく。

だが、逃げ出そうなんて思わない。

自分の組み立てた論理を信じ、桔梗と真っ正面から向き合う。俺は、腰に装備していた最後のマガジンをミネベアに込める。

「お前の向かう先には絶望と言う名の闇を待っていないぞ。なぜ、それに逆らおうとする」

ミネベアを構えながら息を整える。

「アンタが、絶望を受け入れるのなら、俺はその闇の中から一点の突破口だけを探し出す！」

CZの弾丸がすぐそばの鉄骨に着弾して火花が飛び散る。

「最期まで諦めはしないさ」

先ほどから、桔梗の発砲音とリロードのタイミングを聞いていた俺は、倉庫の外に飛び出して障害物のない空間に己の体を押し出していく。

桔梗の今のマガジンの残りの弾は5発。

俺の残りの弾は4発だ。

俺は、走り出したのと同時に2発、桔梗に向かって発砲する。

2発に対して桔梗は3発で対処してくる。

たった1発の銃弾2発で弾を撃ち落としもう1発で俺をねらってくる。

そのまま、左足で地面を思いつき蹴飛ばして右側に回避することにより3発目の銃弾を交わす。

桔梗も俺も残りの弾は2発。

2人の距離はおよそ5メートル。

俺はこの距離で残りの2発を撃ち込む。

俺の予想道理、桔梗は2発の銃弾に対して発砲する。

しかし、撃ち込んだ弾の数はたったの1発。

弾丸は、絶妙な角度で俺の1発目の弾にぶつかり、そして跳ね返る。

まるで吸い込まれるように、二発目の銃弾にぶつかってその軌道をそらせる。

明らかな誤算だった。

俺と桔梗の距離は三メートルもない超近距離だった。

そんな距離で、CZ75が火を噴いた。

銃弾は、なすすすべもない俺の体をいとも簡単に貫き、血の尾を引く。

彼女の深く濁った瞳には鮮血を飛び散らす龍司しか映ってない。

周りで待機していた捜査官たちは息をのんだ。

撃たれてもなお、少年はその歩みを止めず、たった今、発砲してきた少女に向かって手を伸ばす。

真っ赤な液体が落ちて地面に、どす黒い赤い池を形成しても、少年は気にしない。

俺は、桔梗のうつろな瞳をしっかりと見つめてその体をこちらに引き寄せる。

「……兵器になんてさせない！」

拳銃の威力を弱めるように、桔梗に向かって能力を使用する。

彼女が史上最強の戦闘兵器なら、この能力が存分に働くはずだ。

俺は信じた。

昔、父さんが遺した大切な言葉を、俺はもう一度桔梗の瞳の中を見つめる。

彼女のうつろな瞳から、涙がこぼれ落ちてやがてその瞳に生気が徐々に宿っていく。

「……龍司」

弱々しくも、ハッキリと俺の名前を彼女が口にする。

「んっ、どうした?」

桔梗から、大粒の涙がいくつもの流れ落ちる。

「うっっ、スマナイ、スマナイ!」

桔梗は、泣きながら俺に謝る。

俺は、そっと桔梗の肩に手をおいてにっこりと微笑む。

「なに謝ってんだよ」

「だって!」

「だってもなにもねえ……」

続きの言葉を言いたかったが、口は動いてくれなかった。

ちよっと血出しすぎたみたいだな。

倒れそうな俺を桔梗がしっかりと支えているのが微かに分かる。

救急車がこっちに向かって走ってくるのが見える。

俺の前に滑り込んできて、救急車の後ろに担架で載せられる。

痛みを遮断しているのか、痛みというかしびれのようなものが感じる。

俺の右側のイスに座っている桔梗と姉さん。

桔梗は俺の左手を救急車に入ってからずっと握ってくれているようだ。

だけど、その感覚もなんだか無くなってきた。

・・・なんか眠たくなった

「無理しすぎたかな、ちょっと寝てもいいか？」

この言葉を聞いて、桔梗の顔が強張る。

「寝ちゃダメだ！病院まで後ちょっとだから！！」

救急車は、サイレンを響かせて大通りを走り抜けている。

だんだんと周りの音、視界、感覚が鈍くなっていき、泥沼に沈んでいくような眠気が襲ってくる。

桔梗は、力の抜けていく龍司の左手を握りながら龍司の顔を覗き込む。

「なあ、龍司。お礼を言わせてくれ……」

だが、彼女が深く深呼吸をした時だった。

龍司の左手が桔梗の手から滑り落ちる。

重力に逆らうことができなくなった左手は担架からだらんと垂れ下がった。

「龍司……?」

しかし、名前を呼ばれた少年は答えない。

奈菜は、顔を伏せて苦い顔をする。

「そんな……ウソだ!!目を覚ましてくれ龍司!」



救急車の中に無情にも彼女の叫び声が響き渡った。

どこを見ても真っ白な世界が俺の辺りを包んでいた。

「死んだのか？」

「龍司か……久々だな」

不意に懐かしい声が俺の名を呼んだ。

「……父さん？」

「よっ」

父、柳刃龍一は、白い世界の先からぼんやりと現れた。

「しばらく見ない間にいい顔つきになったな」

「父さんも、元気そうで何よりだよ」

「ハッハッハッ！死んでるんだから病気になるかよ」

「……父さんが俺に言いたかったこと、やっと分かった気がする」

たよ  
」

久々の再会で気恥ずかしかったが、この言葉は伝えておきたかった。

「ふっ、いつちよ前になつたな」

「まあな」

「……行くんだろ？」

龍一は、ニカツと少年のような笑顔を俺に向ける。

「ああ、待たせてる人がいるからな」

後ろ手に手を振ると、俺は父さんに背を向けて歩き出した。

ぼやけた視界が、少しずつはつきりとしてきた。

静まりかえった部屋は、どうやら病院の一室なのだろう。

清潔感のあふれるベッドだけの部屋。

若草色のカーテンの隙間から、上半分が欠けてしまっている月がこちらを覗いている。

ふと、視線をベッドの横に向ける。

誰かがずっと俺の左手を握っていることに気づいたからだ。

ベッドに寄り添うようにスヤスヤと寝息をたてて寝てしまっている銀髪の少女。

しかし、寝ていても彼女は左手を離さない。

まるで、その人がどこかに行ってしまうないように。

俺は、ついつい微笑んだ。

「……ありがとな。お礼を言うのは俺の方だよ」

「エピソード」

「姉さん……」

神妙な顔をした少年は、部屋の片隅にたっている姉に話しかける。

「何？」

姉は、部屋の片隅で丸イスに座って雑誌を読んでいる。

「いつまでこの始末書と報告書を書きやあいいんだあああ！」

少年は、超絶なスピードで始末書を書きながら大激怒すると言っ離れ技を繰り出していた。

「龍司、興奮すると傷口が開くわよ」

姉、奈菜は雑誌読みながら素っ気なく答える。

ここは、病院の一室。

龍司の独断と専行でこの事件を解決させたため、ホントのことを知っているのは龍司だけだった。

「ああ、あまりにも無情だ……」

ため息をもらしながらも、書類を書いていく。

「なあ、桔梗はどうしてる？」

「……あの娘なら、捜査に戻っているわよ」

姉さんは少しだけこちらをみたかと思うと、すぐに雑誌の方に視線を戻した。

「そっか」

ペンを動かす右手を止め、若草色のカーテンを開く。

カーテンの向こう側には、吹き抜けるように気持ちのよい青空が広がっていた。

すっかり真夏のような強い日差しになった外では、セミたちがせわしなく鳴いている。

「おっ、もうこんな時間か」

壁に掛けられているアナログ時計は午後2時になろうとしている。

「あら、ホントね。そろそろ飛行機のフライト時間ね」

蒲原と紅葉は、西日本の広島に、火神は太平洋を隔てた向こう側の国アメリカ合衆国に向かうことになっている。

必ず、二つの場所で有力な情報を得られるはずだ。

本当なら俺が行きたいのだが、今は何より体を治すことが大切だ。

それに、彼ら彼女らに任せておいて不安はない。

うまく、やり遂げてくれると信じている。

そんな事を思っていた時、病院に入ってくる銀髪の少女が目に入った。

「守られる側から守る側にならないとな」

少年は、雲一つない真夏空に一人呟いた。

～END～

stage 1 十一撃目 『大切な人』 (後書き)

次回予告、stage 2!!

帝都崩壊と大切な仲間を守った龍司は負傷のため入院することになった、そんな中、蒲原と紅葉に新たな任務で西日本、広島県に行く。

広島で彼らを待っていたのは!?

次回もお楽しみに

## stage 2 一発目 「新たな旅立ち」 (前書き)

さて、いよいよ、stage 2の開幕です。

今回のメインキャラクターは、蒲原の紅葉です。

今回の説明は、BLACK CITYのstage 1にちよろつと出てきた『西日本』について説明します。

龍司たちが活動している帝都新京は東日本、旧東京にあります。

それでもって、彼らの世界では日本は東日本と西日本の二つに分裂してしまっただんです。

理由は、stage 2が進むにつれて解き明かしていくつもりなので、今はふーん分裂したんだ。程度に思っていてくれたらいいです。

さて、話がそれてしまいましたが西日本がどんな所かということ、簡単に言えば、能力者を取り入れない社会体制の国です。

なので、かなり能力者は珍しい存在です。

おかげさまで、能力者だとバレてしまうと東日本に強制送還、悪ければ監獄行きですね。

西日本の首都は北九州にあり、結構な大都市になっています。

そんな西日本が、今回の舞台の中心になっています。

コレからも、BLACK CITYをよろしく願います。



## Stage 2 一発目 「新たな旅立ち」

「うはー、暑いなあ」

蒲原は、ユラユラと揺らめく国道の陽炎を恨めしそうに見ながらそ  
う呟いた。

「もう、だらしなすぎるわよ」

「そうは言ってもな。まさか、西日本まで来ることになるとは思っ  
てもいなかったぜ」

「全く、コツチじゃ能力者は、肩身が狭いわね」

紅葉は、赤いケータイをスカートのポケットから取り出すとメール  
を打つ。

「さて、先ずは何をするか、だな」

「そうね、課長が手配してくれてるホテルまで後少しだし」

「それにしても、龍司があそこまで必死になってるモノだ。俺たち  
も気を抜かないようにしないとな」

「まあ、真っ先にやられるのは蒲原でしょうね。なんたって、緩い  
から」

「やれやれ、といった感じに紅葉は言ってみせる。」

「そうだな、俺ほ……ってそんなに簡単に死ねるか！」

「うんうん。蒲原のツツコミも相変わらずだし、大丈夫ね」

「はあ、紅葉にはついて行けねえ」

がつくりと肩を落としている蒲原を気にせず紅葉は、先々と歩いていく。

だが、気が抜けないのは事実だ。

なんたつて、龍司がけがで動けねえんだからな。

特に、西日本は能力者の体制が少ないから、色々狙われるかもしれない。

紅葉だけは、守らないとな。

そんなことを蒲原がマジメに考えているとはこの時の紅葉は、知らなかった。

「さて、宿は取ったし。先ずは何をする？」

「そうねえ。龍司に頼まれているのは、この建物に何か隠されているはずだつて」

そう言つて、紅葉はカバンから一枚の写真を取り出す。

「うわっ。廃屋かよ……おいおい、俺たちは肝試しにでも行くのか？」

差し出された写真に写っているのは、荒れ放題のビルの写真だった。

見た感じでは、ホテル跡と言ったところか？

「まあね。でも、百歩譲って肝試しはかまわないわ。問題なのは、この建物がどこにあるかがわからないのよ！」

「いや、紅葉。女の子らしく肝試しぐらい恐がれよ……」

どんだけ、女子離れしていくつもりだよ。

俺の立場が全くないじゃねえか。

「へえ。何で蒲原が私に女の子らしくないといけないっていう事を決める権利があるのかなあ？」

今にも、襲いかかってきそうなライオンの目つきで紅葉が睨んでくる。

「えっと、権利というか、男の求める義務か……な？」

「ふふっ！ 蒲原、なかなか反抗してくるわね。もしかして反抗期？」

部屋を二等分に区切っているカーテンのおかげで紅葉の姿は見えない

いが、明らかに笑っている。

不気味に笑う紅葉は、ある意味最凶だ。

「あれどうしたの？ 何か言ったら？ 蒲原くん」

俺は、そーっとドアに手をかけて部屋を出ようとする。

タンっ！！

俺の開けようとした木製のドアに、ギラギラと輝いたサバイバルナイフがグツサリと突き刺さっている。

カーテンの向こうから、やけに機嫌の良さそうな声が聞こえてきた。

「蒲原くん。どこ行くの？ 私の能力わ忘れてもらっちゃ困るなあ」

ですよね。

直視の能力があれば、俺が丸見え……んっ？

「よく考えたら、逆セクハラだろ！！」

俺の口は、少々おしゃべりしすぎるのがどつやら弱点みたいだ。

「問答……無用！！」

瞬時にカーテンの向こうから現れた悪魔（紅葉）の反応に、俺はコンマ0.1秒遅れてしまった。

しまった！

そう思うより先に、紅葉の鋭いアッパーパンチが炸裂する。

空中で、弧を描きながら俺はベッドに着地。

「good night」

紅葉の声が薄れていく意識の中でこだまする。

たかが、コンマ0.1秒。されど、コンマ0.1秒か……。

俺の意識はここでとぎれた。

そのまま俺は就寝して、西日本入り初日を終えたのだった。

夜も更けた、丑三つ時。

ホテルのベランダから、俺は広島町の町を眺めていた。

俺達が西日本に来た理由は、龍司に頼まれた建物の調査をするためにやってきたのだ。

だが、建物の中なにかがあるのかさえ分からない。

いろいろ場数を踏んできた俺だが、今回は少々マズいのは無いのかとさえ思ってしまう。

それでもって、武装解除までしている俺たちは、格好的でしかない。

龍司がなにを考えて俺たちをここに行くように言ったのかは未だに

意味が分かっていない。

「はあ、大変なことになっちまったな……」

溜め息と疲労感が同時に押し寄せてくる体に嫌気がさしながらも、俺はずっとダイヤモンドのように光る街の明かりを眺めていた。

「こんなところで何してるの？」

ポーツとしていた俺の横に、いつの間にか紅葉の姿があった。紅葉も俺と同じように、街明かりを静かな眺めていた。

「あのさ、私には龍司が何を考えてるのか分からない。でも、龍司の考えてることは信用して大丈夫だと思う」

「ああ、アイツは何でも一人で解決しようとするからな。今回は、俺たちの出番さ」

少々不安が募るが、何とかしてみせるさ。

俺たちは、夜の景色を見てそう強く決意した。

Stage 2 第一話 完

Stage 2 二発目 「情報」(前書き)

さて、今回は『火神君』について説明したいと思います

火神祐一捜査官。

SAAFの敏腕情報屋です。

常に新たなことや、噂、情報を探しています。

そんな彼は、龍司の信頼する警察官の一人で。

拳銃などの物理的攻撃ではなく、心理戦などの間接的な攻撃で犯人を罠にかけていきます。

ある意味、恐ろしい警察官ですよね(笑)

それでは、本編へどうぞ！

Stage 2 二発目 「情報」

「暑い。暑すぎるぞ」

蒲原と紅葉は広島町の町を歩いていた。

「それにしても、武装解除されたからには現地調達しかないわよね」

「そうだな。でも、西日本に武器商人なんていないぜ」

「そうねえ……。そうだ、火神君なら何か知ってるかも」

紅葉はそう言うと、スカートのポケットから赤色のケータイ取り出した。

「はあ、困ったときはいつも火神頼りだよな」

ボソツと言ったつもりだった言葉に反応した紅葉がサバイバルナイフを抜きさり、蒲原の喉元に突きつける。

デジャヴだ!!

「神原君。何か言った？」

「い、いえ何も」

「うん、うん。私は素直な子は好きよ」

紅葉、頼むからサバイバルナイフをしまってください。



何か俺が恐喝されている男子高校生にしか見えないから。早くそいつをしまおうよ。

「さて。電話、電話」

電話をかけて、三回目のコールで火神がでた。

「あつ火神君？ ちょっと聞きたいことがあるんだけど」

会話を始めた紅葉。ひとまず俺の命はつなぎとめられたな。

「えっ！？ 今ニューヨークにいるの！？」

何だって！！

ニューヨークだと！

ちくしょう！ っらやましすぎるだろ火神。

ぜってえ、金髪の美女とか金髪の美女とか金髪の……ハッ！

俺英語喋れねえ！！

そこか！ そこのか！？

クソー！！

こうなるんだつたら駅前留学しとくんだった！！

あるいは、龍司に教わるとか。

あいつ頭いいからな。

なんだか変に興奮している蒲原を横目に見た紅葉はさらに会話を進める。

「ところで、呉の町の中で武器商人と超能力者の根城は知らない？」

『うん。一応心当たりはありますが、正直言ってお勧めしたくないですね。武器商人の位置は後で添付ファイルをお送りします』

「ありがと。超能力差者のほうは？」

『西日本の超能力者の根城は知っていますが、非常に危険です』

「私たちは、何時も危険と隣り合わせよ。火神君。教えてくれない？」

『……分かりました。無理はしないでくださいね。能力者の根城は、町外れの地下に存在します』

「私のモットーは慎重な判断と大胆な行動。無理はしないわ」

『そうですか。こちら色々立って込んでるので、夜に電話していただけたら幸いです。では！』

火神は、そういうと電話を切った。

「なるほど、地下か……。何か匂うわね。って、いつまで落ち込ん

でいるのよ」

片隅で小さくなっている蒲原を見て、紅葉は苦笑した。

「しかたねえ……。でっ、これからどうするんだ？」

「そうね。武器を調達して、能力者の根城に挨拶ってどこかしら？」

「能力者の根城？ 何でそんなところに」

「何でって、カンよ。カン」

なんだか猛烈にため息を突きたくなったぞ。オマエのカンはいちいち怖すぎるんだよ。

特にトラブルに関してな。

「まずは、銃がないと困るでしょ。さっ、いくわよ！」

逆らったら、白銀のナイフが襲ってくるので、素直に俺はついていく。

一体これからどうなっちまうんだ？

「龍司。あまり無理をしないほうがいいぞ」

ベッドに座って捜査資料を読んでいる龍司を心配そうに桔梗が見つ

める。

「大丈夫だ。今出来ることは今やっておかないと気が済まないんだ」

「そうか……」

「なあ、桔梗。black cityって知ってるか？」

「black city？ 知らないな。それはなんなんだ？」

「black city。それは法の抜け穴から出た凶悪犯罪者を捕まえ、一生その街の中で強制労働させるという裏の街だ」

そう、どつやっでもあそこにたどり着かないといけないんだ。

## stage 2 三発目 「武器商人」(前書き)

お待たせいたしました。black city stage 2の第三話です。

今回説明するのは、『ベレッタM92F』です。

様々なドラマや漫画やアニメなどで登場する拳銃ですね。

ハンドガンの中でも最もオーソドックスな拳銃とっていいでしょう。

M92シリーズの中で今回登場するのはベレッタM92SB-F。

総弾数15発で9ミリパラベラム弾を使用をしています。

トリガーガード前方に指掛けを追加し、マガジン底も分厚くなっています。

そんなM92シリーズの愛称はM9です。

さて、前書きはこのぐらいにして、本編へどうぞー！

Stage 2 三発目 「武器商人」

火神の情報を得た蒲原と紅葉はとある廃ビルの前に来ていた。

「まずはここで武器調達か？」

「そうね。チンピラどもの根城としても有名だけど武器商人もいるらしいのよ」

「武器商人ね……。しかし、何で俺たちは包囲されなきゃならないんだ？」

俺と紅葉をぐるっと囲むように14、5人の男たちがいた。

みな、高校生ぐらいから大学生ぐらい。

「若い奴らがこんなところに溜まってたらだめだろ」

「ああっ！ おめーみたいなボケやろうはカンケーねえんだよ！！」

なるほど、俺はボケやろうか……。

ほう、なかなか楽しいこといつてくれるじゃねえか！

「ねえねえ。そのねえちゃんよ。そんなボケとしないで俺たちと楽しいことしない？」

下心丸見えの笑みを浮かべて近寄ってくる男たち。

その距離は、およそ2メートル弱。

「悪いわね。私はアンタたちみたいなのを相手してるほど暇じゃないのよ」

吐き捨てるようなセリフにかつとなった男が紅葉につかみかかった。

ああ、ありゃバカだな。

素人のつつこみ方だ。

ああなると、紅葉の得意な合気道のいい練習台にしかない。

つかみかかってきた右腕を逆手紅葉は自分の姿勢を少しずらす。

合気道はそれほど力がいらなくても大の男をひれ伏させるほどの護身術だ。

的を失った男は為すすべもなく地面にたたき落とされる。

「無理なことをしないほうがいいわよ。今日は虫の居所が悪いから、骨の一本、二本ぐらい折っちゃうかも」

こ、こえええええ!!!

マジ怖いすつよ。紅葉さん!

「よそ見してんじゃねえぞ!」

チャンスをねらった男のパンチはいとも簡単に蒲原に止められる。

「なあ。本気でやってるのか？」

ニヤリと微笑む少年に恐ろしさを感じた男はとっさに拳を引こうとする。

が……。拳が全く動かない。

少年に捕まれている拳は、固定されているかのようにビクともしない。

「おいおい。焦るなよ」

蒲原は思いつきり腕を引き寄せる。

引っ張られてよろめいた男の首めがけて手刀を振り落とす。

「ぐはっ!」

そのまま気絶した男は、地面に伸びてしまう。

「さて、次はどいつが相手してくれるんだ？」

涼しい顔をして手をはたいている少年を見てほかの男たちは一目散に散っていった。

「はあ。もうちょっと粘れよ」



カチンときていた紅葉はため息をもらしている蒲原の背中に思いつき蹴った。

「ぐはっ！！　　いってええな！紅葉お前の蹴りはしゃれになんねえから！」

「ウルサイ！　……全然女の子らしく扱ってくれないバカの方よ  
ブイツとそっぽを向いた紅葉をみて蒲原は再びため息をついた。

「ハア。急に怒りやがって……。どうしたんだ？」

首を傾げた後、ゆっくりと紅葉の後に付いていく。

しかし、このビルはかなり古いな。

結構前から廃ビルになったのだろう。

ビルの中はガランとしていてものがない部屋が多い。

「こんな所に武器商人なんているのか？」

「火神の情報だから確かでしょ。おそらく、最上階にいるはずだわ」  
狭い非常を上ること五分。やっと俺たちは最上階にたどり着いた。

「おっ。あの爺ちゃんが武器商人みたいだな」

最上階の一番奥の部屋に座っている白髭の老人が顔を上げた。

「おや、どちら様かね？」

「ちよつと、武器と銃弾を撃つてくれるかしら？」

「ほつほつほつ。若いもんが武器に頼るのか？止めておけおまえたちには無理だ」

「爺ちゃん。下のチンピラどもと同じにしないでくれ」

「どうしてもいうなら、あのマトを撃つて見せたら武器をやるっ」

白髭の老人は部屋の片隅を指さした。

そこには、一枚の壁の後ろに隠れるようにマトがあった。

弾道線に全く入らないマトを撃てかよ。

ありや素人どころか普通に無理な話だろ。

蒲原はそう言いながらも老人から白銀のベレッタM92Fを受け取った。

『ここから撃て』とかかれた線の上に立つと壁に隠れたマトは全く見えない。

線から壁までの距離は約4メートル。

壁の後方3メートルの位置にマトがある。

銃を構えて引き金に手をかける。

「少年よ。どこをねらってるんだね？」

蒲原の構えているベレッタの銃口は壁には向いておらず少し右にずれている。

「どこって、ちゃんとマトを狙ってるぜ。そうそう、ここに立ってればなにしてもいいんだよな」

蒲原おもむろにポケットから百円玉を取り出した。

そして、コイントスのように前の百円玉をとばす。

きれいな弧を描いた百円玉は神原から2メートルほど離れた空中で停止した。

「な、なに!？」

百円玉は。まるで空中に貼り付けられているかのように停止している。

ニヤツと笑み浮かべた蒲原は引き金を引いた。

激しい発砲音とマズルフラッシュの後。

飛び出した銃弾は百円玉に命中して火花を散らしながらその向きを三十度ほど左に曲げた。

その直後だった老人の目の前で壁の後ろにあったマットが倒れた。

数秒して、いきなり時間が動き出したかのように百円玉は落下していった。

「ウーン、中心から右に5ミリずれたわね」

「マジか。最近使ってなかったからな」

老人は心底驚いた。

蒲原の放った弾が百円玉に当たり、壁を迂回するようにマットの中心をぶち抜いたからだ。

さらに驚いたのはあの少女。

自らも壁のおかげでマットが見えていないはずなのに正確な着弾位置を把握していた。

「おぬしら、まさか能力者か！」

「そうね。私は直視の能力者。壁程度ならはつきりと向こう側が見えるわ」

「俺は。絶対停止の能力者。俺が直後まで持っていたものなら物体を停止させてしまう能力。しかも、時間軸的に物体が停止している

から、その物体が停止している間は傷一つつかないってわけだ」

「ふっ、完敗じゃ。お主たち東の警察官じゃな」

「へえ。今のでそこまで見抜くとは」

「昔、ワシの元にもきたんじゃよ。お主たちみたいな警察官がな」

「なるほどね。それで武器を売ってくれるかしら？」

「かまわんよ。好きな銃を取って行きなさい。お代はいらん」

老人はそう言うとき大きな箱を開けた。

「これにするわ」

紅葉が取り出したのは漆黒のUZIEウージー二丁。

それは、イスラエルのITM社が生んだ傑作サブマシンガン。

一秒間に十発もの鉛玉を吐き出す銃でその装弾数は32発。

何となくだが、紅葉にはお似合いな気がした。

「いい目をしとるの。そのUZIEにはちと改造が施されていてな。このレバーを下までおろすと」

老人は、明らかに後付けされたレバーを下ろし的に向かって発砲する。

パンツ！

一発の弾丸が飛び出し、マトを破壊する。

「こつこついう風に、単発射撃もできる。しかも、大量生産の中で一万分の一の超高性能サブマシンガンじゃ。単発射撃でも、かなりの命中率を出すぞ」

「へえ。気に入ったわ。弾もくれる？」

「かまわんよ。少年。君はなににするかね？」

老人にそう言われて箱の中をのぞき込む。

好きな拳銃か……。

「おつ。SOCOMソーコムがあるじゃねえか」

俺は、箱の中に収められていたSOCOMを取り出した。

H&amp;Kが作った大型自動拳銃。まったくの改造なしでサイレンサー、赤外線レーザーを取り付けることの出来る高性能拳銃だ。

「へえ。なかなか良さそうだな」

グリップを握った感じも手になじんで非常に扱いやすい。

「これをもたらえるか？後、弾も」

「ハイよ」

老人から弾と拳銃をもらった俺たちは各々のホルスターに拳銃をしまつ。

紅葉は、UZIEを背中にしまつような形のホルスター。

俺のSOCOMは普通のハンドガンに比べて二まわりほど大きい。

重さもマガジン込みで1.5キロもする。

ハンドキャノンと称されるデザートイーグル並みに重たい。上着の下、ちょうど脇のあたりに吊すようなホルスターを使用することにした。

「しかし重いな」

ホルスターには、SOCOMとサイレンサー、レーザーサイトもしまえるようになっていたためかなりの重量だ。

紅葉のUZIE二丁も結構重たいだろうけどな。

しかし、スカートの中にマガジンをしまつのはどうにかしてもらえないだろうか……。

何というか、たまに見えちまう。

「蒲原？」

「は、はい！」

いきなり名前を呼ばれたので、俺はどきまぎしてしまった。

「?? まあ、いいわ。そろそろホテルに帰るわよ」

「お、おう……」

俺は上着のズレを直すと武器商人の部屋を後にした。

「さあ、そろそろ本命に乗り込まないといけないわね」

「ああ、そうだな」

西の空に浮かんでいる紅の太陽が二人の長い陰を刻んでいた。



## Stage 2 四発目「不透明な予算」(前書き)

さて、今回の言葉は『イージス艦』です！

なんだか、いきなり話テカ！なんて思ったかもしれませんがまあ聞いてあげて下さい。

イージス艦とは、イージスシステムを搭載した艦艇の総称。通常、高度なシステム艦として構築されています。

イージスシステムとはなに？と思う人も多いと思います。(実は作者すら調べるまでは知らなかった。)

イージスシステムとは、イージスシステムは、レーダー、情報処理システム、ミサイル・によって構成されています。

その中でもレーダーはイージスシステムの中核であり、最大探知距離450キロ以上、最大探知目標は200以上であると言われています。

つまり、最新鋭のレーダーで身を固め高性能なミサイルを装備した水上の要塞です。

ちなみに、日本の自衛隊はイージス艦を日本では 4隻存在し、日本のイージス艦はそれぞれ

「こんごう」

「きりしま」

「みょうじょう」

「ちょうかい」

という名前が付けられています。

1隻あたりの建造価格は約1400億円らしいです。

さて、話が長くなってしまいましたね……。

それでは、本編どうぞ！

Stage 2 四発目「不透明な予算」

ホテルの窓から眺める広島景色は今日も美しい。

ネオンの光や、人々の生きている灯火で明るいついは幻想的だ。

「こんな街に悪が潜んでいるようには見えないよな」

蒲原は、飲んでいた缶コーヒーを机におくとソファにどっしりと腰掛けた。

「そんなものよ。コインに裏と表があるように、何事にも裏の一面があるものよ」

UZIIの整備をしていた紅葉はふと手を止めて蒲原を見た。

「理想を語りたかっただけさ」

「理想か……。そういうの、嫌いじゃないわよ」

マガジンをセットした紅葉は、ベッドの近くにUZIIを置き、ニッコリと微笑んだ。

いい笑顔するようになったな。

初めてあったときは、こんな笑顔は出来なかった。

急に気恥ずかしくなった俺は、缶コーヒーを再び手に取り一気に飲み干した。

さめて生ぬるくなってしまったコーヒーの味はイマイチだった……。

翌朝、俺たちは朝早くから広島町の町に繰り出していた。

「警察官が結構うるちよろしてるな……」

「そうね。今日は取締強化日なのかしらね」

「どうだろうな。もしかしたら、能力者狩りだったりしてな」

穏やかな顔でのんびりと言っている蒲原だったが、内心はいやな予感が張りつめていた。

「まっ、私達には関係ないわ」

「だな……」

そんな話をしながら、西の警察官の間をすり抜けていく。

どうやら、相手は自分たちのことには気づいてないようだ。

17とはいえ、端から見れば子どもだ。気にもとめてないのだろう。

『そのおかげで、コッチに乗り込めたんだけどな』

蒲原は心の中でそう吐き捨てると、裏路地へ二人は入っていった。

「えっと、道はコッチであってるの？」

「ああ、火神の情報が確かならこの道であってるはずだ……」

二人が歩いているのは、怪しい風俗店などが立ち並ぶ裏の繁華街だった。

「もし、ワザとだったら蜂の巣にするわよ」

「ワザとじゃあねえって！」

と言っか、リアルすぎてこえ。

なにせ、UZIが2丁だからな。

秒間十発もの鉛玉が襲ってくるのだぞ。

1丁につき銃弾は32発、2丁になれば64発。

文字通り蜂の巣だ。

しかし火神のやろっ。

絶対知っててこの道を教えやがったな。

おかげで、後ろがおっかねえぞ！

ビクビクしながら進む蒲原の後ろを歩く紅葉は意外にも怒っていなかった。

『まったく、下心丸出しなんだから。でも、私を女の子として見てくれて……。ナイナイ！ 蒲原に限ってそれはない！！』

ブンブンと顔を横に振って自らの考えを否定する。

自分はいったいなにを考えているのだろうとバカバカしくなった紅葉は、周りの怪しい店を横目に見ていく。

怪しいのは、ただの繁華街に見えないというところだ。

何か、もっと裏の何かがあるような……。

そんなことを思いつつ、一行は繁華街を歩いていった。

その頃、帝都新京では新しい出来事が起きていた。

「いつからお前がここにきてるんだ」

眉を少し震わせながら、低い声で龍司は言った。

病室のベッドの脇には、桔梗でもなく姉の奈菜でもない人影があった。

「なに言ってるのよ〜！ 龍が怪我したからここにきてあげたのに、

冷たいなあ〜」

アーモンドのようなアイスブルーの瞳、特徴のある青髪を後ろでくくってポニーテールにしている少女は、甘ったるい声でそう言った。ポニーテールと表現するよりかは、髪の色的に噴水である。

「俺は別に来てくれとは頼んでなかったんだがな……」

ため息をつく龍司を無視して、らんらんと輝くアイスブルーの瞳の少女話を続けた。

「まあまあ。そう言わないでよ〜幼なじみじゃん　それにとっておきの情報掴んだよねえ〜」

「やたら、語尾を伸ばすという特徴的な話し方をする少女の名前は東しの雲文芳のめふみか。」

大宮寺先輩と同じ特集保安課に勤めている俺の幼なじみだ。

だが、なぜ今更になって……。

「で。とっておきの情報って何だ？」

「フッフッフ〜。聞いて驚け！　この前とあるサイトの和英辞典で寝耳に水って調べたら〜」

「調べたら？」

「nemimiwaterネミミウォーターって変換されたんだよ〜！」

「……。おまえに聞いた俺がバカだった」

「つて！ 冗談だよ！ 実はさ、日本が分裂する一年前までの防衛省の話なんだけど、30年間、決算額から毎年怪しいお金が流れてたのを発見したんだ」

「ホントか！」

正直、驚いた。

防衛省が一枚絡んでくるとなったら、話がでかいな。

「うん、その総額が約3000億円。」

「3000億！」

「声が大きいよ」

「わ、悪い。」

おいおい、3000億って言ったら自衛隊所有のイージス艦を2つ造ってもお釣りが帰ってくるぞ。

一体、それほど強大なお金がどこに消えたっていうんだよ……。

いくら、六年ほど前とはいえ単純計算でも毎年100億円だぞ。

「まっ、龍なら話しておこうかなあって思ってたね」

文芳は、ニコニコしながら近くに置いてあった饅頭を口にした。



あっ！

それ、ねえさんが持ってきた差し入れの饅頭だぞ。

なかなか手に入らない、高級品なのに！

ふつうに食べやがって……。

「さて、龍も結構元気そうだし、私は仕事に戻ろっかなあ〜」

「勤務中だったのかよー！」

クルリと方向転換した文芳は、部屋から出ていこうとして立ち止まった。

「あっそうそう。最近、あの離れ島基地も怪しいよ〜。それじゃ！」

言うだけ言って、文芳は部屋を去っていった。

騒がしい奴だったな。

しかし、なんだか話が大きくなりそうだな。

一抹の不安を感じながら、窓から見える青空に目をやった。

みんな、頼んだぞ……。

〜続く〜

闇夜が広島町の町を支配する頃、二人の男女が繁華街から少し離れた裏路地を歩いていた。

息を殺して足音もたてず、目的に迫る。

そんな二人がいるとも知らず、ビール腹の中年男性がずんずんと裏路地を進んでいく。

蒲原は無言で向かい側にいる紅葉と手信号を使って合図をおくる。

電柱の陰に潜んでいた紅葉は小さくコクリと頷くと、暗闇の中に消えていった。

火神から得ていた地下街の情報。その組織のボスなら、写真の廃墟がどこだか知っているかもしれないしこれから西日本で行動がしやすくなるはずだ。

そう踏んだ俺たちは、組織の一員を突き止めた。

そしてそいつを今からそいつに挨拶をしに行く予定だ。

さて、そろそろおっぱじめるか……。

緊張を隠せない顔を押し隠すかのように内ポケットから拳銃を取り出す。

鈍く光るSOCOMには、サイレンサーが取り付けられている。

まっ、暗殺御用達ぐらゐの消音効果があるからな。

そんなことをするつもりは、はじめからないがあくまでも自衛と脅しにか使えんだろつ。

そう、心の中で思いながら男のとの間を少しずつ詰めていく。

後、三メートル。

依然として男は気づかない。

よし。

確信を得られた俺は、素早く右手で合図すると、ほんの一瞬のうちに男との間合いを一気に詰めた。

「動くな……」

ガチャリと音を立てて男の背中に銃を突きつける。

男が行動を起こす前に、上に潜んでいた紅葉が男前に飛び降り、そのまま二丁のUZI突きつける。

「ここら辺を仕切ってるボスに会いたいんだが、あんた知ってるだろ」

蒲原はニヤリと笑う。

「そうそう、早めに吐くのが得策よ。私って、以外と気が短いから」

そう言つて、紅葉はレバーを下までおろし単発モードに切り替える。

「なんやおまえら、ガキがこんなこととして許されると思つとんのか」  
銃を突きつけられているというのに、余裕の表情で落ち着いた口調で話す。

「ガキをなめてたらえらい目にみるのはお前たちだぜ」

こういいながらも蒲原は少し違和感を感じていた。

マズいな。

さっきから人の流れがおかしくなってる。

もしかしたら、仲間を呼びやがったのか？

だが幸いにもここは入り組んだ裏路地、地形を利用すれば逃げるのは余裕だ。

だが、ここで逃がしておくとは後々面倒だ。

チラッと紅葉に目をやると彼女も同じことを考えていたのだからこちらに目を向けた。

「悪いがこっちも素人ではないさかいな。囲ませてもらった」

男は不適な笑みを浮かべる。

チッ！

しくったか。

直ぐにも交戦体制に入ろうとした時だった。

「おやおや、月夜に作戦行動とは大胆不敵ね……」

やけに大きい満月をバックにその人物そう言った。

低い建物の上に立っていてしかも後ろに月があるのでシルエットしか見て取れない。

だが、風になびく長い髪、先ほどのやけに大人びた声、そしてシルエットからして恐らく二十代前半の女性だろう。

「ぼ、ボス!!」

男の顔には驚愕の色がありありと見て取れた。

まさか、奴がボスか！

俺は慌てて屋根の上に拳銃を向けた。

向けたはずだった……。

しかし、俺の銃口の先には大きな満月があるのみ。

「前っ!!」

紅葉の声で、頭より先に体が動く。右に倒れ込むようにして上半身を右にずらす。

さっきまで俺の体があった位置を鋭利なナイフが通過していく。

今のは危なかった。

下手したらあのナイフで一突きにされていただろう。

俺は、なにも考えずSOCOMの引き金を引く。

空気が抜けるバシュツという音とともに銃弾が飛び出る。

直線的に飛んでいく弾道。

しかし、鉛玉がとらえたのは敵ではなく無機質なコンクリートだった。

「なっ！」

確かに、俺がねらったのは相手の中心ではなく、右肩だった。

だが、相手はそれを軽々とかがみながら銃弾を避けやがった！

相手との合間は約四メートル弱。

マズい！

拳銃で対処できなくなる。

この距離では、拳銃での交戦は厳しい。

相手は気長に待つてはくれなかった、またもや一瞬にして間合いを詰めてくる。

相手の攻撃を交わすには時間が無さすぎた。

迫り来る白銀の刃。

当たる！

そう思ったとき、新たな刃が俺に迫り狂う刃を邪魔をした。

激しい火花を散らして刃と刃が交差する。

「へえ。あなたなかなかやるわね」

女性は、本当に感心している。

紅葉はそれにかまわず、ナイフを巧みに使って、相手に権勢の一撃を入れる。

だがその一撃が相手にあたることは無い。

ナイフとナイフ同士の戦いが繰り広げられ、始めは同等の戦いを繰り広げていた紅葉だったが、次第に押され気味になっている。

俺はもう一度発砲しようとしてSOCOMを構える。

構えたSOCOMのサイトの先で状況は動いた。

紅葉のナイフを刃の背で受け流すと、そのままナイフを右手から左手に素早く持ちかえる。

そして、その手を紅葉の腹部にたたき込んだ。

紅葉がやられた！

ゆっくりと前のめりに倒れ込んでいく紅葉を女性が抱き留める。

それと同時にいくつもの銃が

俺に突きつけられる。

ちくしょう、取り返しのつかないへまを踏んじまった……。

「ボス。コイツもこの場で片付けますか？」

男が冷酷に言う。

ボスと呼ばれた女性は紅葉の服の中から何かをとりだした。

あれは、警察手帳？

「フツ、そう言うことね。お前たち、銃を下ろしなさい」

「し、しかし！」

「私の話を聞いていなかったの？ 早く銃を下ろしなさい。それに、人聞きの悪い事言わないでくれる？ 私は今まで誰一人として殺した



ことは無いわよ」

そう言つて、女性はナイフを鞘に入れた。

「東の警官が来るなんて久しぶりね。連絡は来ているわ。蒲原巡査」

「連絡だと……」

「ええ。あまり時間がないわ。ついてきて」

彼女が手を一振りしただけで、ゾロゾロと男たちは散っていった。

俺はとりあえず気を失った紅葉を背負うと、女性について行く。

明るいところにきて気づいたのだが、女性の髪は腰近くまである黒髪のアトレート。

鋭利な刃物のような瞳は鋭く厳しそうに見える。

その目は美形さを崩すわけでもなく、むしろ大人びた女性さを漂わせていた。

裏路地からですぐの小さな店に女性は入っていく。

「バー？」

変哲もないただの飲み屋。入つてすぐの客席は至つてふつつ。

しかし、奥の部屋にはいるとそこは別世界だった。

「近下道……」

「そう、私たちの根城は地下。つまり広島我真下よ」

女性は、青いライトで照らされた地下道を歩いていく。

こう歩いているだけでもわかる。

この地下空間はかなりの広さがあるようだ。

「さて、ついたわよ」

そう言って、鉄のドアを開ける。

ドアの横には『地下街西口』と書かれている

「なっ!?!」

蒲原が驚くのも無理はなかった。

巨大な近下空間に存在するもう一つの町。

「Underground cityアンダーグラウンドシティによじろ

まるで映画を見ているかのような景色。

「これほどの空間が地下に存在していたのか……」

小さな店や住宅が中央の通りを囲むように立ち並んでいて、地下空

間のちょうど真ん中に位置する場所には、白色の洋風の建物が建っている。

「この地下街を知っているのはごくわずかな人間だけよ」

脇の小さな階段を下りていき地下街の中に入っていく。

「ひなきり 雛霧さま。只今お戻りですか？」

階段の下で黒の執事服に身を包んだ老人が一礼した。

雛霧と呼ばれた女性は答える。

「ええ。今戻ったわ。早速で悪いけど、最上幹部の招集をかけて。

場所は中央会議堂」

「了解いたしました。早速手配します」

そう言うと、老人は何やらメモを取ると特殊な携帯でどこかに連絡を取る。

「地下空間の国王といったところだな」

「それは言い過ぎよ。私たちは地下に集まった組織」

「それで、アンタがその最高指揮者というわけか……」

「まっ、そんなところね。私たち異端者が隠れて過ごすには絶好の隠れ場所ということ」

雛霧は、クスリと笑って答える。

流石、一番上に立つだけの人間である。動じないというか、余裕に満ちあふれている。

「と言うことは、アンタらも能力者なのか？」

「そうね。組織の約七割は能力者が占めているわね」

七割か、かなりの人数だな。

よくそれほど人数がいて、警察に見つからないものだ。

「自己紹介をしていなかったわね。私の名前は雛霧椿ひなぎり つかよ。あなた達のことは菜奈から聞いてるわ」

「へえ……。んっ？ 菜奈って柳刃課長のことか！？」

「そうよ。ほかに誰がいるのよ」

やれやれといった感じに雛霧は手を振る。

いや、他にもいるだろうが……。とつつこむわけにはいかなかった俺は、さらに質問を投げかける。

「課長とはどんな関係なんだ？」

「菜奈とは高校までの幼なじみよ。でも、オジサンの一件があった

あの娘は東のSAAFに私は西日本に……。でも、ちよくちよく会う間柄よ」

「西日本でよかったな。でなけりや速攻、課長に検挙されてるぜ」  
課長の仕事ぶりには時々恐れ入る。

龍司の推理力も秀でるものがあるが、課長は警察官として求められる素質にどれも優れている。

正義感、洞察能力、運動神経、優しさ。

警察官の鏡といっても言い過ぎではないはずだ。

「フツッ、そうかもね。だけど、私たちにだってしっかりとした目標ぐらいあるわよ」

目を細めた雛霧の表情が真剣になる。

「私たちにだって、自由に太陽の下で生きる権利があるはずなのにそれができない。だから私たちはこうして地下で生活しているのよ」

「地下で平和に暮らすのがこの組織の目的じゃないだろ。一体何を考えている？」

こんなことを聞かなくても、返事は大体予想がついていたはずなのに、俺は確かめるように質問した。

「私たちの目的……。それは革命よ」

雑霧は迷うことも無くその質問に返答した。  
そう、まるでそれが当たり前であるかのようだ。

Stage 2 六発目 「大戦の遺産」

「……」

ふてくされた顔でベットに座る紅葉。

「悪かったって！ 頼むから機嫌なおしてくれよ」

俺は手を合わせて謝る。だが、それで紅葉の機嫌が直るわけがない。

フンっといってそっぱを向く紅葉に肩を下ろす蒲原。

地下街に来てもうどれぐらいたったのだろうか？

太陽も月もない茶色の手を見たとところで時間が分かるはずもなかった。

「ホントに心配したんだから」

俺は下を向いたまま話を続ける。

「ウルサイわね。そこところは、感謝してるわよ」

そっぱを向いたままだが、紅葉はそう答えた。

彼女がこうして話しているときは、気恥ずかしくて相手をみていないときの話し方だ。

「まっ、何もなくて何よりだ。とりあえず、今日は安静にしてるよ。」

「俺はそれだけ言い残しておれば部屋を出た。」

さて、完全に相手を信用するのは危険だからな。

まずは、この街を見て回るとするか。

そう思っではじめに俺が向かったのは町の中央に建つ真っ白な建物。

「中央会議堂ね……」

国会議事堂とホワイトハウスを足して2で割ったような建物だ。

恐らく地下街の中で一番立派な建物だ。

ここで、地下街の決めごとなどの色々なことが決まっているというわけだな。

しかし、無法地帯というほど治安は悪くないな。

しっかりとした政治が行われている分、上より治安が良いくらいだ。

「不用意に拳銃は抜けないな」

さて、次は市場にでも行ってみるか。

大通りを歩きながら俺は色々考えてみる。



これほどの場所に警察のメスが入らないのにも驚くが、それ以上にどれだけの資金が投資されたんだ？

数億の単位じゃないな。数十億、へたしたら数百億のレベル。

一体どこからそんな金を用意したんだ？

謎が呼ぶのは新たな謎のみ。一向に答えが見える気配はない。

「んっ？　ここが市場か」

道の両端に並ぶ店舗たち。距離にして、およそ200メートルほど

「ここも結構しつかりとしてるな」

この街自体がかなりきちんと整備されているようだ。

さて、お次は……。

「あら、蒲原巡査。こんなところでなにしてるの？」

ボス現る。

後ろから声をかけてきたのは、この地下街を統べる雛霧椿。その人だった。

何だか心臓に悪い人だ。

危うく拳銃を抜くところだった。

「この地下街の実情を探ろうと思ってな」

「そうなの。結構良いところでしょ？」

「そうだな。空が見えない以外はな」

「こんな空も、たまにはいいわよ」

嫌みでいった言葉に雛霧は笑顔を崩さずに返す。

なんだかやりづらい、本当にウチの課長に似てるからな。

「さて、蒲原巡査。あなたに見てもらいたいものがあるんだけど、時間はよろしいかしら？」

「イヤと言っても連れて行くんだろ。ついて行くさ本当に暇だしな」

残してきた紅葉が少し心配だが、まあ、大丈夫だろう。

「なあ雛霧さんよ」

「何かしら？」

「ここを今の状態にするのにいったいどれだけの金を使ったんだ？」

「お金なんてほとんど使っていないわ。この場所は、戦時中の武器製造施設をそのまま流用したのよ」

「空襲をおそれての地下施設か。なるほどな、それなら合点が行く。だが、それなら不特定多数の人間にこの情報が流れているはず、な

のになぜそれがばれない」

「戦艦大和建造計画と同時にここの工事も始まっていたのよ。工事はもちろん最高国家機密。でも、この兵器工場が完成する前に日本は終戦。情報はアメリカにも日本国民にも流れることなく今に至るわ」

地下街の秘密は第二次世界大戦時代の日本帝国の遺産というわけか。

「まさか、兵器なんて製造してないだろうな」

「するわけないでしょ。第一兵器工場後といってもね残ってたのは中央会議堂と工場の建物だけよ」

完全に信用しているわけではないが、恐らく嘘ではないだろう。

第二次世界大戦末期の日本情勢を考えてもそ戦争の勢力図をひっくり返すような兵器開発はさすがに厳しいものだったはず、ましてや、地下に建築するだけでかなりの闇の金を捻出したのだ。

「完成はしていなかったと」

「そう言うこと。さあ、着いたわよ。あれに見覚えがあるんじゃないの?」

「あ、あれは!？」

俺の目の前にたつもの、それは龍司に渡された写真に写っていた廃屋だった。

「そうか、だから、衛星写真で探しても建物が見つからなかったのか……」

「探してたんでしょ？」

「中に何かあるのか？」

「さあね。それはこの地下にいる誰一人として知らないわ」

真剣な顔で雛霧は言う。

「どういうことだよ？」

「ボロいのは外見だけ、内部は戦後60年以上たった今でも嚴重な対侵入者用トラップが作動しているオーバテクノロジーの研究所よ」

「そんなバカな……」

「嘘じゃないわよ。私達だって到達出来たのは地下2階までよ」

「おいおい、まだ地下にもぐる道があるっていうことかよ……」。

龍司。今回のミッション。ちとばかり荷が重すぎるぜ。

## Stage 2 七発目「地下一階の追跡者」(前書き)

さて、今回は零式艦上戦闘機、通称ゼロ戦の話をしたいと思います。

ゼロ戦の武装は七ミリ機関銃二基と二十ミリ機関二基です。

プロペラの内から発射されるのが七ミリ、羽根から銃身が飛び出しているのが二十ミリ機関銃です。

二十ミリ機関銃の威力は絶大で、羽根に一発当たっただけで当時の米軍戦闘機の羽根がもげたほど……。

でも、ゼロ戦の最大の長所は長い飛行距離とその運動性能でした。

当時のアメリカ軍にとってゼロ戦は脅威でした。

ですが、とある事故で不時着したゼロ戦をほぼ無傷のまま手に入れたアメリカ軍はゼロ戦の研究をし、ついにゼロ戦の短所を発見しました。

その短所は、高度五千メートル以上では非行が困難になる。運動性を追求したため、防御性に乏しいというものでした。

これにより、ゼロ戦は攻略され後の大戦に響いていきます。

さて、前書きはこれぐらいにして、本文へどうぞ!!

## Stage 2 七発目「地下一階の追跡者」

窓の景色を見ながら俺はため息をついていた。

目の前のベッドにはスウスウと寝息をたてている紅葉がいる。

「ぐっすり寝やがって」

苦笑を浮かべながら俺は机の上に置いてあったSOCOMをホルスターにしまう。

目的地が分かった以上、あまり長居したくない。

そう考えた俺は、早めに行動に移すべく、街が寝静まる夜を待っていた。

寝静まると言ってもいくつかの工場などは24時間稼働している。

忍び足で表にでた俺は、昼間に確かめておいた人目の少ない道を歩いていく。

夜も昼も天井のライトがついているこの街は夜闇に紛れるなんてものは無理だ。

極力目立たなく移動するのが一番。

隠密行動を15分ほど繰り広げながら目的の廃墟にたどり着く。

荒れ放題の建物がライトに照らされて不気味にたたずんでいる。

姿勢を低く建物の裏手に回る。

この建物は、街の端に建っているため裏手には壁しかないから絶好の死角になっている。

窓をゆっくりと引くといとも簡単に開いてしまう。

「順調すぎていやな感じだぜ……」

独り言を言いながらSOCOMをホルスターから抜き去る。

後付けでつけられたホルスターのポケットからライトとサイレンサーを取り出しSOCOMに取り付ける。

拳銃を構え、廃墟の中に突入していく。

(思ったほど、中は荒れてないな)

そう思いながら、廃墟の通路を進んでいく。

光が全く射し込んでこないため、真っ暗だ。

床は当時には珍しく板張りではなくコンクリー。

(んっ。資料室?)

ライトが照らしたのは資料室と書かれた扉がある。

すっかりさびてしまっているドアノブをゆっくりと回しドアを開ける。

(本当に資料室のようだな)

部屋の両側を埋めるように棚が並んでおりたくさんの資料が収められている。

(なっ!?! これは当時のトップシークレットに当たる資料ばっかじゃねえか!?!)

一番手前の棚には第二次世界大戦時の戦艦や戦闘機などの設計図があった。

(未だに見つかってない大和の設計図まであるじゃねえか! おいおい、こりゃあ、兵器工場だけじゃなく群の最終拠点にする気だったんじゃないのか……)

様々な資料に事細かく書かれた計画書や設計図。

今となつては、闇に葬られているだろう恐ろしい報告書まであった。

さっき見たばかりの資料を本棚に返し、俺は驚きを隠せないでいた。

「ヤバいな……」

これ以上この部屋にいたら気がおかしくなりそうだ。

ドアを閉め、資料室を後にする。

今回の目的は、この建物最深部だ。



だが、資料室の時点でこんな状態なのに俺は最深部間でたどり着けるのか？

一抹の不安だけが胸を締め付ける。

ダメだ……。

こんな所で諦めるようじゃ捜査官なんて務まらねえ！

深呼吸をして廊下を奥に向かって進んでいく。

さっき考えていたように、どうやらこの建物は最終軍事拠点にするための建物だったらしい。

通り過ぎてきた扉には、最高会議室やら、長官室やら色々あった。

(日本の負の遺産だな)

周りを警戒しながら俺はそう思った。

もしも、この存在が知れていたら今の日本は違う道を歩いていたかもしれない。

良くも悪くも様々なものがここには眠っているようだ。

無言で進んでいた俺は、建物のちょうど奥に地下に続く階段が真っ暗な口を見つけた。

(さて、まずは地下一階がどうなっているか……)

静かにゆっくりと階段を下っていく。

ホコリっぽいにおいが漂っているが気にするような余裕などない。

階段は狭くそして長かった。

どつやら、すぐ地下一階というわけにはいかないようだ。

しかも、階段はまっすぐ地下に降りてなく、何回も折れ曲がっており方向がわからなくなってしまう。

(今の所、変な畏はないが……)

何回目かの角を曲がったとき急に視界が開けた。

(明るい!?)

そう、階段を抜けた先は青白い廊下につながっていた。

壁にはB1と書かれており、廊下には明かりがついている。

六十年前の建物とは思えないほどのキレイな廊下。

(なんだよここ。まるでSF映画に出てくるみたいな近未来的建物  
……)

驚きが隠せない俺。

訳が分からなくなるような恐ろしさがこみ上げてくる。

とりあえず、前に進まなくては。

そう思った俺はSOCCOMのライトを消して、廊下を進んでいくことにする。

まるで自分が映画の中に入ったかのように思ってしまつ光景に同様が隠しきれない。

ギシッ

「っ!!」

背後から聞こえてきたその音に俺はガバツと振り返る。

だが目の前に広がっているのはただ青白い廊下。

額から冷たい汗が流れ落ちる。

拳銃の引き金を握りつつ、息を整える。

さっきの音は聞き間違いではないはず……。

ギシッ

緩やかなカーブを描いた廊下の向こうからその音は聞こえてくる。

明らかにさっきより大きな音で。

(侵入者用トラップか?)

拳銃のサイト越しに廊下を睨みつける。

だんだんと近づいて来るその音は激しいものになっていく。

ガシャンガシャン

金属的な何かが地面を蹴って進んでくるような不吉な音。

ついにその姿が廊下の曲がり角から姿を現した。

「っ!!」

廊下の幅いっぱい巨大な金属製のロボットが姿だった。

前足二本に、後ろはタイヤが付いた不格好なロボット。

だが、そのロボットには侵入者など一瞬でぼろ雑巾みたいにしまっまうほどのガトリングガンが搭載されていた。

その両端には、ゼロ戦が搭載していた大火力20mm機関銃が4門。

「ヤバッ!!」

SOCOMで太刀打ちできる代物ではない。

ロケットランチャーぐらいないと奴は倒せそうにない。

ガトリングの銃身が回り出す前に俺は逃げの一手を打った。

ほんの1、2秒後にガトリングガンが火を噴いた。

激しい金属音と火薬のにおいがあたりを支配する。

危なかった。後少し遅れてたら死んでいた。

俺は廊下を全力疾走する。

幸いにもこの廊下は緩やかなカーブで繋がれた廊下だ。

相手の射線には入らない。

「あんなものがあるなんて反則だろ!!」

叫びながらも部屋を探す。

おそらくあの巨体なら、ドアをくぐるのは無理なはず。

走る俺の視界の中に一つのドアが飛び込んできた。

あれだ！

ドアを蹴り破るように部屋に転がり込む。

ドアの真正面の位置にならない大きな机の後ろに隠れる。

呼吸を整え、ゆっくりとドアの方をみる。

金属音と機械の起動音がドアの前を通り過ぎていく。

（なんだよあれは。オーバーテクノロジーにもほどがあるだろ）

机の陰から這い出た俺は、部屋の中を見回す。

（ここは作戦室か？）

大きな机が数個並べられただけの部屋。

その中央にひとときわ大きな机が置かれている。

「モニターか？」

机にはモニターのようなものが埋め込まれており、日本の国旗が映し出されている。

奥の席に取り付けられたパネルに目がいった俺はそのパネルに近づく。

いくつかボタンを押していた俺に、驚愕なものがモニターに映し出された。

「こ、これは!？」

驚きのあまり言葉を失ってしまう。

「こんなものを、日本は作っていたのか……」

）  
続  
く  
）

stage 2 七発目「地下一階の追跡者」(後書き)

只今、新作小説 戦女神アテネの凱旋の執筆のためblack cityの投稿が遅くなっています。

(ただでさえ、black city投稿遅いのにスイマセン 汗)

良ければ新作小説も読んでいただけるとうれしいです

ちょっとした設定などがblack cityとかぶっていたり、そのまま移行している部分がありますので、それなんかも楽しんでいただけたら幸いです

(設定がめんどくさかったんじゃないんだからね!!)

ということで、black city、戦女神アテネの凱旋をよろしく願います!

後忘れていましたが、作者の活動報告にも遊びに来てくださるとうれいです!

それでは、

Next time, let's meet!



stage 2 八発目 「爆炎の再開」(前書き)

MK3A2について説明します

何それ美味しいの？

と思います

(いや、美味しくないですが)

コイツはアメリカ製の手榴弾です。

TNT爆薬を使用した手榴弾で、少し威力は小さめです。

と言っても、半径2m以内を確実に破壊してしまう兵器ではあるんですけどね。

というところで、本編へどうぞ！

Stage 2 八発目 「爆炎の再開」

「んっ、んっ。ふう、よく寝た……」

まだ寝起きの意識がはっきりしていない状態で部屋を見回す。

昨日と何の代わりもない、地下街の家たちが窓から見えている。

昨日と違うところといったら、蒲原がこの部屋にいないということぐらいだろう。

何の変化のない風景に少しぼーっとしていた私は、ゆっくりと起きあがり、ベッドの横にそろえられている自分の靴を履く。

机の上の靴にはしっかりと二丁のUZIEが整備された状態でしまわれている。

「蒲原が整備したのかな？」

そう独り言を言いながら、ホルスターに拳銃をしまう。

時計の針は、午前六時を指している。

もう朝だというのに蒲原の姿はない。

いつもは、遅刻するほど寝起きが悪いというのに。

「あら？ 水沢さんおきていたの？」

ドアから入ってきたのはこの地下街のドン、雛霧椿。

「ええ。ずいぶん休養出来たから。」

「それはよかったわ」

「あの、蒲原は？」

「蒲原君は、軍基地跡の調査に行ったんじゃないの？ あら、蒲原君から聞いてないの？」

「はい？」

蒲原が私に黙って任務に……。

へえ。

アイツも気の利いたことするじゃない。

内なる闘争心に火がつくのに数秒とかからなかった。

私をおいていくとは、いい度胸してるじゃないの！

「フフフフ……」

「水沢さん？ どうしたの？」

「雛霧さん。その軍基地跡に連れて行ってもらえますか？」

「え、ええ。いいわよ」

紅葉の殺気に雛霧は一瞬ひるんでしまった。

それが、ものすごく恐ろしい本当に殺されそうな殺気という意味ではない。

言うなれば、もう一つの殺気。殺しはしないが生かしておくつもりもない半殺しの気。

「蒲原。待ってなさいよ！」

ギュッと拳を握りしめ、紅葉はそう決意した。

自分の宿を取っていた家から目的地まで約30分。

写真でも見たことある廃屋がそこにあつた。

見た目からして、建ててから何十年もたっているだろう。

外壁はひび割れや汚れがひどい。

「ここに蒲原がね……」

「止めないの？」

「当たり前」

UZIを回転させながらホルスターから取り出し、両手に持つ。さて、問題は中がどうなっているか……。

UZIに取り付けたライトで手前を照らしながら廃屋の調査をする。

中は、確かにボロボロだが思っていた以上には大丈夫そう。

「……地下？」

「まあ、そうなるわね。私もこの下に一回行ったことあるけど、あまりそう何回も行きたい場所ではないわね」

離霧も、ペンライトと拳銃片手に地下に続く階段を眺める。

「行くしかないか」

ゆっくりと慎重に、階段を下っていく。

階段の下に向かって吹き抜ける風が脚を冷たく冷やす。

「結構長いよね」

「そうね、何でもここまで長いかは知らないけど、大方、侵入者用の時間稼ぎじゃないのかしら」

横幅の狭い階段が結構続き、やっとのことで下の階についた。  
SFチックな青白い廊下は不気味だ。

「こんなものが地下にあったの？」

「そう。そしてここからは対侵入者用のトラップが……」

「あるみたいね」

いつの間にやら静かだった廊下にこだまする、異様な金属音。  
「さて、どんなのがお出ましなの？」

カーブの先からするその物音を確かめるため、意識を集中させる。

やがて、壁が骨格だけの透明なガラスのようになっていく。

「……。はあ、蒲原」

壁の向こうに見えたのは、変なロボと鬼ごっこをしている蒲原。

「20ミリ機関銃4基、あつ、ガトリングまでついてるんだ」

冷静に相手の戦力を確認する。

仕方がない、あの手のバカには……。

左手のUZ-Iをホルスターにしまい込み、スカートの中から楕円形の金属製の物を取り出す。

「水沢さん!？」

横に立っていた雛霧の顔に驚きが見える。

「大丈夫! ちょっと爆発するだけですから」

左手にあるのは、刺激バツチリのアメリカ製のMK3A2手榴弾。

危害半径は約2mと小さめだが、コレなら見方を巻き込む可能性が低くなる。

蒲原はカーブのすぐ手前まできている。

右手のUZIを空中に放り投げ、手榴弾の金属のピンを抜く。

そのまま、左手を振り抜いてさっきピンを抜いた手榴弾を投げる。

空中できれいに弧を描きながら飛んでいく。

ちょうど、空中で頂点に達したとき蒲原がカーブを抜けてこちらに走ってきた。

「ほら！ 全力ダッシュ！」

「なっ！」

蒲原の上を抜けていく手榴弾。

ちょうどそのとき、右手に放り投げたUZIが戻ってきた。

「仕上げ！」

UZIの連射機能を生かし、弾丸を手榴弾に掠めさせる。

今の手榴弾は多少の被弾では爆発しない。

銃弾を使って、加速&回転がついた手榴弾は、神原の後ろから現れた不格好なロボの手前で炸裂した。

轟音とともにロボは破壊され、その爆風で蒲原は前のめりに吹っ飛んだ。

「どんなもんよ！」

「どんなもんじゃねえ！ 俺を殺す気か！！！」

「大丈夫。計算のうちだから」

「いれんな！」

パンパンと服の汚れを落としながら神原が立ち上がる。

「私をおいていった罰よ」

「……悪かった」

「わかればよろしい」

「えっと、あなた達って案外タフなのね」

苦笑いしながら雛霧が近寄ってくる。

「そうか？」

「そう？」

2人は同時にそう答える。

だって、私たちはペアじゃない。

それに、こんなに面白いこと、止められるわけないでしょ？



紅葉はにっこり微笑んだ

）続く）

s t a g e 2 九 発 目 「 動 き 出 し た 闇 」 ( 前 書 き )

どうも、作者のテストのため更新が遅れましてすいませんでした。

では、長く引っ張るのもあれなので、本編へどうぞ！！！！！

stage 2 九発目 「動き出した闇」

「全く。それで一人ここに乗り込んだの？」

「ああ、それで、ある部屋でとあるものを見つけた後からあの口ボツトに追い掛け回されてな」

「とあるもの？」

紅葉は首をかしげる。

「そう、俺が見つけたのはこれだ」

胸ポケットから蒲原は一枚の白黒写真を取り出す。

「こ、これって……」

写真に写っている鋼の巨体。

「戦艦大和……」

雛霧は信じられないといった感じに呟く。

写真の中には、諸所違つところはあがあるが、間違いなく世界最強の戦艦大和だった。

1945年、沖縄特攻にてその巨体を沈めた戦艦大和。

全長、263メートルの巨艦の爆沈は日本にどれだけの衝撃を与え

ただろつか計り知れない。

「それでもって、この写真の船はどうやら。地下にあるみたいなんだ」

「蒲原。もしかしてそれって」

「ああ。この下にもう一つの戦艦大和があるってことだ。ここが地下二階だとすると、大和のドックがあるのはおそらく地下五階のドック」

「まさか……。龍司に連絡したほうがいいんじゃない？」

まさかこ地下にそれ程の大物があるとは知らなかった。

これでは、私たち二人でどうにかなるような問題ではない。

「そう思って、龍司に連絡を入れた。だが、妨害電波か何か分かんが、この通信機は役に立たん。一応、この地図は送っておいたが届くどうか。だから、このまま進むべきか、或いはいったん戻って報告するべきか。紅葉はどうする？」

「そんなの戻る」

話の途中で上から耳を切るような大爆音が話を切った。

「なっ！」

「おいおい！　なんだ？」

紅葉と蒲原は拳銃を抜き去り戦闘体制にうつる。

丁度その時雑霧から、銃撃戦のような音とともに通信が入る

『ボス！ 西部強襲部隊の奴らです！ 早くお逃げください！ 相手はかなりの数で！ ガガガガッ』

「どうしたの？ 状況を説明しなさい！！」

『雑霧か？ 丁度よかったぜ。これでお前を、あそこ（・・・）に放り込めるな』

「アンタは何者？」

『忘れちゃったのか？ 俺だよ俺。藤豪様とうごうさまの名前まで忘れちゃったとは言わせねえぞ？』

「藤豪……藤豪 大二郎だいじろう！」

『ふっやっと思いついたか。ま、首でも洗って待ってな。すぐに俺が捕まえてやるからよ』

ザーーーーー

無駄な砂嵐のみが通路に響き渡る。

「あの手荒いってことで有名な西部強襲部隊まで、出てきやがったのかよ！」

蒲原は通路の先を気にしながら、前に進んでいく。

「こうなったら、戻ることは出来なくなっただわね」

「でも、何でこの場所が？」

「もしかしたら、内通者がいたのかもな。アンタはこのボスだ。もし真っ先に疑うとしたら俺たちだろうな。疑ってくれってもかまわないが、事件が終わった後にしてくれないか？」

「……いいえ。貴方たちは奈葉の部下だから私は信用するわ。それに、絶対あいつらには蹴りをつけないと私の気がすまないわ!!」

「じゃ！ 意見もまとまったところで、先に進みましょう！」

紅葉の号令とともに三人は通路の奥に受かって走り出した。

東日本 帝都新京 帝国病院

「あれ？ 姉さんは？」

「ん？ ああ、課長は星野さんに呼ばれて署に戻ったぞ」

桔梗はお見舞いのリンゴの皮むきをしている。

俺の体はだいぶ良くなったと言うのにコイツはずっと病院に来てい

る。

「もう大丈夫だって」

「龍司！」

「は、ハイ!!」

その剣幕に思わず全力で返事をしてしまった。

「いいかよく聞け」

「お、おう」

「退院するまでお前はけが人だ」

「あ、ああ……」

桔梗のスカートの間から不気味にCZ75が輝く。

よく分からんが、ここは従っていたほうがよさそうだ。

ブブツッ！ ブブツッ！

「ん？ 電話か？」

ベットの脇に置いていた携帯が電話を知らせるため振動していた。

「もしもし？」

『龍司か？　ワイやワイ！　豊崎や』

「ああ、科研の豊崎か。で、どうした？」

「つい最近あったはずなのにえらく懐かしく感じるのは俺の気のせい  
か？」

『龍司！　えらいことになったで！　さっき、西日本の蒲原たちが  
無線が入ったんだが』

「何か言ってたか？」

『それが、妨害電波で無線がキャッチできなかつたんだ。だが、西  
日本の各地カメラにちよいとハッキングしたらえらいことになつ  
てるで！』

「思いつきり犯罪犯してんじゃないよ。まあいい。それで何があつ  
た？」

『西部強襲部隊が広島のある地点に突入していったんや！』

「突入！？」

「まずい、早くもあいつらが動き出したか！」

「姉さんは？　課長はどこにいるか分かるか？」

『それが、さっきから連絡が取れんのか。龍司、どうするん？』



「……よし！ 豊崎！ 高速戦闘ヘリを手配してくれ！ 三十分以内にだぞ！ 場所は帝国病院屋上。いいな！」

『りよ、了解や！』

携帯の電源を切り、ベットから立ち上がる。

「龍司！」

「けがもう大丈夫だ。そんなことより仲間の命だ！ 行くぞ桔梗！」

ロッカーの中のSAAFの制服に着替え、ミネベアをホルスターにしまう。

けがが完全に完治したわけではないが、あいにく悠長なことを言っている暇はない。

それに

「俺が犯したミスは俺が取り戻す！！」

く続くく

Stage 2 十発目 「音速の翼」(前書き)

どうも夏川です。

最近のほかの小説執筆のため遅れがちですが、これからもよろしく  
お願いします！

さて今回の前書き説明は、「帝都病院」です。

帝都新京の中でもかなりの大きさの病院で、最新の機器もたくさん  
そろっています。

只今龍司君が入院していますが、病室は個室がほとんど、病院食も  
非常においしいと評判です。

災害時には、この病院を拠点として救助された方々やけがをしてい  
る方々を治療するようになっています。

屋上は二機のヘリコプターが着陸できるほど巨大で、緊急時にも十  
分対応できる病院となっています。

では、本編へどうぞ！

Stage 2 十発目 「音速の翼」

延々と続くように思えるほど長い廊下が何も言わず、ずっと続いて  
いる。

5メートル間隔で取り付けられている青白い電灯がジジジと小さな  
音をたてていた。

「さて、結構歩いたな」

「そうね。案外長い通路なのね」

「ああ、約一キロぐらいあるな。よくこんなものを作ったもんだ」

「本当よ」

進みながらも、後ろを気にしながら進まなくてはならない。

不幸か幸運か、さっきの西部強襲部隊の突入で侵入者妨害とラップ  
が発動し、上の連中は苦労しているようだ。

「こつちも、めんどくさいけど」

雛霧は手持ちのブレッタを構えながらそうつぶやく。

なるべくトラップを発動させないように進んできたが、それでも数  
個ほど発動させてしまったのだが……

「色々あったわね……」

「槍が飛び出してきたり床が抜けたり、多すぎよ」

紅葉はため息をつきながら前に進む。

「後少しで、四階につながる階段があるはずだ」

ズンッ

パラパラと天井の破片が落ちてくる

「……。近かったな」

「相手方はすぐ上まで来ているわね」

「さあ、先を急ぐぞ」

いよいよ迫ってきたに敵に少々焦りながらも、慎重に前を目指す。

だが、どうする？

最下層にたどり着いた後、俺たちはどうなるんだ？

一抹の不安がよぎる。

「雛霧さんよ。手の戦力は分かるのか？」

「そうね……。一個小隊で来ているとすれば、私たちにはかなり厳しいかも」

「紅葉。残弾は？」

「マガジン4つ」

「残り128発か俺はマガジンが後4つだから48発か……。雫霧は？」

「私は、マガジン3つで45発よ」

相手はプロ。いくら超能力者といってもコッチは高校生……

まずいよな。

龍司ならどうする？

東日本 帝都新京 帝都病院屋上

「龍司！ 場所は分かっているのか？」

「ああ。地図の受信には成功したおかげ何とかなる。だが、問題はその場所だ……」

「場所？」

「広島は広島なんだが、送信した場所は海の上なんだ」

「まさか……」

「理由は分かんが、船か或いは海中か」

手がかりとなる写真を蒲原に渡し、捜査に出てもらったのだが俺にもあの建物が何なのか分かっていない。

あの写真は、刑務所<sup>ムシヨ</sup>に入った中山が渡してきた写真。

『どうしてもこの事件の裏、black cityが知りたきゃ、ここを調べな。ここなら戦時中の日本の情報がザクザクでてくるからな』

『戦時中？ 戦争とどういう関係があるんだ？』

『そこまで教えられんな。それに、現物を見るほうがよっぽど確証があるからな』

そう言って渡してきた。

「もしかしたら、消えた3000億円も関係しているのか？」

病院の屋上から帝都を見渡しながら俺は思考をめぐらす。

3000億、洋上、広島、そして戦争。

「……………」

電撃のようなひらめきが体中を駆け巡る。

「もしかして……………」

「何か分かったのか？」

「あくまでも推理だが、もしかして戦艦の建造計画かもしれん」

「戦艦だと。なぜ今さらそんなものを？」

「アメリカの軍事レポートにこんなことが書かれていた。今の能力開発が進めば、一人の力で巨大なもの、例えば船なんかを自在に動かすことが出来る。」

「ワンマン・オペレーション・システムか！」

ワンマン・オペレーション・システム。

それが可能なら、一人の能力者により、自在に戦艦などを動かし、戦闘をこなし、修復までできるというシステムだ。

「完成していたのか？ そんな恐ろしい代物が」

俺の呟きをかき消すかのようにSAAFの高速戦闘ヘリが帝都病院の上空に現れた。

ゆっくりと降下してきて綺麗に着地する。

「柳刃君！早く乗って！」

星野さんがヘリのドアを開けそう叫んだ。

桔梗と顔を見合わせた後、一度うなずくとヘリに乗り込む。

「星野さん！ 姉さんは？」

「課長は離れ島に行ったよ」

「離れ島に!？」

離れ島というと、帝都湾に浮かぶ人工の島。航空自衛隊第六航空師団の基地があるだけのはず……

なぜあんなところに？

俺のそんな疑問はヘリのローター音すらかき消す轟音によって一瞬で解かれた。

帝都上空を音速で駆け抜けていくその姿。

「F-35ライトニング！」

マッハ1.6を誇る垂直離陸仕様のステレス戦闘機が低空を駆けている。あつという間にその姿は点になっていく。

「姉さん。まさか戦闘機を!！」

おいおい!

話がでかすぎるだろ!？

俺はそう叫びたかった……



）  
続  
く  
）

stage 2 十一発目 「プリンセス・ティアーズ」(前書き)

どうも夏川です。

BLACK CITY stage 2 もいよいよクライマックスと  
なってます。

今まで以上のバトルxバトルでいける作品にしようと思っ  
て皆様よろしくお願いいたします!!

> i 3 3 3 2 3 | 1 7 5 3 <

Stage 2 十一発目 「プリンセス・ティアーズ」

地下四階の終わりを告げる階段が目の前に現れる。

だが、状況は好ましいものではない。

明らかな戦力差で後ろから敵が迫ってきている。

まだ、交戦こそしてないが、時間の問題だろう。

しかも、行く先は行き止まり。

龍司に通信をしてから、およそ二時間弱。

向こうからの返信はまだない。いや、むしろこちらの情報が送れたかすら怪しい。

いまだに絶えず流されている妨害電波でこちらが再度連絡取るのは難しいだろう。

「紅葉。まだ手榴弾残ってるか？」

「後1つならあるわ」

1つか……。

1発で道をふさげれば楽だが、無理そうだな。

この廊下やら扉やらは妙に近代的だから。この手の手榴弾じゃあ、威力が小さすぎる。

「……奴らの目的は、私の逮捕ではないはず。何かほかの目的があるはずだわ」

「あんたが目的じゃない？」

「大和がいったいどれほどのものか分からないけど、相手のフィールドかもしれない地下のさらに地下に小隊で乗り込んでくるほどアイツは愚かではないはず。もしかしたら、地下の大和が目的かもしれないわ」

「ちっ！ ホントに間が悪い奴らだ」

俺たちを追ってくる奴らの足音が近づいてきた。

かなりの数の足音だな。ざっと10人弱といったところか。

「やれやれ、貧乏くじ引いちまったかもな！」

右手に握っていたSOCCOMのトリガーを引く。

サイレンサーを装着しているので空気が抜けるような発砲音が4発。

畳一条ほどの床の鉄板をを撃ち抜く。

鉄板を固定しているボルトをSOCCOMから飛び出した4つの弾丸が破壊する。

このタイミングで敵もこちらを発見したようだ。戸惑いもなく銃をこちらに向けてきた。

あれは、M16！

信頼性の高いアサルトライフルとは、こっちの分が悪い。

相手が引き金を引くより先に、先ほどボルトを破壊した鉄板を畳替えしの要領で一気に起こす。

そして起きあがった鉄板に力を集中させ、能力の波長そろえて左手にその全てを集める。

自分の中の時間がゆっくりと動いていく。

左手に集まった『静』の能力を瞬時に鉄板の大きさに展開する。

ほぼ同タイミングで敵のM16の銃口が煌く。

だが、僅差の差で俺の能力展開のほうが早かった。

時間を止められた鉄板の壁には、何発もの銃弾がぶち当たる。鉄板といっても、厚さ数ミリの薄い鉄板だ。

普通なら鉄板を貫いて銃弾が襲いかかってくるだろう

だが、俺の力によって時間の止められた物体は通常の物理現象は通じない。

たとえ対戦車ミサイルをぶち込んでも壊れない無敵の鉄壁と化している。

M16の吐き出した鉛玉ごときでは破ることはできない。

「行くぞ！」

壁の効力はもって約30秒。

これほど時間があれば、余裕をもって逃げられる。

後ろも見ず全速力で階段を下っていく。

後方から、金属と金属のぶつかり合う激しい音と、硝煙の香りが漂ってくる。

「ドックに行ったらどうするんだ？」

「真正面から交戦したところで、やられるのが落ちだわ！ とりあえずは、隠れて、時期をうかがうべきだわ！」

「了解！」

離霧の提案を受け入れたほうがいいだろう。

相手は、かなりの数。救援がくる兆しが無い中での戦法では、一番の得策だろう。

まずは、相手から隠れて奇襲をねらった方が勝率がグンッと上がる。

あとは、地下5階がどうなってるか……

俺の心配は、杞憂に終わることになる。

階段を下りきると、視界は一気に広がった。

縦横、およそ500メートル近くある大きな空間が目の前に広がっていたのだ。

巨大な造船用のクレーン、兵器組み立て用の工場。

そして、この巨大な空間を圧迫するかのようにはびえる鉄の城、戦艦大和が目の前にそびえ立っていた。

「……大和!？」

大きな艦橋、見るものを威圧する、世界最大の46センチ主砲。だけを見ればまさしくその船は戦艦大和。

「おいおい、味付けされすぎてるだろ……」

俺は言葉を失った。

大和の甲板に立つ長方形をした構造物。

それは、現代のイージス艦に装備されているミサイル発射装置で間違いないはず。

それだけではない、後方甲板には対潜用の単発魚雷発射管まで取り付けられている。

「詮索は後よ! 艦内に入りましょ!」

「あ、ああ……」

ハンマーで頭を殴られたかのような、衝撃に一瞬硬直してしまった。ここにある戦艦は、戦時中に生き残った戦艦なんかじゃない。何者かによつて近代武装をさせた恐ろしい兵器だ。

俺は頭の中が混乱するのを必死に押さえながら、急いで甲板に上がるタラップを駆け上がった。

戦艦大和を一言でいうと、とにかくでかい。

全長、263メートルは伊達ではない。

艦橋はビルかと思うほど高く、その艦橋の頂上には、やはり近代的なレーダーが取り付けられている。

「蒲原！ コツチよ！」

俺は、紅葉の呼ぶ声を頼りに艦橋の中に入っていく。

「エレベーター完備か。流石大和だな」

大和の艦橋内にエレベーターがあるのは近代化のおかげではない。

大和が造られた第二次世界大戦当時から、艦橋内に設置されている。

「これほど巨大なら、エレベーターも必要よね……」

「確かにな。さて、これからどうする？ 雛霧さんよ」



「そうね。艦橋から、まずは下甲板まで下りましょ。もしかした、武器の1つやふたぐらいあるかもしれないから」

「同感だ。人数が少ないんだから、せめていい装備が欲しい」

「……相手は、今のところ15人みたいね」

気を集中させて外の様子を見ている紅葉。

早くも、敵はこのドックに侵入してきたらしい。

SAAFに入ってから、それなりの死線はくぐりぬけている。

だが、今季の事件は今まで以上にきつい事件になりそうだ。

さっきの戦闘からして、ヤツラは俺たちを生かしておくつもりは無いらしい。

しかも、相手はプロ。この時点で、すでに勝ち目は薄い。

全く、過激で厄介な奴らだ。

「ボスが現れたみたいよ……」

紅葉がそう呟く。俺と雛霧は押し黙り、紅葉の言葉に耳を傾ける。

「何か命令しているわね。えっと、『お前たちは雛霧を探せ。お前たちは、プリンセス・ティアーズを探せ!』……」

プリンセス・ティアーズ（皇女の涙）……。

どっかで聞いたことがある気がするが、思い出せない。

「まさか……」

蒼白な顔で空中を見る雛霧。

「知ってるのか？ プリンセス・ティアーズを」

「ええ。でもなんであんな物がこんな地下に！」

「蒲原。ここじゃマズイから、いったん下に下りるわよ」

「そうだな。それでいいか？」

「そうね。そうしましょ……」

未だ動揺隠せずといった感じにうなずく雛霧。

敵が大和に上がってくる前に、下に続く階段を、足音を殺して下っていく。

最下甲板まで降りた俺たちは、資料室で見つけた、大和の艦内図を元に兵員室に来ていた。

「ここには目ぼしそうな武器は無さそうだな……」

大和の艦内に素人が何も持たずに入ると、必ずといっていいほど迷ってしまうほど構造が複雑だ。

「しばらくはここで大丈夫だろう。で、プリンセス。ティアーズってなんなんだ？」

「プリンセス・ティアーズ。またの名を、「このつどのつりやくけっしやうたい高濃度能力晶体。」

一般に出回ることなんて、絶対に無い宝石みたいなものよ。透き通った青色の結晶で、この結晶体には能力者と同じ能力成分が含まれているの。」

問題はその濃度。最も高濃度な結晶体になれば、ピンポン玉ほどの大きさで半径10kmを一瞬にして焼け野原にしてしまうほどの代物よ。」

「マジかよ……。そんなものがあつたのか」

「そんな物があいつらの手に渡つたら……」

「西部強襲部隊が日本統一を視野に入れていたら、計り知れない兵器を西日本に譲っちゃうことになるな」

コイツは、マズイことになつたぞ。」

「まさかだとは思つが、それで、この大和があるのか？」

「ありうるわね。大和の46センチ主砲の最大射程距離は42km。今の技術なら、射程延長弾を使えば100kmはいくかもしれないわ」

「ミサイルも着いてんだ。それを加えれば、確実に250km圏内

を有効射程距離に収められる。ふっ、これは丁度いい土産話が出来るじゃねえか」

絶望的ともいえる状況で、分かっていた恐ろしい事実。

だが、湧き上がってくるのは絶望ではなかった。なぜだか分からないが、ふっふつとやる気がこみ上げてくる。

「相手がそのつもりなら、コッチだってひと暴れさせてもらっただけさ

「そうね。やってやりましょ」

俺と紅葉は互いに見合っただけ。

相手が強ければ強いほど、燃えるのが、俺と紅葉のタッグだ。

必ずこの事件を解決させて見せる！！

ここから俺たちの反撃が始まったのだ……。

stage 2 十二発目 「浮上」(前書き)

どうも、少し日があいてしまいましたね 汗

作者はそろそろテスト期間なのでstage 2のラストになる十三話は十二月以降になると思います。

ご迷惑おかけしますが、ご理解よろしくお願いします。

そして、stage 3以降からはライトのベル風な感じでいこうと思っております!!

では、本文へどうぞ!!

あれから、どれくらいの時間が経っただろうか。眼下に見える海面を凝視するように俺はヘリから下を眺めていた。

「星野さん。このヘリで伊豆半島沖まではどれくらいかかる？」

「そうだね。後30分はどうしてもかかってしまうね……………」

「30分か。課長はもう着いてる頃じゃないか？」

俺の腕時計を見た桔梗がそう呟く。

そうだな。もうとつくに着いているだろう。なにせ、向こうは時速1600kmで飛行可能な超音速機。しかも、そのステルス性能は、アメリカ軍お墨付きの超高性能。

ただ、一つ問題があるとしたら……………。

「……………領空侵犯だね」

星野さんは、操縦しながらそう言う。

これがある限り、うかつに向こうの入ることが出来ない。

そう、現在の日本は2つに割れている。勿論それぞれの領土、領海、領空が存在する。そして、その国の領空を通過する場合は、あらかじめ報告が必要なのだ。無断での進入などあってはならない。

もしも、報告無しでその領空に飛び込もうものなら、撃墜されたとしても文句が言えない。それに、もし撃墜されなかったとしても、これはれっきとした国際問題に発展しかねない。

「キツいな……………」

「この戦闘ヘリで近づけるのは、伊豆半島の手前までだからね」

「外交省はどうなんです？」

「それが、先ほどから連絡しているんだが、許可が下りないらしいんだ」

「西部強襲部隊は、西日本政府の直属の部隊ですからね。おそらく、向こうの外交省にも根回しをしてるんじゃないんですか？」

「ありえる話だね」

コッチは仲間の危険もかかっているというのに身動きすら取れない状態。歯がゆくてならない。

ピピッ！！ピピッ！！

「龍司君。緊急無線だ！　すまないが出てくれないか？」

「あ、はい！」

「すぐさま、受信機を取る。」

「ハイ、こちらS A A 1号機」

「その声は、龍司ね。ちょうど良かったわ！」

無線から聞こえてきたのは、雑音混じりだが、慣れ親しんだ声間違いない姉さんだ。

「姉さん！　戦闘機まで出してきたて一体何をするつもりなんだ！」

「細かい説明は後よ！　ひとまず、何とか西日本の領空に入ることが出来るようになったわ！」

なに！

外交省あれほどてこずっていたのにか！

「どういうことだよ？」

「後3分で、皇室専用航空機が成田を離陸することになっているわ！　それに便乗して、S A A Fの戦闘ヘリと離れ島基地で借りてきたF - 35を護衛任務として西日本の領空に入ることが出来るようにしたのよ」

皇室専用航空機……。

そうか、たしかに、西日本の主というべき皇室の航空機となれば向こうも流石に断れるはずが無い。

でも、皇室航空機を使うなんて今日の成田空港のスケジュールには組まれていなかったはずだぞ。

どういうことだよ。

「まさか、課長がいなかったのは、皇室と連絡を取るためだったのか！」

「まさか、姉さんに皇室に知り合いがいるなんて聞いたことが無いぞ」

「いや、聞き覚えがあるよ。たしか、柳刃課長のご親友に峰鈴園彩子ほつれいえんあ様がいらっしやっただはず……」

ほ、峰鈴園彩子様だって……

あの、内親王殿下だということのか！

「でもちよつとまってくださいよ！ たしか彩子様は高校卒業後に公の場に姿すら現していないはず。一説では、彩子様が失踪したという噂までたっているはずじゃ！」

『そう、彩子は今（、）は（、）皇居にはいないわ。後、これは悪い知らせよ。相手の戦力が、地下施設に保管してあった大和型4番艦だということが判明したわ』

「4番艦だって！ 確かあれば、戦時中に船底の一部を残して解体されたはずじゃ……」

『どうやらその一部を、広島の地下基地に移動させ、秘密ドックで建造されていたみたいね。「紀伊」という名前を授かった立派な戦艦よ。おもな武装に、46センチ主砲9門、対空兵装多数、スタンダートミサイル射出口がおよそ8、単発魚雷発射管が6つ。そしてイージスシステムの最大有効射程距離が250km』

「重武装すぎるだろ……」

「加えて、ワンマン・オペレーションシステム。状況は最悪だな」  
流石の桔梗も、顎に手を当て悩んでいる。

「何か打つ手は無いのか？ 姉さん」

『あるとすれば、戦艦紀伊に乗艦しているであろう、蒲原君と紅葉ちゃんに頼るしかないわ』

「課長、しかし、着艦した所で、我々に逮捕権はないはずでは！」  
星野さんが言うように戦艦紀伊は広島で製造されたのだ。しかも、製造された当時の国、大日本帝国は存在しない。よって、その所有権は自然的に西日本になる。つまり、西日本のSAAFに逮捕権はないということだ。



「捕まえるどころか、捕まえられる立場に回ると言いたいよね。そこらへんも大丈夫！ 後は、戦艦紀伊の制圧だけを考えておきなさい！ どうやら、敵は恐ろしいものを運用を考えてるみたいだからね」  
姉さんに言いたかった意味は、数分しないうちに現実となることになる。

「おい、まずいんじゃないのか？」

「ええそうね」

兵員室から、出た蒲原一同は、最下甲板を移動していた。

分厚い鉄板の向こうから聞こえてくる激しい水音が廊下に木霊する。

「まさか、ドックに水を？」

「いや、そうじゃない。信じられんことだが、大和が潜水行動を行っているみたいだ……」

「うそ……」

「おそらく、この船の両側に水を注水して潜るようになってはいるはず」

ゆっくりと、細い廊下をしのび足で進んでいく。お世辞でも、いい状況とはいえない。反撃、或いは撤退のチャンスを伺っていた俺たちは、むしろ、敵の要塞に閉じ込められてしまったのだ。

それに加えて、潜水中の船の中で暴動を起こすわけにはいけない。

潜水艦はとてもデリケートな乗り物なのだ。下手なところに銃弾が当たれば、二度と太陽を拝めなくなる可能性だってある。

「だが、この船は潜水艦して完璧には仕上がってない。だから、ドックから海洋に出たら直ぐに浮上するはずだ。そのタイミングを狙って反撃するか、救援を呼ぶしかない……」

「でもいいの？ 西日本の領地で暴動なんて起こしたら、私たちはお尋ねものになるわよ！」

確かに紅葉の言うとおり、この船は西日本の領海にいる。しかも相手は、西日本の正規部隊。

分が悪すぎる……。

「雛霧さんよ。何かいい案はあるか？」

「……無くはないは。ただ……」

「ただ、なんだ？」

「いえ、なんでもないわ。反撃のチャンスがあるとすれば、蒲原巡查の言うように浮上のタイミングしかない」

「……」

さっきの雛霧の顔。少し気なるが、気にしている余裕は無かった。

「貴様！ 何者だ！」

角を曲がってきた、敵がこちらに気づいたのだ。

「ちっ！ 毎度、毎度！」

幸い、向こうは一人。他の奴らに知らされる前に終わらすことが出来そうだ。

素早くSOCOMを発砲する。こういった場面において、強襲用拳銃はその力を遺憾なく発揮する。

大きな発砲音がしないため、他の敵に気づかれにくいのだ。

相手が、発砲してくるよりも先に火を噴いたSOCOMが敵のM16アサルトライフルを叩き落とす。

そのタイミングを見計らって、紅葉が一気に敵に詰め寄り、神速の速さで敵の首筋にナイフの柄を叩き込む。

「少し寝てなさい」

その一撃で気絶した敵は、その場に倒れこむ。

「ふう。ぎりぎりセーフか？」

俺は、敵のアサルトライフルを取り上げると、兵員室にあった縄で相手を拘束する。

「大丈夫そうみたいね」

紅葉は直視を駆使して辺りを見回しながらそう言った。監視カメラも無いみたいだから大丈夫そうさ。

「全く。ハラハラさせる奴ね」

離霧の言うとおりだ。もしも、見つかったらこちらはさらに追い込まれてしまう。これ以上の接触は避けたい。

「潜水速度が止まったみたいだな。それに、ポンプ音までしだしたと言っことは、どうやら浮上するみたいだな」

『総員に告ぐ！ 本艦は、これより浮上する！ 作戦は最終段階に移行する。浮上後は、主砲の試射を行う。総員は位置に着け！ 繰り返す。本艦は 』

天井に付けられたスピーカーからいやな予告が、繰り返される。

「主砲の試射だって！」

なんてことだ！ 敵があのだでかい主砲で何かをするつもりだと直観的に俺は感じ取った。

～続く～

stage2 十三発目 「逮捕権」(前書き)

どうも、ようやくstage2の最終話を投稿することが出来ました。

長らくお待ちしていたかた、スイマセンでした。

今回で、stage3の予定も立っておりますが、公募用の小説を書くため、BLACKCITYを書くことが出来なると思われます。あくまでも、公募用に時間を掛けるつもりなので次回がいつになるのかわかりません。

ですが、時間があれば書いていきたいと思えます。

詳しいことが決まりましたら、活動報告などで発表させていただくので、よろしく願います！

では、本編へどうぞ!!!

stage 2 十三発目 「逮捕権」

(くそ！ マズいな。早くしないと主砲の試射が始まるぞ！)  
いらつきを感じながらも、俺は細い通路を注意して進んでいく。  
しかし、現段階で、俺たちの戦力では話にならない。

「そろそろ、覚悟を決めるべきかもね……」

「ああ、やりたかねえけど。状況が状況だからな」

「そうね。やるとすれば、第1艦橋にいるであろう籐豪をやるしかない」

ベレッタのマガジンをしっかりと込めながら雛霧はそう言った。

「よし、作戦決行だ。3人で第1艦橋に乗り込み、短期決戦で勝つ！ それしかない」

俺の考えに、2人はゆつくりとうなづく。

ここからの距離なら、何とか主砲の試射に間に合うかもしれない。  
あまりにも、低い勝算だが今はやるしかないからな。

極力戦闘を控えて、第1艦橋にたどり着き、一気に片付ける。

「それにしても、こんな大きな事件になるとわね……」

紅葉は苦笑しながら俺の横を歩く。

「全くだ。俺は龍司みたいなスーパーマンじゃないんだから勘弁して欲しいぜ」

「蒲原……」

「んっ？」

「頼りにしてるわよ」

「……任せとけ」

ゆつくりと、だが確実に敵に近づいている。勝てる確立は低い。  
だが、そんな中で、俺たちの会話には、なぜか余裕があった。

「やっとだ……。やっと目標を達成できる」

艦橋から見える景色を堪能しながら、男はにやりと笑った。

「籐豪体長！ 試射の準備整いました！」

「そうか。よし、レーダー手！ 目標は確認したか？」

右手に持った無線にそう話す。

『目標物確認！ 距離、28000メートル』

「よし。航海手。このまま前進だ。目視で確認できる位置。そうだな。距離20000メートルまで詰める」

「了解です！」

男は不敵に笑う。まるで自分がこの世で一番の権力者であるかのように……。

場面は蒲原達に戻る。

3人ほど籐豪の部下に遭遇したが、敵を呼ばれる前に少しの間眠ってもらったことにした。

「何とか、ここまで来たな……」

俺の目の前に、小さなエレベーターが存在する。これを上げれば、敵の大將が待ち受けている。

浮上してから、それなりに時間が経っている。早くしないとあの巨砲が火を吹くだろう。

「紅葉、俺が前に立つ。エレベーターが到着するよりも早く、直視で艦橋内部の状況を教えてくれ……」

「分かったわ。雛霧さん。その籐豪ってヤツの特徴はわかりますか？」

「ええ。身長190センチの大男だから直ぐに分かると思うわ」

「よし、行くぞ……」

大きく深呼吸をして俺は、エレベーターのスイッチを押す。

エレベーターの現在位置を教えるライトが静かに点灯し、降下してくる。

SOCOMのスライドを引き、前のエレベーターに向って構える。ドアが開いたときに誰かが乗っていたら、乱戦になる可能性がある。敵に気づかれる前に片付けなくては。

順々に降りてきたエレベーターがこの階層で止まる。

「蒲原。大丈夫。誰も乗ってないわ」

紅葉の言葉通り、ドアが開いたエレベーターは無人だった。

「よし。行くぞ……」

3人でエレベーターに乗り込み、第1艦橋のボタンを押す。

低いモーター音とともにエレベーターが上昇していく。

壁に付けられた黄色の電灯がジジジと音を立てて点灯している。

上昇していくエレベーターが第1艦橋に到着しようとした時だった。

「なっ！ 銃！！」

紅葉の驚きに染まった顔を見た瞬間、俺は反射的にエレベーターのドアに右手をついた。

一瞬送れて、発砲音とともにエレベーターのドアに大きな衝撃が走る。

いくつもの銃火器から排出された弾丸が襲う連続的衝撃。

「何ではれてんだ！！」

「M16を2丁持った籐豪がコッチに向って発砲してる！」

「不味いわね！ 打つ手が！」

この間にも、激しい衝撃がエレベーターを襲う。

「大丈夫だ。必ず弾切れになる瞬間が来る。その時に飛び込む！」

ガガガガガガガガガガ……

銃撃が止む。

ドアにかけていた力を時、俺は敵から奪ったM16を持って飛び込んだ。

「ほう。なかなか面白い技を持つてるな」

臆することも無く立っていた籐豪が神業のような速さで懐の拳銃を抜き去る。

M16を構えながらも俺は横っ飛びに相手の視線から離れる。

「実に面白い小僧だ」

籐豪は引き金を引かずに、蒲原を追いながらエレベーターに、もう1丁の拳銃を抜き去り、それを向ける。

「デザートイーグル……」

雛霧はそう呟いた。

籐豪は、俺に視線を向けながらも明らかな死角に立っている紅葉たちには的確に銃口を向けている。

その両手で鈍く光るデザートイーグル。

「言っておくがおかしな真似はしないほうがいいぞ。俺は、見えていなくてもお前たち能力者の場所は分かる」

「籐豪！ アンタの目的はなんだ？」

M16の銃口を籐豪に向けながら俺は静かに呟く。

「目的？ 俺は、この国を統一する。腐りきった、東日本も、西日本もいらん。この俺が日本を掌握するんだ！！」

余裕の笑みとともに籐豪がおかしなことを呟く。

「それはたいそうな目的だ」

「残念だったな、小僧。三人では我々を倒せんからな。おい、そのままそこに立つとけ

壁際に立たされる俺たち。

拳銃は持っているものの、反抗した所で全滅だ。

追い詰められたな……。

『籐豪隊長！ 目標の20000メートル圏内に突入しました！』

「ちょうどいい。無能な東日本に罰を与えるときがきたみたいだ」

「何をする気！？」

「雛霧か。これが何だか分かるか？」

籐豪は笑いながら、モニターの電源を付ける。

「っ！！」

モニターに映ったのは、真っ白な大きな客船。

「飛鳥？……」



力なく雛霧の口から出たその名前。

「正解だ。全長241メートルの日本最大の客船としてデビューしたアイツだ」

「まさか！ そこに向って!!」

「その通り。あれに向って紀伊の主砲をぶち当てる!!」

「バカいうんじゃないわよ！ 今の飛鳥？には乗客、従業員、合わせて750人が乗っているのよ！」

「750人も乗ってるから狙うんだ。そこまでされたら、東日本だって黙っていられない。そうなったら東日本と西日本の全面戦争が起きるからな」

俺の頭の中で、最悪のシミュレーションが行われる。

全面戦争となれば、弱体化するのは東日本だけではなく西日本も同じだ。そうなれば籐豪の思うツボ。

弱体化した国家を侵略するのは、容易いことだからな。

「後は、俺の前に屈する日本を俺がいただくだけだ！」

「や、止めなさい!!」

雛霧が前に出る。

「アンタに必要なのは私のはず！」

「ほう。よく分かってるじゃないか」

「だから、飛鳥？を攻撃するのを止めなさい!!」

「やめろと言われてやめる馬鹿がいると思うか？ それに、アンタは俺の掌の中に納まっている。止める道理が見つからないな」

「くっ!!」

雛霧の顔が苦虫を潰したかのように歪む。

「おい！ どういうことだ!？」

「ん？ 何だ。小僧たちには話してなかったのか」

愉快なものを見たかのように籐豪が笑う。

「雛霧椿。それは偽名だ。本当の名前は、峰鈴園彩子

「峰鈴園だと……」

「そう、東日本の内親王殿下だよ。全く東日本も落ちたものだな」

「うそ……だろ。」

「ウソじゃないわ」

キリツと籐豪をにらめ付けながら、雛霧がそういう。

「でも、何で？」

驚きを隠せない紅葉

「私には特殊な能力があつてね。それをこいつらが悪用したがって  
いたのよ。だから私は、あえて、敵の陣営内に潜伏し、時が来るの  
を待っていた」

「灯台下暗しとはこのことだ。探し出すのにかなりの時間を割いち  
まったぜ。だが、おかげでこの紀伊の力を100%引き出すことが  
出来る。さて、茶番はここまでだ。そろそろ、あの客船を沈めるこ  
とにするか」

「ま、待ちなさい!!」

「ふっ。砲撃手。撃て！」

『了解しました!』

その一言とともに、紀伊の主砲が紅蓮の火柱を吹く。  
凄まじい爆音とともに、砲弾が飛び出る。

籐豪は満面の笑みを浮かべた。

『着弾まであと10秒!』

「終わりだ」

「残り5秒! 4、3、2、1!」

着弾までの秒読みがカウントダウンされた。

『主砲弾命中!』

遠く海の向こうで46センチ主砲弾が炸裂する。

その爆発力は凄まじいものだった。

「……」

内親王殿下は力なくへたり込む。

「ハッハッハッハ! 俺たちの時代の幕開けだ!」

「……さて、どうかしらね」

籐豪の笑いを見ていた紅葉が笑った。

「なっ！ 飛鳥？。健在！ それどころか傷一つありません！！」  
「なんだと！！」

射撃手があわてた口調に籐豪が驚愕したときだった。

「はあい。西部強襲部隊の皆さん」

紀伊の無線から、聞きなれた声が聞こえてきた。

「か、課長！！」

無線から聞こえてきた課長の声に俺と紅葉は顔を合わせる。

「こちらは、東日本警察特殊能力犯罪捜査課。アンタたちの作戦は無駄に終わったわ！ 直ちに投降しなさい！」

「き、貴様何をした！」

「紀伊の46センチ砲って、私の空間遮断の力に負けるのね」

「空間遮断……」

課長の発言で俺の頭の中の豆電球が回った。

そうか！

空間遮断は、対象物を能力で囲むと、対象物が物理的攻撃を受け  
なるとう能力。そして、課長は能力Aとされる強力な能力者。

砲弾が飛んでくると分かれば、飛鳥？を守るように砲弾が直撃する  
であろう、側面に空間遮断で壁を形成すれば、巨大な飛鳥？を全  
て囲まなくても、砲撃を避けることが出来る。

「くそ！ とんだ邪魔者がやってきやがった。だが、我々の船は、  
西日本の船舶だ！ 逮捕権は無い！！ それに、この船には人質も  
いる！」

「人質ね……」

年若い少年の声が、紀伊の無線に飛び込む。

「龍司！！」

「そこにいたか蒲原。えっと、籐豪だったか？ 悪いが、紀伊は俺  
と桔梗で、制圧させてもらったぞ」

「ぬかせ！ 紀伊には、武装した俺の部下が50人乗り込んでるん  
だぞ！ たった2人で制圧できるか！！」

「状況をちゃんと理解しないと長生きできないぞ。 たった50人で

私たちの相手が務まると思っていたのか？」

「桔梗！」

一気に形勢が逆転する。

「逮捕権の無い奴らが暴れまわったらどうなるのか知ってるのか！」

籐豪が吼える。

「逮捕権？ 今の状況を一番理解できていないのは、あなたのようなですね」

籐豪を小バカにするように話しかけていた声

「火神までいたのか！」

「仲間の危機は、皆で乗り越えるものですからね。さて、あなた方が乗っているのは、戦時中に建造された戦艦紀伊ですよ。戦時中の戦艦は全て、菊の紋章が付けられている。これがどういう意味かお分かりですか？」

「なるほど、菊の紋章がついた船舶は、皇室の船ということね！」

「正解です。紅葉さん。さあ、皇室の船舶なら、東日本の法律が適用できます。それがたとえ、東日本の領海でなくともね」

「蒲原！ 紅葉！」

龍司の声で、俺と紅葉が動く。

「小癪な！！」

籐豪のデザートイーグルがこちらに向けられる。俺は、M16を放り投げ、SOCMを握る。

あらかじめ、スライドを引いていたSOCOMを発砲。

だがそれは、籐豪に当たらない。まるで、こちらの発砲を予知していたかのような回避される。

次に火を噴いたのは、籐豪のデザートイーグルだった。

何とか、射線から上半身をずらす、だが掠めていった銃弾で袖が裂ける。

「ちっ！」

すかさず、紅葉が、二丁のUZIで応戦するが、室内なので跳弾

を避けるために乱射ができない。

「甘い甘い！ 甘いぞー！」

続けざまにデザートイーグルが火を吹く。

ヤツの持っているのは自動式拳銃の中では世界最高の威力を持つ弾薬を使用する、デザートイーグル50AE。

しばし、マンガやゲーム内で鬼畜じみた攻撃力や反動で描かれる拳銃だ。

よく小柄な人間や女性、子供が撃つと肩の骨が外れるなどという表現をされるが、現実では、射撃姿勢や扱い方にさえ注意を払えば、非力な人物でもデザートイーグルを撃つことは可能だ。

逆に姿勢を崩すと腕力が強くてもバランスを崩しやすい危なっかしい武器でもある。

そんな銃を片手で、撃つとは中々の腕前だ。

威嚇もかねて、俺もSOCOMで応戦するが全て避けられる。

全く、なんてヤツだ！

内心、舌打ちしながら次のマガジンを込める。あまり撃っていたらコッチが弾切れになる。「何だ！ その程度か！」

藤豪は自らの計画を邪魔され、かなり頭にきていた。

怒りで我を忘れ、引き金を引きまくる。

「俺は最強だ！ 俺は負けねえ！！！」

「紅葉！」

俺の呼びかけに紅葉がうなずく。

2丁のUZIを続けざまに発砲。

防弾チョッキを着込んでいる藤豪に9mmパレラム弾が吸い込まれるようにぶち当たる。この至近距離で撃たれたならば、その衝撃は凄まじい。

一瞬だが、藤豪の動きが鈍る。

その隙を見て、俺は突っ込む。

やられまいと、藤豪がデザートイーグルを突き出す。

俺は、右手で突き出されたデザートイーグルを掴む。

銃身が焼けるように熱いが、そんなのにかまっていられないほど、余裕は無い。瞬時に力をこめ、籐豪が引き金を引くより先にデザートイーグルの時間を止める。

「なに!？」

「これで終わりだ!!」

左足を軸に回し蹴りを籐豪の顔面に叩き込む。

「が、がはっ!」

ゆっくりとよろめき、籐豪はひざをつき、前のめりに倒れこんだ。

「はあはあ。午後2時37分。籐豪大二郎、及び、西部強襲部隊を逮捕!」

籐豪の手を後ろに回し、手錠を掛ける。

『よくやったわ。お疲れ様』

課長の声が無線から聞こえてきた。

「これで、仕事終了ね」

「ああ、終わったな」

艦橋から見える大海原を眺めながら、俺はようやく安堵した。

事件数日。

俺と紅葉は、帝都新京に戻ってきていた。

あの後、紀伊は横須賀の基地で一旦保管することになった。雛霧、いや、内親王殿下は、皇室専用の飛行機に乗り、帝都新京に帰省とともに、国民の前に姿を現した。

何でも、西日本で学んだことを生かしこれからの東日本を作っていくらしい。まあ、あの人なら大丈夫だろう。

藤豪たちかというと、東日本の刑務所に留置されるはずだったが、なぜか、釈放となった。

おそらく、西日本が裏から根回ししたのだろう。

西日本の地下街に住んでいた人々は内親王殿下の意向で東日本に来ることが出来た。

その時に、あの研究室にあった書類等も持ち出されてきてくれたので、戦時中の闇の部分などがこれから明らかになってくるだろう。

そして、俺たちは。

「蒲原！ 港区でバスジャック事件よ！」

「分かった！ 今行く！！」

俺たちは、今日も事件を追っている。

Stage 2 完

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8176n/>

---

BLACK CITY “特殊能力捜査官”

2011年12月11日19時52分発行